

增補雅言集覽

四十八

813.6

I 6199

Wxj



813.6
I 619g
Nnd



691364

増補雅言集覽卷之四十八

石川雅望集
中島廣足補

○幾の部

〔き〕綺(源 花の宴)十櫻の唐の綺の御直衣えび染の下がさね尻いとかがく引て云々あ
されさる大きみ姿のかまめきたるよて

〔き〕着(源 楨柱)廿よさうへの御ぞ柳の下がさね青よびのきの指貫着さまひて(古)上春
きのあ(源 櫻色)衣いふふくそめてきん花れちりかん後のりさみ(源 紅葉賀)廿八歌云々

うへよとりきばあるらんといふ(六帖)五、「紅のこぞめのころも下よきん上よと

りきばあるからんりも(源 帚木)四十御直衣をど着給ひてみかまのかうらんよをさ

しうちかめ給ふ(同 空蟬)八すゞいかるひとへひとつをきて(同 紅葉賀)廿いで此

直衣死んとの給へ(同 末つむ)廿八あやとなど老人どものれるべきものゝたぐひ

〔万〕十五あが衣をよをさませ(源 玉葛)四十ささるものゝさまよゝぬひひぐく

いくもありかゝとの給へ(馬ノタケ)五

〔き〕馬ノタケ(空穂 吹上)四十つるぶちある馬のたけやきをりりあるひとつ〇八寸を

へさる 檜原のそまのさびしきよたづきの音のそのかかるかか(同)同「瀧のおと松のひびきのさびしきよつれなくありを岩まくら哉(同)同「こゝ夢の春のこりれのかなしきのながきねふりのさむと聞まで(山家)下「世のうきは引るゝ人のあやめぐさ心のねあきこゝちこそまれ(同)同「世のうきをむりーげとりよなしをてゝ花たち花よおもひ出さや(同)同「なごりさへそどかく過ばりあしきよ七日のかををかさねむもがな(同)同「ぬるきども雨もるやどのうれしきいりこむ月をおもふかりけり(同)同「あそれたゞ草のいりのさびしき風より外よとふひとぞあき(同)同「めのまへよかとりもてよー世のうきは涙をさみもながけりるか(同)同「岩よせくあり井の水のわりあき心せめともやどる月うか(同)上「山里のそぐれー頃のさびしきよ霞のおどのやゝまさりけり(拾)戀五「こひしきをなくさめかねてをがいらやふしきよきてもねられざりけり(同)同「こひしき色よいでても見えかくにいりある時りむねよーむらん(同)秋延光「もまぢさを手こよをりてかへりかん風のこゝろもうろめさきに(古)人上よみ「うれしきを何よつゝまんなから衣たもとゆたかよたてといまましを(亭子院哥合)「逢見てもつゝむおもひのわびしきの人まよのそねいあかれける(新續古)人上高遠「秋のよのながき思ひの

くるしきのねぬよのあけぬものよぞありける(新後拾)釋教赤「今のとてときける法のかなしきのけふとかれぬるこゝちこそすれ(新拾)戀二よみ「こひしきもつらきもおかとおもひよてやむ時もなきわが心りか(新千)戀一清慎公「戀しきを人よいのそで人しれよよひくゝとよおもひつるりか(同)雜中、信「ひりりな死谷よ住身のかなしきのいくさび玉の數よもれけん(續後拾)雜中、土御門院「谷深死草のいりれさびしきの雲れとさーの明方のそら(玉葉)雜五「をとりおもふ心の末れかなしきの月みるよーの山れその雲(詞花)戀上「うれしきいりばかりりのおもふらんうれい身よーむものよぞありける(後)戀五、兼輔「秋のよれ草のどさーのさびしきあくれどあけぬものよぞありける(後拾)雜一、齋「すえをるゝとやこの月れさやけきよ何かくらの山のこひしき

きろく(狭)二、下「めのとたちあどひさろくゝとあし奉りても時の間の御命をたすけ奉りて見奉らんと(抄)サケ尼ノキラリトシタル心

きと 際(源空蟬)三 此きとよたてたる屏風も(同)四 小うちぎたつ物あいがいろよき
かして紅の腰引ゆへるきりまで(同)末摘(五)ふたまのきとを障子てづからいとつ
よくさして

きと 時分(源帚木)廿七 今やうくわをれゆくきとよかれとさえしもおもひをかれせ
きと 格式(狹)三ノ下ノ八 其日ハ一條の大路とさり給ふべききとの高き賤しき家々
のうちおもひいそぎたる牛車隨身小舎人云々

きと 限ノ(源柏木)十四 君の御母君のかくれ給へり秋なん世よかかき事のきと
よハ覺え侍りを補(玉葉)戀二「曉の別れきとよ忘れけりまたと思おぬ人のと
きハ(風雅)秋中章「わきてかどよるしもまさるうれへよてあくるをきとよ虫の鳴
らん(榮いハのけ)九。御葬これこそきとの御ありさまかりけれ(源柏木)十四よ
りかきことこのきとよおせ侍りを(万代)春上後「安達野の野ぎとのますけも
えにけりいそゆる駒のけしきあるしも

きと 折(源玉葛)十一 おりていくきとようたよまほしかりけれバ
きと 分際(源桐つは)十四 ちとめよりおへかべての宮つかへ給ふべききとよハあら
ざりき(同)常夏(四)かのりもものうけきとよおもふらんさらよこそきこえね(同

桐つは)初いとやんごとなきよまよハあらぬ(同)廿きとことにかいこくてたゞ人
よハいとあたらしけれど(同)帚木(五)とるかたかく口をしききとよいうなりとおせ
ゆをりすぐれとるとハ(同)夕かほ(七)めさまかるべききとよハあらんとおせ
ど(同)神(八)何事も人よもときあつりそれぬきとよやすけなり

きと なる(源若菜)下ノ七 いくをくえまねびとらぬよハあらん此がくほのかかる
女たちの御中よひきませとらんよきとよなるべくこそおせえね
きと かねぬ(源若菜)下ノ八 をきとよきとよなれぬものよとべるを

きと けい(源帚木)四十 いとかやうあるきとよハ何とこそ侍るかれとて(同)末摘
六。源ノ末摘チカイマミセサセ ヨト命婦ニ仰セタマフ所ニ 俄よこれハ人も打とけてか
さとどこをあれかと云々○男女ノ忍ヒワザスルハ貴人ハ貴人下チ賤キモノハ賤キ
モノドチニ語ラフサバハ何とイヘルナリ

補 きとをかむ(宇治拾)廿三 ちなをふきいからし牙をかみひげをそらしてるより
(万)九ノ 廿六 きりみとけびて

きと 黄檗(枕)三ノ十一 ことへかき物、藍ときとたど
きと いたか(續世繼)五ノ廿六 御心をへのきとたかよおせしけるよハ三條のあし宰相と

會甫佳言集覽 卷之四十八 四

ぞ人の申侍り

きとたけく(狭)十六上

ものよ少きとたけき迄すくよりよけたりくおもりりなる

御ころよてわが御せくせいと口をうおせりつゞけらるよ(源少女)廿四よりら

ぬ人のことよつきてきとせくおせりの給ふもあたまかく(榮玉の村菊)卅八これの

前の齋院ときこえさせればあかちよおそろかるべきことならねと院のいとさ

とせくおせりの給せざるがいとかたそらいさきをかん皇后宮いといみとらみた

れさるよ(とりあへ)卅三よよあらばこそよのそりをおせさめときこえ給ふをさ

またけく見下とそちちて、も月ころのそぐるまよ戀くくりかしくて

きとなく(カギリ)源梅のえ(ナク)二十万の事むりよのおどりさまよあさくありゆくよの

そをあれどかんかのみかん今の世のいとさとなくなりたる(同)廿九(下)さえと

いふものいづれもきとなくおせつ

○きともあき(源幻)廿「君こふる涙のきともあきものをけふをばなよのそてと

いふらん(同)藤の裏葉(三)男のきともあきよらよおそを(新後)秋下「あくがるよ

ころのきともあきものを山のそちりき月のかげかか

きとむ(源玉かつら)四十みちのくにぐみのすこ一年へあつきがきとみさるよ

きとやり(枕)三(橘ノ)花の中より實のこがねの玉りとみえていみとくきとやり

よ見えさるおと(榮音)三手をするもあそれよてえきとやりよもおのせ(源す)む

し(二)ありの具の例のきとやりよちひさくて(枕)九(一)そいのいとさとやりよ筋りひ

たるもをり(同)七(六)出てこれをおどろくうきやりあるといふよ

きとまる(極)源明石(四)かよまりりのあやまちよてり此汀よ命をさきとめん(同)八

我りくりかみきをきとめいのちつきかんとつるを(同)澤標(七)太政大臣よて位を

きとむべいと見る人申さり(万)卅三「いとむをせむすべあらよきとまりて

さふときもの酒よあるら(同)卅二「きとまりてこれもおもむとおもへとも

人の言こそおけき君かれ(同)卅七(長哥)かさらひてこ一日のきとまたまぞこのみち

をたとほ(同)卅二(長哥)わりれこ其日のきとみあらさまの年ゆきりへり(同)卅

五十あかき心をせめらへよきとめつくして(同)六十一「天地をてらを日月のきとみ

なくあるべきものを何をりおもせん

きとまりなく(うつは)樓の上(下)四(下)たまくたいめん(の)ありがたくて侍りりりバ

きとまりなくこそうれしく思ひ給へてりバ

きとなく(ホド)源(の)あ(上)十三人のきとなくおせりわきまへつ(同)帯木(四)十

(同 寄生) 四 故宮の御忌日よれいの事ともいとたふとくせさせ給へりけるを (釋氏要覽) 下五 二月十五日佛涅槃日天下僧俗有營會供養即忌日之事也遠忌の日 (千載) 哀 大納言公實身まりりてのちかの遠忌の日 (玉葉) 四 父の遠忌よて仁和寺へまかりけるよ 大藏卿行宗

きりふ (一) 万 (三) 子らりいへちや、まどなきをぬべ玉のよとたる月よきはひあへんりも (源 橋姫) 十 川なまよきはひてきこえ侍るいとおもいろく (夫) 四 源 仲正 山ざくらさきりひさづぬる人りきよ身をうさぎまのうかりぞゆく (源 椎か本) 七 人々あまたまゐりつとひものさごかくてきはひるへり給 (榮 うたがひ) 十 此御堂の夫やく材木ひいた瓦とおおく參らすることをわれもくときほひつりうまつる (源 藤の裏葉) 四 心あこた、しき雨風よまかりとよきはひるへり給ひぬ (榮 根合) 廿

うち大殿のき、給ひてきりひがなりやとておぞいとまりぬ (万) 八 五 けふ、りい雪よきりひて我やとの冬木の梅の花さきまけり (新古) 雜上 紫式部 せやくよりこらんともたちよ侍りける人の云々 月よきりひてかへり侍りければ (源 蓬生) 廿 さまとよきりひちりありれうへいもの人々これもく參らんとあらそひいづる人もあり (同 總角) 七 七 あらまよき風のきりひはほろくとおちみたる、木のその (同 總角)

四十 あらまよき風のきはひよいとまなまめりくきよらよて (新古) 雜上 云々 七月十日 比月よきりひてのへり侍ければ

〇きりへる (源 帚木) 三 風よきりへる紅葉のみたれをどあわれとけよ見えたり (同) 廿 子どもの思ひがほよてあれさる家の露けきをあがめてむいのねよきはへるよ 一き 云々

きはひ (体ノ語 源はつね) 十 ませてかたのまぎらひき、はひよもおのづからかん (同 見かき) 上 朱雀出家の 尼よかりなんと覺れたれどかゝるきはひよい 志さふやうよ心あこた、しといさめたまひて

きはひ馬 (夫) 廿七 一きりひ馬のつゞみよ我をうちこめていざよもてぬ世よこそ ありけれ 補 (職人盡歌合) 一くる、まで待おくれたるきはひ馬の心からせや月よの するらん

きと (チャット) 七 かなるておそいまさんとて御こしをよせ給ふよこのかくや 姫さとりけよかりぬ (古事談) 五 御本地の何よておそい候やらんと祈禱してき と睡眠の間 (發心集) 九 やとよかへりてのどりよきこえんとおもふよとよ衣袈裟の上よありつる廳宣さよおきてきと立出るやうよてやがていづちともおくりくれ

七

七

七

七

七

るとぞ(同)六ノありー女が家を過けるよきとおもひいで、さてもありー子の五を
 かりよのありぬらん云々此娘いとあやうなる帷子をぐさよて云々かさちをぐれ
 このもーきやうかるをそれよとみるよきと胸つぶれていと口をくみたてるをど
 よ(釋慈圓百首和歌跋)うたふぎのものよて候かりきとうちみるよおもーろく
 あーのらむ覺え候へども次の日又々見候へをゆゝくみさめー候(著聞)十七きよ
 夕かる女の川の水をくみてみづからいたゞきてゆく女ありけり氏長きとみるよ心
 うできて只よ打過べきこゝちせざりければ(とりかへせや)一内へや參らまーかど
 かがむるよ内よさうのこのねののかよ聞えさるよきとみ、またとまりてさから
 んりーとおもふよ(撰集抄)八いとやすきやうよ覺えて侍れどもきとさる人の御前
 かどよてみ、をよろこべーむる事ありがたきことよ侍り(同)八御門たりむらを
 めされて御前の野べのけーきをきと詩よつくりて奉れと仰ありなるよとりあへせ
(今物語)きとみりへりたりければ云々といひけることのおもひいでられけれ
 ば(阿佛うゝね)七きとむねふたがる心ちをるを(宇治拾)三經をいさとうちあけ
 てよみたりなるふと聲をかりまでい小式部の内侍きとみ、をさつるやうよーけれ
 ば(同)十五局なる女よものつきて申ていそく別の事よあらせきと目みいれ奉るよ

よりにかくおそーますかり(同)十七かそつるみいつをかりよてさふらひーぞと
 問たるよ此僧首をひねりてきとよべもーてさふらひきといふよ(同)十七鳥のどび
 て通りけるがゑどをーかけけるを晴明きととて(同)三六弓をひきて鹿よをさぐひ
 てそーらせてゆく道よ寺ありけりそのまへをすぐるをどよきととやりたればうち
 よ地藏立給へり(同)五みさうトかといをこーふりたるをどよととみるほどよ中の
 さうト引あくればきととあけたるよ此子と名のる人あゆみ出たり云々みさうトを
 引あけさせ給へりーをきとみあけ參らせて候ひーよ(同)六帝釋よもまきりたり
 といひけるを帝釋きと御覽下り(同)廿四法師の事ありく仰られさるよて日頃
 伺參らせつるをみて候をどよ告參らせさやと思ひながら我身かくて候へばとおも
 ひつるをどよあからさまよきと立をかれまらせ候ひつるをどよかく候ひつれば
 つひちをこーて出候ひつるよあひまららせて(右京大夫集)七うちあんとたるは
 ーきもなくてきとひきをばめそりなきも、そーにりきて(同)八その夜よかりて
 二條殿へきと參るべきよー仰せをどーて(宇治拾)十九榻をめーよせて御尻をりけ
 て晴明よきとまられとめーつりそーりなれば(續世繼)三其人門ををぐることの
 有けるを云々きと立ながらいらせ給へとおひつきていせせければ(十訓抄)廿一日

比よりも此二三日のことよむつかくおそくませば局たよも立入事もなくかく度
 度よかりたるをなさけかきりたよやおもてせ給ふらんとてきと立かがらとおもひ
 て参りつるかり(著聞)六元政八幡へまゐる便よきと申べき事ありてまうでたりと
 いひければ(十訓抄)十五ノ相撲ノ論不肖の身今度すて本手の脇をゆるされぬま
 ことよ申さるゝ所のがれがたし但きと心見給へりしと申よ(發心集)二只きと立入
 給へ(今物語)女の家の門をやり出されけるがきとみりへりたりぬれば(宇治拾)二
 四腹の上とおぞしきほどをさぐりてつかんとおもひてかひなをもちあけてつきた
 てんとをる布とよ月影の板間よりもりたりけるよさぬきのくゝり長やうよふと
 みえぬればそれよきとおもふやう我妻のもといのかやうよさぬきゝたる人のよ
 もこトものを(同)五ノ塔のもとい古き地藏のものゝ中よをて置たるをきと見奉り
 てときよきぬかぶりたるを打ぬぎ頭をりたふけてすこくうやまひをがみつ
 つゆく時もあり(讚岐典侍日記)つねより急ぎさるるよきよてきとおそくませ
 三位殿たえ入らせ給ひぬと云て(著聞)坊門院よ年來召つかふ蒔繪師ありけり仰ら
 るべき事ありてきとまゐれと仰られたりければ(三部抄)きとひるがへさん事かた
 りるべし(隆信集)云々きとおどろきたれば

きとふ 來問(和泉式部集)下「橘の花さく里よすまへともむかゝをきとふ人のなき
 かか

きとく (宇治拾)八、やがて御志され奉りてきとくよく申さるぞとおほせでと
 候へを(著聞)十六、たゞ今内裏へきとまゐらせ給へかろくきとくといひけ
 り(同)十六、こまつかきをきとくまゐらせよとおせられけるを云々さも候はす小
 松まききとまゐらせよと仰候へば

きときて (土佐日記)「きときて川の水をあさみ舟もこが身もなづむけ
 ふりな〇からくしてきてハ也

きつと 急度(盛衰)十一、云々よみて涙ぐみたりけんこときつと思ひ出給ひつゝ
 袖をぞうるべし給ひぬる(同)十二、宿所よおちつき給ひさりければ宰相をそとめ奉
 りみなよろこびの涙よむせびて急度ものいふ人もかかりけり(平家)七、ろゝるを
 うけきの中よもきとの御をぞりきつと思ひ出参らせ仁和寺殿へもせ参り云々(同)
 十一、是もつてあべのやすちりもとへ行きつと見りへさせてらん状をもとりて参
 れとぞ仰ける(著聞)十六、たゞ今内裏へ急度まゐらせ給へ(平家)十二、るんの御所へ
 参り大膳の大夫をよび出てきつと申さんむることハよな

さちかろ 桔梗(古) 物名さち 秋ちかろのりかりよけり白露のおける草葉もいろり
そりゆく

さちやう 几帳(源葵) 四十 ちひさき御几帳ひきあけて見奉り給へば(同 夕かほ) 十御
几帳ひきやりたれば(同 空蟬) 三まぎるべき几帳をどあつければよやうちあけて(和
名) 十四 釋名云帳 云々 今按帳属有几帳之名所出未詳(源 維ウ本) 廿黒き木丁のまき
り夕のいとこへろぐるけかるよ 〇 服者ノ几丁(同) 四十 たりきもみどりきも木丁
をふさまのまよおしよせて

吉上(榮) のぐやく藤壺(四) ちんの吉上衛士仕丁迄(著聞) 十六 近衛左兵衛の陣の吉上
皆是を聞けり(榮 日蔭葛) 十 御前よひたき屋する陣屋つくり吉上のこととくけに
いひ思ひたるけいさよりことおこりてさふらひの長ともあさせ給ひさまとくこと
ことけいさみえさり(本朝文粹) 廿七 散樂得業生正六位上兼腋陣吉上秦宿禰氏安
(禁秘抄) 所衆瀧口等有咎下寮於殿上口給之馬部相具罷出深重ノ時ハ忽於殿上口切
伊引入帽子如面縛引張出有例余人同之或給吉上

○馬部吉上 或云衛士ノ中ニテ上日上夜ヲヨク勤シ者ヲ頭トシテ云ナリ 出せり
さちやう天女 吉祥天女(源 帶木) 廿 吉祥天女を思ひかけんとそれば(空穂 初秋) 十
六

みんなこころとめられぬべき心ありて吉祥天女よもいりせまるとおもせつ
べき大將なり(補) うつや 嵯峨院(廿) 天上のさちとやう天女もたるもの、

さり 桐(夫) 十五 「そともなる桐のひろまよ雨おちてあさけをさき風のおと哉
霧(千載) 堀川 「秋のさりきりすぎぬれば雪ふりてもるまもあきまやまべの

里〇按み霧を秋のものとするのつねありされど春夏よもよめり(万) 七(風雅) 春中
朝ぎりよあぬまぬれてよぶことりとふねの山ゆなきこたる見ゆ(新拾) 夏後宇
「うりひ舟うきて箒のみえゆくやたつ川霧のたえまあるらん

補 うまきりて(風雅) 秋下永福 門院内侍 「つゆふうさまがきの花のうまきりて岡べの杉月
ぞかこふく

さりをか(發心集) 七ノ河より切花のかうの流れ出さるあり
補 さりをい(山家) 下一鹿のたつ野べのよきさのさりをいへのこりおほかるこち
こそせれ

補 さりよさり(宇治拾) 廿八 むねをさりよさりてやませ給ひり
さりよさる(堀次) 夕立 夕立のさりよさるとも梓弓いるいてさへなくれも有哉

さりとほ(古) 戀一よみ 八しらす 「よしの川いとさり通ゆく水の音よたてとこひい

ぬとも

きりわたる(源 紅葉賀)四いみどろ霧こたれるそらのたゞからぬよ

きりかへて(詞花)下藤原實宗常陸介よ侍りける時大藏省のつりひともきびく

せめけれバ匡房よいひて侍りけれバ遠江よきりかへて侍りけれバいひつかさけ

る「つくを山ふかくうれしと思ふりかをまかのさしよわたを心を 太皇太后官肥後

○大藏省ノ使此省ハ諸國ノ租税ヲ掌ル諸ノ公事ノ中切下文ヲナシテ國々ニ支配セ

シムト職原抄ニイヘリ切下文ヲナシテ諸國ノ貢調ヲ致サシムル使ノ急ニ國守ヲセ

メタルナルベシ

きりかけ(宇治拾)七其おそしき、かたをらよきりかけの侍りしを隔て、それが

あかたよさふらひいかばあらせ給ひたるらんとこそおもひ給へといへバ(類聚

雜例)山作所四面立切懸爲荒垣(大和物)二をうといふ法師の云々此大とく坊よ

しける所のまへよきりかけをかんせさせける其けづりくづよかきつけゝる「まが

きせるひたのたくみのさつきおとのあかかゝがまゝをぞやよの中(源 夕かほ)二き

りかけたつものよ青やうあるかづらのこゝろよけよむひかゝれるを(更科日記)關

ちろくかりて山づらよりりそめあるきりかけといふものゝたるかみより丈六の佛

のいまたあらづくりよおむするがかり見やられたり(江次第)十五節帳座試

七丁 殿垣下四角各設假切懸(補)○文雄云今俗の板塀といふものゝとくなるもの也

(宇治拾)七、水干のあやしけかりけるりころびたえたるを切りけのうへよりかけ

こして

きりたち(著聞)十一、成房よ仰せて切立せられて鞠のためよ家平めされけり○切立

ハ根ナキ木ヲ切立テ四本ガ、リニスル事ナリ(補)(著聞)十一、久繼よ仰て切立をせら

れて常よ御鞠ありけるよ(二條皇太后宮大貳集)おあト人おあト殿のひんがしおも

てよきりさてをいおきて

きりのまがき(源 若紫)四「さちとまり霧のまがきの過うくバ草のとさしよさひり

しゆせト(菅方)「君よとせんことやゆゝしきをみなへし霧のまがきよ立かへるら

ん(好忠集)「山里よきりのまがきのへたてをバをちりよ人のそをよこてまゝ(源 夕

きり)八 家路のみえせきりのまがきの立とまるべうもあらせやらせ給ふ(同 寄生)

五霧のまがきよ花のいろくおもしろうみえこゝる中よ朝りほのそりかけよ

まどりよるを(補)朱雀院女郎花合)「さやりよもけさのこえせやをよかへし霧のま

さりのまよひ(十六夜日記)こゝの夜ふりき霧のまよひまたどりいでつ(源若紫)四
「朝がらけ霧とつそらのまよひも行すぎがたきいもが門りか(万)十三「春やま
のさりよまどへる鶯もわれよまさりてものおもとめや(源野分)十さりのまよひ
いとえんよぞみえける

補 さりの一たつゆ(新勅)秋上一ふみわけむ物とも見えき朝がらけたけのもやまの
さりの一たつゆ家隆

補 さりの一づく(草根集)「旅人の朝ゆく路よそゝぐらん袖よりおつる霧の雫を
さりくたく(拾)別よみ人「さかるゝををしとぞおもひつるぎをの身をさりくたく
こゝちのもして(蜻蛉日記)中身ひとつをのみさりくたくこゝちを(同)同心をさ
りくたくこゝちす四本

補 さりふ(壬二)上「も一たりのさりふの岡の竹のつゆをとぶさの鈴とみがく月り
け

補 さりふる(治暦三年備中守定綱朝臣家歌合)霞「あさまたさふる秋霧よゆふさ
れの春のかきこいちまさりけり(赤染衛門集)「いとくさりふる空よひぐら
ゝのあくやをぐらのこりあるらん(檜垣集)「たちきりきりのみあどりふりく

らん時やも秋のせきよいりぬる

さりふさがり(源みのり)八ふしてもおまても涙のひるよあくさりふさがりてあり

しくら給ふ

さりて(催馬樂)紀伊國風もふいたればかさりもたてればまをこさりてそれ

その玉とえぎ(風雅)冬祝子「霜さひき朝けの山のうをざりてこはれる雲よもる
日影うな

さりく(宇治拾)四十またらあるくちあものさりくとしてぬたれば
さりくとかく(六帖)六「寛平哥合」かりがねの羽風をさひみもたおりめくたま

音同く聲のさりくとかくする同
補 さりみち(馬内侍集)「志のぶれば空よかまたもきりみちてこひき人やいとゞ
あるらん

さりびと(盛衰)卅九當時の鎌倉殿のさり人よて御きよくよき女房かり

さりびをけ桐火桶(袋草紙)三四連哥周防かきみこめさる桐火桶りあ永一花やさき
紅葉やをらんおせつりあ

さりもの(平家物)廿四院中のさり者よ西光法師といふものあり(同)三十これらの

さうあきりりものまでぞありける

きぬ(源 帶木)廿なへたるきぬとものあつてえさる大なるこようちかけて(同 桐壺)

五うちをいさたどのこゝかすこの道はあやしきとさをいつ、御おくりむりへの人

のきぬのすそたへがさうまさかきことゞもあり(古) 雜上「たちぬをぬきぬきし人

もかきものを何山姫の布さらすらん(源 帶木)卅うへがるきぬおしやるまで云々か

不まきぬのさそりておとにもたてせ

きぬいと(重之集)「くもぐらの里のひきまゆひろひおきて君が八千世のきぬいと

ません(兼輔集)「たなをたのおふゆふぐれのきぬいとを秋のをさまよくよへ

ぬらむ

きぬりづき(弁内侍日記)卯の日のせいを堂の御かぐら也云々きぬかづきかさなり

てさらま道を(代始秘抄)殿上の淵酔の寅卯の日の事あり云々貫主の人組をとき

亂舞の事ありきぬかつさといひて女房かど見物せしことゞも昔ありける(補)

今川了俊和哥不審きぬかづきをけさうせられける云々(著聞)卅十六わづりあるこ

まらのちりもきぬりづきいたるをかき出したりけれ

きぬかぶり(袋草紙)卅四長元の歌合の日能因きぬりぶりしてひそりよ入て云々

きぬがさ(万)卅三「久方のあめめく月をつかまさいわが大王のきぬがさよせり

(補)きぬた(新勅)秋下「衣うつきぬたのおとをきくかへは霧さつ空は雁ぞかくがる

好忠(拾玉)七「ころも打きぬたの音の曉のかねの哀よつゞきぬるるか(玉葉)秋下(醍醐)

政大「衣うつづがふせやのいたまあらまきぬこのうへは月もりよけり(續千)

臣秋下(光明)峯寺入道「ころもうつきぬたの音も高圓の山の木のまは秋かせぞふく(同)

前攝政左大臣同今上御製「いそぐかる秋のきぬたの音よこそよさむの民のこゝろをもうれ

きぬ(古)戀三よみ「志のゝめの不がらくと明ゆけおのがきぬくゝがるぞ

かかきさ(遠鏡)一ツコナツテテ居タ二人ノキルモ(補)新古(戀三)「あけぬれとまた

ノガ別々ニナツテワカレルガサカナシイ(讚岐)

きぬ(枕)八「鶏のひなのあしたりまをろりけよきぬみどりあるさまして

ひよくどかきましくかきて

きる(古)春上「春のきる霞のころもぬきをうせと山風よこそみどるべらなれ(源)

帯木(廿)きるべきもの常よりも心とゞめたる色あひささいとあらまほしくて(伊)

勢物(初)段そのをどこぞのぶせりのかりぎぬをなんきとりける

きる(断)神代紀上三拔劔断之伊勢物(初)段かりぎぬのすそをきりて歌をかきてやる

(土佐日記)わろす、まよて手をさるく、(同)つめのおがくなりたるを見て日どかぞふればけふの子日なればさらせ(後)神無月の一日女とそか男たりけるを見つけていひおどしてつとめて「今いどてあきまてられし身なりともきりさつ人をえやの忘る、(補)月詣(戀下)今さらよいひないたしをかつまこの池のつゝみ昔きれよきさる、(宇治拾)八、身もさるゝやうよ心もいみこりりて

さる着テ順集)七十一月加茂の臨時祭よ「千早振かもの川ぎりさる中よあるさひすれる衣かりけり○源氏よめもきりてといへりそれよさるをかねたり(拾)哀朱雀院御四十日の御法事よかの院の池の面よ霧のさちわたりて侍りけるをきて致忠君なくて立朝ぎりの藤衣池さへさるぞかなかりける着ルニヨ

補さる(拾患)上鷹符「とまるかよかりをのゝり衣雪のみざれよ空のさるとも○さらふクモルヲ云テ用ノ語ナリ霞ハソノクモリノ体ノ語也(万)二「秋の田の穂の上よさらふ朝霞いつへのりたよ我こひやまん

○さらせ さらし かりて(源 行幸)七あかねさす光のそらよくもらぬをかどぞみゆきよ目をさらしん(同 帚木)四十御りきさまも目もきりて心えぬせくせうちをへりける身を、本目もきりふたがりて

補木をまかれたる遠(赤染衛門集)「たよりなき旅といこれぞおもひつる木をまかれたるさるもあくかり

さをり(盛衰)三おなりさふらひのきをりよこまゝかりけるが
さりへ 着替(源夕きり)三ひとへの御をそころびたるさかへなど給て(同 わら紫)七
四十とづからもよろしきぬきかへてのりぬ(同 末摘)九御直衣めして着るへ給ふ

補(宇治拾)十六、きかへどりよせてきかへて
さかよふ(源 夕顔)六むらからかど宮づかへ人よてきかよふと申を(同 手習)廿時々ぞさりよひける

補さりむ牙カミハガ(万)九ノさけびおらひつちをふとまきとさけびて
さらく(後)冬よみ人「ひとりぬる人のさらくよかみを月よむらよもふる初いぐれ哉(古)戀五よみ人「それをたよおもふことゝて我宿をまきとさいひを人のさかくよ

(曾丹集)「おりたちておのびよ淀のまこもかるあかまあらぬ人のさかくよ(万)十四きよきせの音をさらくよよも補(大和物)「さき人をきまきりくよりけととてなくくゝのぶとさうらみを(万代)夏元真「布とぎをこぞのまつこゑありざり一人のさらくよまづもあうらん(新千)戀一よみ「山川のたぎつ心をせきり

ねて人のきりくよかけきつるかか(新續古)夏能「かけやかけ山ほど、ぎを春くれば物さびりける人のきりくよ

きりせ不許容(源明石)廿四内よ入てそ、のりせとむせめいさらよきりせ(同橋姫)卅七

かきからし給へとあなたよ聞え給へと云々ひきいりつゝとあき、給せせ(伊勢物)五十一

段「ゆく水とまぐるよそひと散花といづれまて、ふことと聞らん(源朝)五十内々よせいの給さんいさ、侍らせ云々(枕)十四、それを制してきりさらんもの、事のよしを申せかといひきりせて(源浮舟)六十。時方侍従ヲ馬よのせんとせれとさ

らよきりねばきぬのせをとりて立をひてゆく
きよる來寄(土佐日記)「と一比ををみし所のおよおへさきよる波をもあせれとぞ見る

きよるかみ(万)に來寄る波といふよおな
きよがき(新古)雜下權中納言通俊後拾遺えらびけるころまづりたそしゆゆりかど申て侍

ければ申あせせてこそとてまた清書もせぬ本をつりそし侍けるを見てかへしつり
そそとて(十重垣日記)五十首の和歌をよとさりけるとときよがきちりへぎくたされり

きよら(空穂 初秋)一白かねのかそらけくた物から物いときよらよして參らせ給ふ

(同)卅一かぎりなくきよらある御りさちどもまいて御志やうぞく奉りて(同)卅夕り

けよあやしく物のきよらまさるるどに(伊勢物)四十一ときよらあるろうさうのう

へのきぬを(空穂 藤原君)十兵衛が君いいまかんいときよらよなりぬるときこえて

(同 嵯峨の院)五十八の宮も宰相の御むせめをえ給ひてむりへてさふらひ給ふわれ

もくゝときよらをいつゝ(竹取)たてる人ともいさうぞくのきよらある事ものよも

よせ(源 桐つね)三世よかくきよらある玉のをのこみこさへうまれ給ひぬ

きよむ(拾)長哥あそれわれ云々つみをりあるものからばてる日も見よといふ事

をどしのををりよきよめせいご身ぞつひよくちぬべき
きよく(枕)十二清枕草子ヲきよう隠したりと思ふを涙せきあへせこそかりよけれ

(同)十一内よどのいものもてきたらんと待つよきよくとえせあざやりあるきぬ
の身よもつりぬを着てさむきまよあくみもたらたてとかひな(同)十七まづり
き人の哥の本末とひたるよふと覚えさる我ががらうれ常よハ覺める事も又人の
問ふよいさよく忘れてやとぬる折ぞおりる(空穂 嵯峨の院)九十擬そうのふたい
とらせ給えんとせればあるいさよくきたるもありあるいかりらかきさるもあり

きよまさり(源わらふ)上五いまいもけさやりまさまはりてたちよこが名今さ
 らよとりりへ給ふべきよやとおぞおこして(宇治拾)九七日水をあま精進を
 して習ふことありといふ其まよ清まもりて(源あふひ)八かの御息所の齋宮の
 左衛門のつりさよ入り給ひければいとゞいつくさ御きよまさりよことづけて聞
 えものよひ給もせ(同浮舟)廿みかさうとまきよまさりてあるよ(和泉式部集)上の
 たらふ人のきさりけるをきよまさることありとてかへりければ「ちぎりをさか
 ふべりやいつくさあらみまいみきよまさるとも(大鏡)八八幡の放生會よの
 御馬奉らせまひを御使かどよの淨衣を給もせ御みづのらもきよまさらせ給ひ
 ーり(允恭紀)五齋戒(延喜式)大殿祭齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留(瀧松)下いふかひをかき御なのたちまちよきよまさらせ給ふべきよあらせ(宇治拾)八魚どもくひ女よもふれてきよまさることあくて(山家)下「いりかれば塵
 よまとりてまを神よつかふる人のきよまさるらん(中臣壽詞)恐美恐美母清麻波利
 仁奉仕利

きよけ(源帚木)廿九いときよけにせうをこふみよもかんあといふものをかきませせ
(同空蟬)四髪ハ云々さがりを肩の布といときよけよ(同紅葉賀)廿此内侍常よりも

きよけよやうたいかいらつきあまめきて

きよめ(源行幸)十よろづの事よつけてきよめといふこと侍ればいりゞのさもどり
 かへりすゝい給もざらんと

ぎよみ(魚味)増鏡四御くーけどの、御腹の君宮も三よからせ給へる承明門院よて
 御魚味きこーめーなどせべー

きよみき(清御酒)散木四一きよみきのひとりをされもかたふけてまひをつみ見ぬ
 人のあらドか

きよー(宇治拾)十四師の僧きよかりけり八十のものなり法華經を八万四千部よみ
 奉りさるものなり別ニ出ス

きたそー(榮玉の臺)二十七寶のきたそーよひさまづいて

きたよむかへるよひの行ひ(夫)廿六「我君をちとせといのる時かれや北よむかへ
 る宵の行ひ(注)息災法の北よ向ふゆゑをかり時の初夜を取てそト北辰祭カ

きさる(源蓬生)十大貳詞侍従のむかへよかん参りさる(同)十云々どやろく
 思ひなり給ふよ大貳の北方俄よきたれり

きたれ(着垂)枕九かがまびつよまかくるたる人々からきぬきたれたるほどあり

補 きたつ 來立(万)九ノ十八 かあどよ一人のきさて

きたかく 一(兼輔集)(後)二戀一人をかるこゝろのうちいささかくてきよききぎ

さをいりで行らん(神代紀)上ノ十四 汚穢之處(源 東屋)三 守もいやしき人よのあらざり

けり上達部のまぢよてかからひも物きたかき人ならせ(榮 松のつえ)五 いつり

ときさかきさぎをうかけ奉らせ給へば御を奉りかふるほどもめでと(神代紀)上

二 吾元無黒心(源 明石)五 いよへのこともみりて物きさなからきよーづきたる

こともまどれ、バ(万)四ノ五十四 「いりからむ時よか妹を擇生の穢屋戸爾入まさせな

ん

○ きたなむ(發心集)四 此病よいたりていといひきたかむ人のみありてちりづき

あつりふ人のあるべりら

きたかけ(源 帚木)十 かたきたかけかく若やらるるぞの(同 椎か本)六 へいと

る人もきたかけならせ(同 末つむ)三 きたなけあるいびらひきゆひつけたるこいつ

き(同 玉葛)十 手かどきたかけかう書て(伊勢物)百三 さる哥のきたななさよ 補(大

和物)四 先帝の御時よあるとさうトよきたなけをかきわらひありけりまると御らん

トてとそりよめしてけり(竹取)翁詞 かさトけなくもきたかけある所よ年月經て

逸とぞ人のいひける

きたそれ(著聞)十六 方々よけのがれよけれとよくきたそれさるよよりてうとめ増

きさかき物(宇治拾)十二 もいきたかき物を大なりと聞しめしさるり人のよりの大

し候へども今のねりぎぬのやうよきたしとかりたる物を

きたのかた 北方(源 桐つは)三 母きたのかたなんいよへの人のよーあるよて(同

蓬生)七 せ領の北の方よかり給へるありけり

きたのおさか 北叟(夫)卅五 一いよへの北の翁もあるものをかどあやよくよ世を

かけくらん(土御門院集)「心をバ北の翁よからへどもまた立かへる駒たよもか

(夫)卅五 内大臣 「心をバいりよからせん方もか北の翁よ身けりぬども

きたのまん所(源 わかな)上、六 北の政所 紫ノの別當とも人々ひさるて 云々

きたのふぢかみ 北の藤波(詞花)雜上 一春日山北のふぢなを咲しよりさうゆべいと

ひらねてありよき(袖中抄)藤氏ノ四家ノ中ニ北家ハ一人ノ流レ也ソレヲ北ノ藤

波トハヨム也 補(新續古)雜上 前大 一かまが山よそよ成ぬる身よあれど立ちへり

見る北の藤なみ(新古)賀攝政太 一春日山よこのをかみちりぞおもふきたのふぢ

なみそるよあへと

補 きたけ 北風(堀百)海路「もどめ塚おまへよかゝる柴舟のきたけにかれやよるり
たをかゝ

きたふ 補 (字鏡) 針支太 鑷支太 比加 補 (著聞) 十六 方々よけのぐれよけれとよくきたむ
れたるよよりて

補 きため 罰 (詔詞解) 六、四 支多米の罰字の意、當てる言也皇極紀に東國不盡河邊

人大生部多勸祭虫於村里之人曰此常世神也祭此神者致富與壽巫覡等遂詐託於神語
曰云々 於是葛野秦造河勝惡民所惑打大生部多 云々 時人便作歌曰禹都麻佐波柯微騰

母柯微騰枳舉曳俱屢騰舉預能柯微乎字智岐多麻須母この岐多麻須よて此言の意を
あるべし

補 きれ 切 (大和物) 三 いとかうさきかみよきれかる髪をすこーういわがねてつ

つみたり (和泉式部集) 宮法師よなりて髪のをきれおこせ給へる 云々 髪のをきれ

補 きぞ 昨日 (万) 二ノ長歌 衣からばぬぐ時もかくわがこふる君ぞきぞの夜いめよ
みえつる (同) 四ノ昨夜雨爾

きそく (續古) 神 白河院御時あらざる外の事よて御きそく心よりらむ侍りける時 云々
顯輔(文粹) 七 善相公奉右丞相書若失此人恐墜此文重望賜其氣色私寬慰聊傳恩裕之

旨以繫才士之心(朝野群載) 廿 出行初日 云々 不宿寺中不寄社頭 云々 但今世之人亦隨

氣色耳(狹) 廿九 御きそくよろしからざりつれば暇もえ申出まよきなめりとお

もひつるよ(宇治大納言物語) 我を老たりとおもひしきそく 云々 (つれく) 十五あ

かたふとのけしきやとて信仰のきそくありければ(抄) 氣色也

補 きそふ (万) 五 布りたぎぬありのことくきそへども寒き夜をらを 云々 (同)

十二 一かきつた衣よそりつけますらをの服曾比獵する月のきよけり

きつ (万) 十六 一さすかべよゆこかせこともいちひづのひをよりこんきつよあむ

さん(教長集) 狐のなくと聞て「きく人のさかゆときれは夜をさむみかくなるきつ
をあそれとぞきく(伊勢物) 段 十四 一よもあけばきつよそめあてきたりぬのまたきよ

かきてせかをやりつる

きつね (水鏡) 十 欽明段 此めの女おどろきおそれてやうんよかりて 云々 そのうちき
てね侍りきさてきつねとい申をめりあり(源 手習) 五 狐のさこそい人をおびやうせ
とことよもあらぬやつといふさまいとかれたり(土御門院御集) 一 きつねたよかけ
をうかぶ山川の氷のうへをふみてのみゆく(拾愚) 上 一 つかふるき狐のられる色
よりもふりきまよひよをむる心よ 補 (月清) 一 一故郷の軒のひもたよ草あれてあそ

れきつねのふところ哉

補きつねと 狐戸(著聞)九、鬼同丸云々 狐戸より入て頼光のねたる上の天井あり

(同)十七、寢殿のきつねとよ入て待けり

補きつねつかひ (中原康富記) 應永廿七年十月九日甲辰囚人室町殿醫師高天昨日

被流讚岐國俊經朝臣同國被流之 云々 是等皆狐仕フ之輩也

補きつねや 狐矢(新六)五 知家 「人て、ろたのまれがたききつね矢のたゞそのまゝ、ま

た音ぞせぬ

補きづか (道興准后廻國雜記) 「あるこよのおどろく鹿もつまでひのきづあよあどか

そなれざるらん **補**藻塩草 (十七) うき世のつかきづかと同心也そなれがたき心あり

(長門本平家物) 七 これをなたしといひきづかと名づくるも 云々(平家物)十ノ巻

補きつ キツ(盛衰)縹キツ(太平記)絆キツ

補きつ 來着(源東屋)五十 ながめくらしてかんきつきとる (伊勢物)廿 かへりてどの

京よきつきてかんもてきたりける

補きね 宜補(六帖)一上(拾)夏 射恒 「神まつるう月よさけるうのそをのしらくもまね

があらけたるうを (拾)賀 貫之 屏風よかぐらとる所の哥「足ひきの山のさかきばとさ

そをるかけよさかゆる神のさね哉 **補**小大君集 廿二 「みづかきのあたりよなれぬさね

よりも神よいちどるし今わらざし (夫) 寂蓮 「さよ深きさふねのおくの松風よさ

ねがつまみのりたおろしある (忠見集) 四月家のかみまつる 「年をとよまつらんか

せのさねぞみんいたゞくかみのをらくるまで (能宣集) 「宮人のたける庭火のお

きあかしこゑくあそぶ神のさねりも (拾玉) 四 「いかさかりうれしかりなんさね

が鈴のふりまて、ゆく道をせかせ (金葉) 連哥 「あめのうちよさねの音こそきこ

ゆかれいかなる神のつくよかあるらん

補きかるいづみ 黄泉(空穂 藤原の君)十 「こけおふるいとよ千世ふる命をばさるい

づみの水ぞあるらん (源 手習) 六十 末のよよの黄なる泉のふとりばかりをおのづか

らかたらひよる風のまぎれもありかん (空穂 あて宮) 廿 長哥 きたる泉よさえかへり涙

の川よろきねして

補きなれ 來馴(源東屋)卅例 こなたよきなれたる人よああらんとおもひて

補きかれ 着馴(右京大夫集)四十一 「きかれけるころものもてのをりまでもたゞその人

をみるこゝちして (新古) 離別よみ 「きならせとおもひしものをたびころもたつ日

をしらむ成よれるかか

きなれころも(夫)十四「志づのめがきなれ衣の秋あせせそやくもいそぐつちのお
とかお

きならー衣(夫)七信實「春のいろをきからーころもけふのまたぬぎかへがてらかさ
とよぞおく

着なやー(蜻蛉日記)上、下「きかやーたるもの、いろもあらぬやうよそゆ
着かを(源 帚木)八直衣をかりを志どねなく着かー給ひて(同 夕前)三きあるを、

ーのひとへをかまかかきあーたるわらの
きら、か(榮 か、やく藤壺)二四位五位の女といへどことよまたらひころくかり出

たちきよけならぬをばあへてつかうまつらせ給ふべきよもあらぬ物きら、のよか
りいでよき人をえらせたまへり(同)九今宮のえもいとせきらか、よおそーまを

(つれ、)段「いまめかーくきら、かあらねど木たちものふりて(榮さま、)三御
前の人をか、やんをどなくきら、かあるかぎりをえらせ給へり

きらふ(續紀)廿二「天皇大御靈多知 穢奴等 伎良比賜弃賜 布爾 依氏(詔解)廿九例ナ
ホ多シ(詞花)冬成尋「かきならぬ身よさへどーのつもるかか老い人をよきらをさ

りけり(補)拾玉)四「花をやどのあるとたのむ春かれ見よくる友をきらふもの
かり

補(玉葉)釋教法成「たねくらて佛のみちよきらそれー人をもすてぬ法
とこそきけ(散木)二光佛の名を人々よませーよよめる(無量 光佛)「心してかきそかりを

き光よもきらそれぬべき身をいかよせん

きら、(狭)三上、若君 おと、のよ、か嵯峨の院こそ頭ひきら、としておそ
ろーけなれどまづおとーめきこえさせ給ふぞをかきや(源 ありし)八とあけ給へ

れば人もかくて月の顔のみきら、として夢の心ちもせせ御けそひとまれる心ち
して(同 野分)九日のわづかさー出たるようれへがなる庭のつゆきら、として

(同 常夏)五いどものきら、く、かひある所つき給へる人よてよきあーきけちめ
もけさやかよもてそやー(神代紀)下、井聞其兒端正(枕)七、ゆづりそのいみとうふ

さやかよつやめきたるの、云々くきのあかうきら、く、あう見えたるこそいやーけれ
どもをかーけれ(同)六、とあかー常灯よのあらでうちよ人の奉りたるおそろき

までもえたるお佛のきら、く、と見え給へるいみとうたふとけよ、云々

補(宇治拾)九、猪のー、の出て石ををら、く、とくたけバ火きら、く、といづ(著
聞)十六、きら、く、とこらひてさふらひけり(同)御返事をバ申さでた、きら、く、と

のそこらひけり

さら〜(つれ〜)百卅牛飼下部などの〜れるもありをか〜くもさら〜
しくもさま〜(源玉萬)十故少貳のいとなさけびさら〜(同東屋)廿守少將のあ
給ひ〜をいかでかあひかたらひ申さんと思ひ給へ〜かども(同)四才ありといふ方の人よ
つかひをいかをかりめでたきことをせんと思ふよそのさら〜(同)九初よりたゞさらま
ゑらぬ心よいたゞあらゝかあるあづまぎぬどもをおしまろかしてあけいでつ(同)
三家のうちもさら〜(同)ものきよけよをえか〜(同)四才ありといふ方の人よ
るされたれどさら〜(同)今めいてかどのえあらぬよ(同)九初よりたゞさらま
ら〜う人のう〜ろとたの〜聞えんよたへ給ふべき御おせえをえらび申して(同
少女)四人がらいとすくよかよさら〜(同)端正漸隨長大二合岐良
岐良面容端正(空穂國讓)上廿やんごどあき人参りつどひてころたちてこかたかど
よもこたり給をせいとさら〜(同)樓の上)下)一云々さるべき御
供十余人していとさら〜(枕)三ノ木丁よ打かけたる袴のお
もたけよいや〜うさら〜(源行幸)十さくら
の下々さねいとなぐらゑり引てゆる〜とことさらびたる御もてな〜あかさら

さら〜ととえ給へるよ(仲哀紀)一容姿端正(履仲紀)容姿佳麗(雄畧紀)面貌端麗(補

(枕)九ノさら〜(車ナリ)きなどをばえさ〜もお〜ひ〜がせか〜(更科日記)又の日くた
りていとさら〜(うつてくたりぬなど

さらめか〜(大鏡)六三條院の大嘗會の御襖にさらめかせ給へり〜さまなどの常
よりことあり〜(うつて宮)三太刀をぬきさらめか〜(さ〜よりおひた
らひて

さらめく(著聞)十六友正そのさどめよさらめくべ〜といひかためてけり(源夕顔)
九ほどあき庭よされさるくれ竹前裁の露のあふか〜る所もおかトとさらめきこ
り(補)著聞)四十めん〜(装束ノコトナリ)よさらめきたる中よ云々けふの御供の侍どもめん〜よ
さらめきて(酒肴ヲ設ケ引出物ナド遣スコト也)同)九風呂たきかど〜てさらめきたりけり

補)さらびやか(著聞)五ノそれにかかをせぬすみやかよ流罪よ行れ候へか〜とさら
びやかよ申てけり

さんぢ(空穂吹上)廿上ノ此手とゞまらざらんかか〜きよよりてあん今まで娑婆よめ
ぐらひつるさんぢ此手をつたへるとこすものからば此世よなからん世ありともと
ふらひまもらん(同藏開)十五。女御ノ君ノ詞ある時のさんぢつとあく我を人け

なくろうと出たるとさへぞの給ふや(同 國讓)下ノさんぢのいかかる道何より
てとなんせちよせめ給ふあれと思ひやまであん(同)中ノわが親のいま〜と給
ひ〜までこれのさんぢを思ふよぞよとちもえいくまトき云々(大和物)五このこら
ひは女のいひけるさんぢも今このよみえトか〜といひければ答なとせかさふ
らへざらん(蜻蛉日記)中。父君道綱 さらばともかくもさんぢが心出給ひぬべく
いくるまよせよといひもせてぬよ(同)同同詞よ〜 我の出をさんぢよまかす
とて立出ぬれば(同)中。父詞さんぢのよからん時よおこととおそ〜ま〜ぬとてよ
となく(源をとめ)四十 さんぢらのおおト〜かれといふかひなくもかかめりか
と(大鏡)序 さんぢか姓の何ぞと仰られ〜かバ
さんかい(方丈記) かならぬ禁戒をまもると〜もかけれども境界をければ何よつ
けてかやぶらん

さんたち。姫君(神功紀)十君王登天業以安席高枕(源 帶木)十君たちのかみさぎ御
えらひよいましていかさかりの人かいたぐひたまそん(同)三 宮腹の君さちた〜此
御とのる所の宮仕をつとめ給ふ(同 榎柱)廿 つか〜男さんさちのえさらせまうで
かよひ見え奉らんよ(同 蜻蛉)六 君さちよとい面せよと仰られつる御心をへもかた

トけあ〜といおやされせや。時方右近侍(催馬樂)淺水あさむづの云中びとたて、
云々とふらひよくるやささんたちや○眞淵云サキン達ハヤサキンダケノ上畧○此
説非カ

さんのうる。金漆(延喜式)兵庫寮 金漆一合(同)主計式 漆金漆各一合五勺(瀆
松)四、傍よ〜なをりさる髪かき出給へれば云々まことよさんのうる〜かどのや
うよかけとゆさかりつや〜として七八尺さかり打やられさる云々(榮 初花)八花
山院の御車はさんのうる〜かといふやうよぬらせ給へり

さんえふ。金葉。集ノ(義楚云畧)七ノ 大般若曰以其言金葉上消音瑠璃斤書般若經
香花供養
ぎんせん。銀針(宇治拾)四ノ 病者か〜らをそらで年月をおくりたるあひどひけ髪銀
針を立たるやうよて鬼のこどく云々

さんトやう。今上(枕)五、今上一のよまたはらそよておそ〜ますが
さる(源 明石)廿 かの家よさるたりけるも〜るければ(古)春上よみ「梅がえよさる
るうくひを春かけてあけどもいまた雪のふりつ〜(万)十、「朝を〜とがみる柳鶯
のさるてなくべきをりよそやなれ(源 松風)十とふらそんといひ〜人さへかのこた

り近くさゝりて侍なれば(同をとめ)三あやうきものどもの立まどりつゝさるる座
のそゑをからしとおぼせざいとこととりなるや

きのそ(枕)六 おももん子を法師よあたらんこそいいと心ぐるしけれさる
いとたのもしきさをさ木のそかどのやうと思ひたらんこそいと不しけ
れ(つれ)一 法師をかりうらやまからぬものあらト人よ木のそのやう
よおもさるよと清少納言がかけるもけよさる事ぞか

きの丸殿(後拾)雜四 實方「ひとりのまきの丸殿よあらませばおのらでやみよまよま
しや(新古)雜中 天智御製 「朝くらやきのまろどのよこれをれば名のりをしつゝゆく
いたが子(金葉)雜上 惟規「神垣のきの丸殿よあらねともおのりをせねを人とがめけ
り(梁塵愚按抄)三 朝倉木丸殿の土佐國也行宮を申せり天智天皇春宮と申せし時齊
明天皇隨云々十訓抄七 崇徳院讃岐よろつろひ給ひて後旅の御をまひあそれよ
かあしきことかぎりあしひつくすべからむ運妙といふまき聖のありけるが云々
朝倉や木の丸殿よいりながら君よいられでかへるかあしき瀧濱臣云木のまろ殿の
荒木のまよてけづりみがぬ木もてつくれる殿也(夫)十一 雅經「あさくらや木のま
ろどのよ誰とへば秋をよかのる萩の上風

きのふ(万)卅六 卅四をとつひもきのふもけふもみつれども補きのふ(云々)と四の句よ
つかへる歌類句よ多く出

きのふ(竹とり)きのふけふ帝ののたまもんことよつかん人きよやさしといへ
ば(源 椎加本)廿きのふけふとおもさざりぬるをかへすとあかぢかあしきおぼさ
る(伊勢物)百廿(古)哀(大和物)業「つひよゆく道とのかねてきよかどきのふけ
ふといおもさざりしを

きく(源 蜻蛉)二十 いとどきこといさくまよあみづから物をべきを(万)十三 このこ
ろさかて我こひよけり(同)十三 「大宮のうちまできこゆあびきをとあまよのふ
るあまのよびこゑ(繼躰紀)八 かまがの國よくいめとありと枳々底(源 若紫)十六
の若草をいかできい給へることぞとさまよあやうきよ

○きけ(源 帚木)卅八 とひきけりきかれ(新後)戀三 國道「偽をたのむよこそいかりもせ
め待せといかて人よ聞れんきかせ(源 夕霧)廿 一かとかおのれよいさかんかくなんと
きかせたまさざりぬるきくる(後拾)兼房 「夏のよいさてもやねぬと子規ふさこゑ
さなる人よとそよやきつ(万)八ノきつやといもがとせせるかりかねいまこと
もとなく雲がくるかりき給へば(源 帚木)卅六 うちさよめきいふことよもを聞給へ

増補源氏物語 卷之四 卅九

バき、おき(同)五 思ひあがれるけしきよき、おき給へるむすめなれば き、けん

(古) 誹諧 さぬさ 「ねきごとをさのきさ、けん社こそそていかけきのもりとあるらめき

くく(源横笛)十 かやうよ夜ふか、給ふもまよく、て入給ふをもきくく、ねた

るやうよて物、給ふ成べし さかたや (源明石)廿 かのもの、音をさかたや

さく(利) 枕八、せぐろくうつよかたきのさいき、たる

さくちん (麴塵) (朗詠) 春興門柳復岸柳風窈麴塵之絲 ○麴塵ハ黄色ナリ

さく (後) (戀五) 「かくさかり深きいろよもうつろふを猶君さくの花といそかん

聴入る、事 (散木) 菊 九月九日菊、てかほなでよと人の申ければよめる 「ちりこよ

ておぞめるか、かいなみればなづとも菊のゑる、あらめや (顯注) 衰老たれば撫と

も菊の不老の薬も不可有驗と詠也 さくを薬 (堀次) 「はふごとよ菊をくせりとせ

る人いちとせのをか、過といふ也

○さくの綿 (新勅) 賀 九月九日從一位倫子菊の綿を賜ひておいのこひせてよと侍り

ければ (紫式部集) 九月九日菊のこたをうへの御かたよりたまへるよ 「菊の

つゆわかゆさかりよ袖ふれて花のあるトよ千世のゆづらん (貫之集) 九月九日お

たる女菊、ておもてのこひさる 「けふまでよこれをおもへば菊の上の露、ちとせ

の玉よざりける 枕 (十五) 九月九日、あかつきがたより雨すこ、ふりて菊の露もこ

ちたく、おほひさるわさどい、うぬれたるぞうつ、のかまさりてをか、き (忠見

集) 九月九日菊よこさかづ、たる 「よろづ世も人のこかゆるさくの上よまゆをひ

ろ、てつゆを待か、 (加茂保憲女集) 「あえよとて菊の、ら露のこへともすぎよ、

よそひかへらざりけり (忠見集) 九月九日 「花の、をけさ、いかよぞ君がためまゆ

ひろけ、さる草の上の露 さくのさかづき (新千) (秋下) 「めぐりあふ秋をこそまて雨露

のめぐをうけ、菊のさかづき (同) (後宇多院) 「長月や雲井のあきのこと、さんむ

か、よめぐるさくの盃 (新拾) (秋下) (關白) 「長月の豊のあかり、名のみ、て今、むか

しよさくのさかづき

○さくの水 拾玉 二 「山川、うつろふ菊の、いかなら、流れくみけん人よとそ、や

(堀百) (隆源) 「菊の、をあらひておつる谷川のなぐれをのむ、よそひのおなり

さくこい (奇怪) (平家物) (五) 此法師さくこい、かりきんこくせよとて (盛衰) (十) 門前を

下馬もせで通り侍るさくわい、覺ればおつりけてうちと、めんと申

息月 (源) (夏) (下) 九霜月のみづぐらの (源朱雀) 御息月かり (同) (野分) (初) 八月、故前

坊の御息月かれ

〔響きやう〕(宇治拾)十人のいのちをさちころを物かれべきやうつよものゝこびりさゑ
らせんとおもふなり(同)三、人どもをよびてきやつたうりまめしこめてかん當せよ
〔きやうらう〕(宇治拾)五ノ仲胤僧都きやうらうとこらひて是のうらうの時仲胤が
いたりし句かりえいしとこらひて

〔きやう〕(發心集)論議をべきやとの終りぬれば響を庭に投まつれば説の乞食方々
よ集りてあらそひとりてくらふ習ひあるを(落窪)三、國々のかまどもゝたゞ御けし
きのまゝつつかうまつりいかでととおもひたればひとつづゝ物の給へといとや
する人々のおまへの響のことをかんあて給へける(空穂)初秋)廿、けふもみ給へつれ
ば御せんよ響つりうまつるとてさふらされつるよ(落くほ)四、御どもの人々に物々
づけさせ給ひ響をどせさせ給ふ(源 柏木)十、所々のきやう(同 桐つば)廿、元服ノ所
所のきやうをどくらづりさこくさう院をど云々きよらを盡してつかうまつれり

○響百膳(宇治拾)九、佛供養響百膳をかりぞ云々 昨日一昨日のおのかわさくしよ
里隣私のものどもよびあつめてさふらひつるといへを

〔きやう〕(源あふひ)廿、經志のびやりよよみ給ひつゝ(同 蓬生)七、經うちよみおこを
ひかといふこと(同 手習)廿、經ならひてよみ給ふ

○きやうさく 經箱(狹)四ノ上、御經さこもあきたり法華經成べしまたゝあまゝ軸
のもと迄まねよせられて(源 夕きり)五十、御さうしよをへて經箱をそへたるが御り
たもらもそなれねば

〔きやう〕(源すま)廿、京へ人出たて給ふ(伊勢物)初、からの京かまがの里よゑるよ
してかりよいにけり(源 若紫)初、三月のつてもりかれば京の花さかりのみを過よけ
り

〔きやうさく〕(狂感)發心集)八ノ西尾の聖身焼すべしといふこと聞えて結縁をべき人
道俗市をかしてたふとみこぞる東尾の聖おれをきゝて狂惑のことよこそあらめと
て信せざるやどよ(袋草紙)三、四、長能の狂惑のやつかり

〔補〕きやうか 狂歌(野守鏡)有房公狂哥ト書タル所二ツアリ
きやうりう 行幸(源 紅葉賀)初、朱雀院の行幸の神無月の十日あまりかり(狹)四、下男
みこ生れ給へるよぎやうかうある事、常のことあるよ

〔きやうよう〕(響應)枕)五、もてあしきやうようし給ふさま(宇治拾)三、大太
ゑりたりける人のありける家よ行たればみつれていとくきやうようしつていつの
ぞり給へるぞおぞつかかく侍りける(同)九、物どももたせて來りければくひ物ども

などおろかり馬の草までこゝらへもちて来りいふかぎりかくうれいと覺ゆ此人々
もてきやうし物くせ酒のませせて、入來れば

きやうたび 鏡臺(源末つむ) 卅 四 ふるめきたるきやうたいからくけ(和名) 十四、鏡臺

弁色立成云加々美 同 嚴器、俗用唐櫛匣三字 加良久師介

ぎやうたう 行道(源あらし) 卅 四 十月夜、出て行道する(江次第) 八 仁王會 七 諸僧行

道一畫廻殿檀(山家) 卅 五 八 まんさらの行道ところへのゆるのよの大事とて云々め

ぐり行道をべきやうし檀も二重よつさまをされたり

きやうくつ 敬屈(盛衰) 十 八 女覺遠 主従の禮よりも猶深くしてことの外よぞ敬屈し

けるよ 今ノ世ノ俗キヤウユツト云ハ是カ○文丸云今ノ世ノハ輕忽カ

ぎやうけい 行啓(續後撰) 冬 後一條院御時中宮齋院、行啓侍りけるよ 云々

きやうおく 輕服(源蜻蛉) 卅 五 后の宮の御きやうおくのそとのをそめておそいます

よ

ぎやうでん 宣陽殿(源わかあ) 卅 七 此御こといぎやうでんの御ものよて代々第一

の名ありし御琴を(枕) 卅 五 十一 ぎやうでんの一のよをよといふことぐさの頭中將こそ

おたまひの

きやうさく 〇 デキガヨイ警策歎詩文の句のよき事にて (源花の宴) 九 此さびのやう

よふとどまきやうさくよまひぐくもの、ねどもと、のふりて(同) 手習 卅 三 さいのぞ

きみ給ひてけよいとさやうさくかりける人の御よろめいかあ(同) 常夏 卅 五 十 人がらも

きやうさくある御あそびどもからんか(空穂) 卅 四 四 ものいさやうさくあるふ

えうのものかり猶とめつるかりとてわらひさまふ(同) 藏開 卅 四 〇 東宮ノありし

よりゆいとさやうさくよかりまさり給ひためり(源梅枝) 卅 一 十 ころのきやうさく

の姫君たちのひきこめられかば世よえあらト(判撰方葉序) 非未嘗稱警策之名焉

(陸機文賦) 〇 カウサクノ 所 補 (空穂) 卅 七 九十 いとさやうさくよかりまさりよけり

きやうさく 景迹(沙石集) 卅 七 六 下 あまりよあさけかく候事さのみ申つくろがたく候一

事を申さば余の事ハ御景迹あるべし 補 按ニ此景迹推察意ハ遣へるり(逸史) 延暦二

十二年七月癸亥田村曆云々 十一月己卯量夫景迹(殘缺後紀) 大同元年五月己丑量彼

景迹(續紀) 卅 八 延暦四年七月癸丑景迹齒名具注(天武紀) 景迹 通證 卅 八

きやうく 輕々 〇 カコク シ (宇治拾) 卅 二 一條攝政どのハ東三條どのハ兄よおそ

いまを御かたちよりそとめこゝろもちるをどめでさくさえありさままことしくお

そいまし又色めかしく女をもおほく御覽ト興せさせ給ひけるがすこしきやうく

原不葉の上
秘をよきや
けいれい
鳴き景迹
まくれ
いられ
下
き
き

よおぞえさせ給ひければ御名をかきさせ給ひて大くらのせうとよかけと名のりて
云(源若菜)上九〇鞠ノさるのいときやうくになりや此事のさまよあとのさまふ
(榮もとの車)十 おろやけをまかり奉るやうかりとかさむらいつうおぞいできやう
きやうかれと辞してんとおぞいかりぬ(源よこ笛)十いかぞりえすのまへをバ己た
り侍らんいときやうくからんとていたき奉りて持給へれば(大鏡)九十鷹つかひ
ありきけるま云いさくきやうくあるふるまひかせさせ給ひそ(百鍊抄)四長久元
年八月外宮顛倒事云去十二日託宣云只今神居不穩尤似輕々(著聞)六馬助來てい
かよきやうく一人をバすりさせ給ふぞ(榮若枝)十かやうの例あらぬ事候へばま
づおひたてさせ給ふいときやうくまさふらふや

きやうく(長門平家物)廿九御馬十二疋御劔七腰御衣十二領ひろぶたよ入てま
ゐられたりぎやうくくぞとえよける〇コレハ今俗ノ語ト同ク仰山ノ心カ

ぎやうト(行事(空徳國讓)上)十六御内侍のまけをトめより参りて例の御湯殿へ行事を
きやうひと(京人(源玉葛)廿)つくくの國よととせをかりへよたるよけその身をま
らせ給ふべき京人よ人よがへよ侍らんとてよりきさり

きやす(消(枕)廿四)白山の觀音是きやすさせ給ふかといのるものぐるを
ぎやうぢる(古事談)三只今御經ハ行水モ候ハテ今讀玉ヘレハ(宇治拾)こよひの
御行水も候とてよとてまつらせ給へ

きま(古)雜下よみ「我庵のまわの山もと戀くバとふらひきませ杉さてる門
(同)有常「一とせよひと度來まを君までバ宿かす人もあらトとぞ思ふ(同)戀五讀
人不知
「須磨のあまのしほやき衣ひまをあらみまどをよあれや君が來まさぬ

きけん(機嫌也シホア)十訓抄廿一きさのこさあくさし過たるのいと見ぐるさ
れバとてとみの事をと出きたらんよ告あらせざらん又いひがひかすことよより
てよくきけんをまからふべきあり(つれく)下十世よたがまん人の先機嫌をま
るべいついであしきこと人の耳よもさかひ心よもたがひて其事をらさやうの
折節を心えべきなり但病をうけ子うみ死ぬることのみ機嫌をまからせついであ
とてやむ事を(長門平家物)五十二今一度君を見まらせんと存トてきけんぞか
へり候のぞ推參仕て候(後漢書)卅馬嚴傳明德皇后既五嚴乃閉門且守猶復慮致機
嫌遂更從北地斷絕賓客

きふ(源手習)七十御いむ事いとやすく授け奉るべきをきふることにてまか
でたればこよひの彼宮よ参るべく侍り(榮ゆふして)九花もみちも御心にまかせて

御らんせんとのみかたいかでさやうよてもありまゝがなどおぼさるゝ御心よる
ひるきふまわりかくて(同 花山)九朝光の大將の姫君參らせ給へときふまの給も
れ(源 御法)六陵王のまひてきふにるほどの末つかたのがくそなやかまにぎ
そしくきこゆる(同 浮ふね)十。浮舟ノ外ヘウツルト。此おとゞのいときふま物
給ひて俄まかうきこえかゝ給ふかめりかゝむかゝいまも物念トあてのどかある
人こそさいもひの見もて給ふおれかといふあり(同 夕きり)七十さればよいときふ
まものゝ給ふ本性あり(うつろ 嵯峨の院)五いときよき人なれどいときふまこそ人
まなん侍る(同 柳)十おちあおとゞいときふまさがあうおそしてその御まゝまかり
かん世をいからんと上達部殿上人皆おもひなげく(源 若菜)下五きふなる人の
ひさしくつねならむ

ぎふく(狭)下十ぎふく〜とことさらめき笑ひ入つゝおまおきまゝいるもあり

木こる(宇治拾)十三木こるわらの曉山へゆくとして

補きこり体ノ語(好忠集)二月「春山まきこる木こりの腰まきまよきつゝされや花

のあたり(補)(和泉式部續集)繪ま山寺ま法師のゐたるまへま日くれて木こりとも
の歸るところま「ままかぞと思ふもかかしくくるまきをこりつゝ人のかへる山ま

きこえ聞(枕)八宣耀殿の女御と聞えけるの小一條の左大臣殿の御娘まおそま

しさればたれかゝおりきこえざらん(伊勢物)八段昔おちいまうちぎと聞ゆるお

そしけり(竹取)翁詞このかでふことをの給ふぞ竹の中よりみつけ聞えたり〜と

菜種の大きさまおせしをまがられたちからおまそやゝかひ奉りまると子が子を何

人りむかへ聞えん

きこえをか(源 紅梅)十やまよまおまをるけ所に聞えをかさむり〜として

きこえをか(空穂 藤原君)二此ひんが山ある寺のたふのゑ〜給ふべ〜といふ

聞えをかして

きこえを(源 總角)五十世の聞えを忍びてりへらせ給ふほどま

きこえり(源 早蕨)十何くれと御物語きこえか〜給ひて

きこえか(源)二けしきさめる御ふまかどのあらばこそかくもきこえり

へさめ(同 末摘)十云々との給ひきたるかりいかゞきこえかへさん

きこえか(源 紅葉賀)廿あやうをい給まさめるとこゝろみよたそふれを

聞えりゝりかどする折あれど

きこえたり(源 桐つは)廿先帝の四の宮の御りたちをぐれたまへるきこえさるく

おとします

きこえうけ給る(源 柏木)廿五けよいさゝりもひまありつるをりし聞えうけ給へるべ
うあそ侍りなれ

きこえうてり(源 早蕨)十八えいのびても聞えうてり給へざりけり

きこえの出来る(空穂 嵯峨の院)廿五此事の聞えの出来たるよこそあめれさへおもひ

しことぞやかどころの中におもほせ

きこえぐる(後)貫二世中へうきものなれや人をどのとよもうくよもきこえ
ぐる(一)き

きこえまほ(源 桐つは)七七きこえまほしけあることありけかれど

きこえでち(源 梅のえ)十九あさきどりきこえでち御めのとゞもよ

きこえある(源 帯木)八八我がいもうとゞものよろしききこえあるをおもひての給ふ
よやとや心うらん物もいと(補)源(源 若紫)五十君のいりよせま(一)きこえありてすき
がま(一)きやうあるべきこと

○きこえもかく(源 夕かほ)五十その人といきこえもかくて

きこえさせ(源 帯木)七十馬頭詞聞えさせつるやう(榮 ねのえ)十一いりありと

おもひきこえさせ給へ(枕)廿七おろけの紙のさるまどければ求め侍るありと

申給ふいりやうなるよりあるとひきこえさせ給へ(源 且のあ)三上母女御もそひ

聞えさせ給ひてまわり給へ(枕)十一いかゞ御らんむると聞えさせ給ふ(狭)廿二下

りもりたる御をみりのみあされし思ひやりきこえさせ給ひけり

きこえさせたがふる(源 夕きり)十四けふいとゞみたりがそ(一)き心ちどものまどひ

し聞えさせさがることども侍りかんさらばりくお(一)まどへる御こちちもり

ぎりある事よてそこ(一)まづませ給ひなんほどよきこえさせ承らんとて

きこえさせ承りて(源 早蕨)十世よそべらんりぎりきこえさせうけたまもりてすぐ

さま(一)やうあん侍るを

きこえさせふる(源 晴蛉)八十中々みか人聞えさせふる(一)つらんことを

きこえさせらん(源 末摘)九廿あや(一)きここの侍るをきこえさせらんもひがく

しう思ひ給へわづらひてと

きこえさせ(源 帯木)七廿あそれし侍かときこえさせ

きこゆ(和泉式部集)上(一)あわれよもきこゆかるるかあかつきの瀧をかみたのおつ
るかるべし

きこゆ イッヘテ (源わのな) 上ノ。朱雀ノ女三ノウ。あやしく物もりなき心さまよと

とゆめる御さまあるをこれりれの心ままりせてもてかきこゆるか (同 少女) 十ざ

えふりき師よあづけ聞え給ひてぞ學問せさせ奉り給ひけるよるひるうつくしとて

猶兒のやうよもてかき聞え給へればりこよていえものあらひ給ひとて靜ある

所よこめ奉り給へるかりけり月よ三よび計を參り給へとゆるし聞え給ひけり (同)

四右大將殿をそとめ聞えて御をぢの殿をら (同) 五。雲井ノ雁ヲ女御よのいとこよ

なく思ひおとし聞え給へれど人がらりたちなどいとうつくしうぞおそしける

きこゆ (源 帚木) 卅 六。ゆがめてりたるも聞ゆ (同) 四。おもふことすこしきこゆべき

ぞ (同) 卅 三。みるりひありとおもひ聞えたり (同 蜻蛉) 廿。何りいそぎてしも聞えうけ

たまそらん (枕) 九。あらりひ論しかときこゆるハ

○りたりきこゆ (枕) 八。ノりの君よりたりきこえければ

きこしめせ (源 末摘) 十。物でしよて聞え給もんこと聞しめせといへさ

きこしめせ (源 桐つば) 八。きこしめす御ころろまどひか事もおぞしめしりれせ

(同 明石) 八。いりでこれきこしめさせてしが (同 帚木) 卅 七。うへよもきこしめし置て

きこしめす (源 少女) 廿。御ゆづけくたものかどされもくきこしめせ (竹取) 五。ひと

りの天人いふ壺ある御藥奉れきさかきところの物聞召たれば御心ちあしりらんも

のぞとて云々

きこしめしつけて (源 わけまき) 九。十。後の宮きこしめしつけて

きこしめさる (源 うき舟) 五。四十。あしさまよきこしめさる人や侍らんとよの人の

物いひぞいとあぢきかくけしりらせ侍るや

きこしめさせ (源 榮わのえ) 六。物もきこしめさせけきたし猶御ゆづけよてもたゞせ

こしきこしめせ (同 柏木) 十。御めかども聞しめさせ (同 若紫) 四十。むらなきものもき

こしめさせ (同 桐つば) 九。ものなどもきこしめさせ朝かれひのしきさかりふれさ

せ給ひて (竹取) 五。御門いといたうあそれがらせ給ひてももの聞しめさせ御あそび

などもあかりなり (源 手習) 三。四十。かゆなむつかしきことどもをもてそやしてお

まへよとくきこしめせかどよりきていへど

補 きこせ (万) 廿。五。一。我せこがかくしきこさばあめつちの神をこひのみながくと

ぞおもふ (同) 卅。三。いぬがそのとこの山あるいさや川いさとを寸許瀬が名のら

すな

きえ (源 若菜) 上。八。世の中もさためなきよやがてきえ給ひをかひなくなんど

會通新編言海 卷之四十六 三十一

て(同)上九かきあらぬみのさそがよきえぬの世のきゝみゝもいとくるしく

柱十文詞よべ俄よきえいる人の侍りよより雪のけしきもふり出がたくやをらひ侍りよ

きえいり(源 蜻蛉)九いふ人もきえいりえいひやらせきく心ちもまとひつゝ(同 榎)

きえそて(源 總角)八十。大君ノ死六スルコトチ死六るまゝのものゝかれゆくやうよてきえそて給ひぬるの(同 かのり)三明かゝるほどよきえそて給ひぬ

きえよ(源 椎の本)卅一おく山の松をよつもる雪とたよきえよ一人をおもひまゝり

下露(同)戀二定家「どこの霜まくらのこりきえわびぬむまびもおりぬ人の契よ

きえかへり死入ルヤウ (源 行幸)四まゝてかさちありやをかゝやなどこかきこたち

のきえかへりこゝろうつす(後拾)戀二道綱母「きえりへりつゆもまたひぬそでのうへ

よけさいゝぐるゝそらもこりかゝ(拾)戀四よみ「ゆく水のおとからばこそきえり

へり人のふちせをかがれてもよめ(古)戀二友則「こがやとの菊のりきねよおくゝもの

きえりへりてぞこひゝりりける(後)秋中深養父「消りへりものおもふ秋の衣こそ涙の

川のもちぢかりれ(同)戀一人不知「光まつ露よこゝろをおける身の消りへりつゝよ

をぞうらむる(拾)戀一小野宮「あなこひしつりよ人よみづの泡のきえりへると

もあらせていぐか(大和物)四(後)戀四承香殿「こぬ人をまつのよふるゝら雪の

きえこそりへれあもぬおもひよ(空穂 あて宮)廿長哥 きたる泉よきえりへりかみた

の川ようさねして(補)新古冬攝政太「きえりへり岩間よまよふ水の泡の志をゝや

どろる薄氷りか(同)戀四太上天皇「袖のつゆもあらぬ色よぞきえりへるうつればりも

るかけきせよまよ

きえのこり(源 日のお)下八十六女きみきえのこりさるいとほしきよこたり給ひて

きえまどふ(源 帯木)四十きえまどへるけしきいと心ぐるゝくらうたけおれば

補きでん 貴殿 (小右記)寛仁三年の所よ人をさして貴殿といへる事あり

きさ 象(拾)物名 けいりるの石をくゝみてりみこゝのきさのきよこをおどらざ

りけれ(和名)八象和名 獸名似水牛大耳長鼻細眼牙長者也(文選)七招魂赤蟻苦象

(二部抄)屠邊のきさ

きさ 蛸(和名)六十九蛸和名 蚌屬狀如蛤圓而厚外有理縱横即今蛸也(本草)魁蛤○今

アカバヒといふもの也

きささいの宮(榮さま)二きささいの宮もとりさきおもひ聞え給ひて(源桐つは)廿
えみたてまつりつけぬよきささいのまのひめ宮こそ云々ありがたきかたち人よ
んとそろうけるよ

きざと一(平家物)四おまへのきざと一をなかせりかりおりさせ給ふ

きさらぎ(好忠集)始二月一とぎもてころもきさらぎ風さむみあり一よまさる心ち
かもする

きざむ(刻)鏤ルコトカ(伊勢物)七十青き苔をきざみてまき繪のかたよ此うを
つけて奉りける(好忠集)一うをそくが朝をまさきむ松のまの山の雪よやうづもれ

ぬらん(雄畧紀)廿天皇眞黥面

ぎさう(擬柱)空穂(嵯峨の院)九十文人をかせよりのとめて志より出たる人廿人ぎ
さうもめたり(同)七御心よ御文いれ給へれば常よ御前よさふらひていとぎ

さうすることゆいとくきこしめを(源少女)十もん人ぎさうなどいふること
もより打のトめ

きさき(源桐つは)廿と、きさきのあおをろ一や云々

きざみ(折ノ心)源(源常木)三とあらんをりよもからんきざみをも見過一たらん中こ

を(同)十かたみよをむきぬべきささみよかんあるとねたげいふ(同梅枝)十心よ

こくす、みよらんも人おらそれ一人のねんころなり一きさみよなびきかま一う
かど人いれおぞ一かけきて(同わかき)廿一むつびなれ聞えん事いとかり一

よ打つゞき世をさらんきさみ心ぐる一云(同)同故院のうへの今のきざとよあ
また御遺言あり一中よ(同夕顔)廿今そのきざみ一(宇治拾)三死ぬるきざとよなり

て(同みのり)三いまのとめさおれんきざとよいきてがたく

きざみ(段ノ心)源(源桐壺)九今一きさみの位をよとおくらせ給ふかりたり(同常木)
七きざと一ありて志かさざまりたる中よ(同)六下のきざみといふまのよあれ

きざみ(今云キ)ザハン(盛衰)六信頼が天下よ秀たり一時殿上の刻み階よまをら一人
立たり

きざと(夫)二(順集)一あかねさを朝日よきゆる雪まよりきざと一やをらん野べのこ
かくさ(同)知家「日をはていとしどりをまざるたまさかよきざととみえ一のべのこ

か草(好忠集)中(新古)一「かた岡の雪まよきざとわか草のまつかよみえ一人ぞ
こひ一き(撰集抄)九江口無上菩提のたねをもいさよかのほどかどりきざとるべ

きことうれしく侍り補(源梅か枝)十此殿のおぼしきさまのいことおれば

きいたし(源わの紫)五十も一聞いて奉らばつけよとの給ふもさづらひく

きいれ(源寄生)十きいれぬさまよて過し給ふ(同末摘)三十きこのかくまめや

かよの給ふよきいれざらんもひがくしかるべし(同帝木)卅守俄よとぶれど

人もきいれぬ(源あろ)卅もきみのとかくおもひわづらふをきいれぬ

きもつ(聞果)源帝木十中將のこのこととりきもてんと心よいれてあへらひ

る給へり開放源里のな上いづれのこたちもよそよきもち奉るべきま

あらねば

きよく(源帝木)六この志をくをきまへあらそふいときよくきことおほ

かり(同若菜)上四かく人のたぐからせいひおもひたるもきよくしとおぼして

(同あふひ)十こかき人々のきよくきまめであへり(榮とりへの)卅御鼻口より

血あえさせ給ひて只俄ようせ給へるなりといふ云々これを世の人も口やすからぬ

ものかりければ宣耀殿いみじかりつる御心ちのおこたりたまひてかくおもひかけ

ぬ御ありさまをば宣耀殿たゞもあらせ奉らせ給へりければかくからせ給

ひぬるとのみきよくきままで申せと(源末摘)五物の音がらのをぢことなるものか

ればきよくもおぼされぬ

きとぐめ(源はたる)八うるされればえこそきもとぐめぬ

きとぐめ(源浮舟)四よむりよ何人ぞいづくよりあときとぐめられんものさ

こぐりく(同紅梅)十何事もみり聞とぐめ給もぬいあらねど

きとどろ(源澤標)十これのこよなうこめきおもひあがりき所ある世のもの

がたりなぞして

きとどろ(源庵ぬ)一よの中よきとどろ所々をかきとづねて心をやり

きわづらふ(源竹川)廿も北のかたをせめ奉ればきとづらひ給ひて

きとどろ(源帝木)十ちかくてみんなのきとどろ思ひするべからんよかたりもあそ

せをやと(同末つむ)六ものきとどろわくをよもあらでねたし

補きよふ(榮初花)廿やうくすき風のけもひよれいのたえせぬ水のおと

なひよもよがらきよふかよとさる

補きわび(風雅)秋下女「秋の雨のまどうつおと聞わびてねさむるかべよとも

火のかけ

補 きゝわさる (玉葉) 雅有「みやこよてきゝゝすれゝゝ浪のおとゝ又たちかへりなれんとすらん 旅

きゝかよひ (源 うき舟) 廿 京よさばかりの人のおそゝおせせおのづからきゝかよひてかくれなき事もこそあれとおもひて (同 柏木) 卅 おのづからちかき御ながらひよてきゝおよばせ給ふやうも侍りけん

補 きゝがき (夫) 一 親隆 「いつうと春のあゝたの聞がきゝ耳おそろかそ我身なりけり

きゝよく (源 のわき) 十 源ノ云々ひがみゝよやありけんきゝよくもあらせぞ (枕) 十六 社寺などよまうでの申さるゝ寺よ法師社よて稱宜などやうのもののおもふやよりのもそぎてとゞこりなくきゝよく申たる

補 きゝそなそ (撰集抄) さてまゝおのづから耳よもれて哀をきゝそなそゝ

きゝそふる (源 關屋) 六 ちてくゝめづらゝきことゞもをきゝそふるやなど人ゝれせおもひり

きゝつたへ (源 帚木) 初 末の世よもきゝつたへ (同 玉葛) 廿 ちるりなるせりいよて風の音よてもえきゝつとへ奉らぬを (同 わのあ) 上 九 御ありさまなごも聞つたふるを

きゝつけ (源 玉葛) 八 此姫君をきゝつけて (同 帚木) 卅 人のいひもらさんことをきゝつけさらんとき (同) 卅 ひとすらようゝとおもひそなれぬ男きゝつけて (同) 卅 八 おやきゝつけて (いせ物) 五 あるときゝつけて (同) 五 段 おやきゝつけて (源 わか紫) 四 門うちたゝかせ給へさきゝつくる人なゝ

きゝつぎ (源 うす雲) 卅 一言ばかりかきめるけそひいとあつかいけあるよきゝつぎてちめとゞとくるゝまでおそそ (同 玉葛) 七 きゝつゝいゝいゝるるか人ごもところがけせうをこがるいとおそかり (同 總角) 八 十 かくこもり給へれば聞つぎつ

つ御とふらひよふりそへ物ゝ給ふ人もあり

きゝかれ (源 手習) 卅 山風をのみきゝあれ侍りよける耳がらよやとて

きゝからそぬ (源 わか紫) 下 十 いときゝからそぬ事か云々かうきびゝきものゑんと

いことよあかりゝ物を

きゝかゝ (源 わか紫) 上 六 御みゝのきゝあゝよやいとゆうよあそれよおそさるれば

(和泉式部集) 上 「そのことゝいひでゝあかぬ虫のねもきゝあゝよこそかなゝかりけれ

きゝうかべ (うつほ 櫻の上) 卅 下 一 おとゞ君ひとり千字文ならそゝ奉り給ひゝかばや

がて一日よきうかべ給ふ

補木々の木の（和泉式部集）「よをかさねふきこむ風をおもふか木々のこのおちをむるより

き、おぞす（源 若菜）下九き、おぞをらん事を

き、おぞろき（源 柏木）廿かくおもひ給へるよしをも聞おぞろきをけき給ふ事かぎ

りなうこそ口をいがり申給ふめりか

き、おと（源 若菜）下あへかくあそつけきやうよやき、おと給ひけんといとそ

づかしく

き、およふ（伊勢物）百八哥云々どつねのことぐさよいひけるをき、およびける男

き、おく（源 常木）卅おもひあがれるけしき聞おきたまへる娘なればかしくて

（同）卅うへしきこしめしおきて

き、おふ（源 椎か本）卅。カ詞必御まづから聞し召おふべき事ともおもひたまへ

（伊勢物）百十「おきなさび人などぐめをかり衣けふばかりとぞたつもかくあるお

そやけの御けしきあしかりけりおのぐよそひをおもひけれとか、らぬ人の聞お

ひけり（同）百八「風ふらばとそよ波こそ岩おれやとけ衣手のかわく時なきと

常のことぐさよいひけるを聞おひける男哥云々○女ノミツカラノ上チイヘドモ業

平ノ心ニ誠ニハ我上ヲ恨テイフツト引ワケテ聞也（源 紅葉賀）廿。内侍云々と打お

けくを源心 我ひとりも聞おふまどけれとぞとましや何事をかく迄いとおぞゆ

き、おそ（大和物）女か「あら露のおきふたれもこひつらん我のき、おそぞい

そのかみよて

き、おもふ（源 蓬生）四あかみとや人のき、おもそん事もあり（同 少女）廿かゝる

人の聞思ふ所もあそつけきやうよなん

き、ぐる（源 竹川）卅心やそから聞ぐるしきまよ（同 楳柱）六あれとしきも

又うしろやまきも此世よとぐひなきそをさりともとなんとのもしきと聞え給ふ

をいとわりかう聞ぐるしとおぞいたれば

き、ふけりて（土佐日記）此哥をもを人の何といふをある人き、ふけりてよめり

其哥よめるもトみをもトあまり七もト人皆えあらでさらふやうかり哥ぬしといとけ

しきあしくてえせ

き、ふす（源 末摘）八命婦のいろをあらんとめざめて聞ふせりけれとそり顔をらとと

て（同 浮ふね）四十云々といふよもさりやましてと君の聞ふし給へり

きゝあそむ(源 溇標)二十ことよあらそいてをさゝきこえ給そぬを聞あそせ給ふこと
ともこそとおぼして(同 うき舟)十大將よ尋とられよれりときゝ合せる事こそあれ
(同 紅梅)十聞合せ給ふべし

きゝあへ(蜻蛉日記)中ノ石山詣いでそりて加茂川のそとをかりなどよぞいかに
きゝあへつらんおひて物したる人もあり

きゝあつかふ(源 夕霧)五十恥かゝとおぼさんもいとそりきを何かいれさへ聞あ
つかそんとおぼしてかん云々

きゝあおづりて(源 東屋)十おやな一聞あおづりて

きゝあきらめ(源 榎柱)廿兵部卿宮などもゑと給ふと聞しをさいへとおもひやりふ
かうおそる人よて聞あきらめ恨とけ給ひよたかり(同 夢浮橋)十九いとはしき
親の思ひかどをさゝあきらめ侍らんばかりなんうれう心やすかるべきなど

きゝさため(源 花の宴)五只忍びてこそとの給ふ聲よ此君なりけりときゝさため
きゝされ(土佐日記)買島カきゝされよきけるなり(抄)きゝなれきゝつたへさる心
よや妙壽本聞去と書り

きゝさそ(源 帯木)卅ことなることなけれべきゝさゝ給ひつ

きゝめく(平家物)十一ノ段 東國の大名梶原よおそれたかくの笑もねども目ひき
きゝめきあへり(文丸)云さゝめくノ訛カ

きゝみる(源 若菜)下九なそこゝらの人のありさまを聞見る中よ(同 榎柱)廿人のき
きみる事もなさせなきを

きゝと(源 竹川)卅ひがみたるやうよなん世の聞耳も侍らんなど(同)卅世
のきゝみゝもいかゞと思ふたまへてなん(源 わか)廿四ありくゝてかく世のきゝ

きゝも(同 わか)廿九かきならぬ身のさびがよきこえぬ世のきゝみゝもいどくるし
くつゝましく(同 椎か本)七うまれさる家のほおきてのまゝよもてなしたらん

きゝり(源 たらひ)廿少將といひ一人の聲をきゝりてよびよせ給へり

きゝる(源 しの紫)四十六たいふつま戸をならしておそふけり少納言きゝりて出
きたり

きゝの(源 横笛)三あな心うなを聞え給へそ心やまう打おもひてきゝのび
給ふ

きゝの(源 横笛)三あな心うなを聞え給へそ心やまう打おもひてきゝのび
給ふ

増補新編源氏物語 卷之四十八 三十六

きゝもたり(蜻蛉日記)上こゝなる人ナリ片ことせる不ナリなりてぞある又いづとての必今こんよといふを聞ナリたりてまねびありく

きゝもらす(源夕きり)六十人のきゝもらさんこともことわりとそしたなう云々

きゝもらす(源)帝木冊きゝもらすさんもいとそ(同)末摘九御笛も吹きさびでた

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

ささらささひなうおとしませ(同)帝木十なるまことの筋をこまやかよかきえたる

蓬生)五御せうとの禪師の君をかりぞ(同)十このせんどの君もまゐり給へり(同行
幸)廿中將の君ぞつらくいおとする(續後撰)雜。慈鎮通世のいとま申けるよ「君か
柏木
くして山端ふのくをまひせば獨うき世よものやおもせん

補 **きと** とちめよ (躬恒集)「名よおへばと布からねさもみやち山こえん手向の
おく語勢

ぬさよせよ君(小大君集)「とことまよゆけりありけりうりつくりそのことさきよ
たてりよ君(拾)連くらをべよやのいまよま君(同)「春のよよところもどむと

いふかるいふたりぬさかりみてたりや君(同)「ひとよまよむねのちぶさをほむ
らよてやくをまぞめのころもきよ君(同)「月影のあかきみるともさらよなの山の

麓よあがるをを君(狭)四上四「とりあつめまよまなき名をたてんとやうよろのを
かよかりせよやきみ(拾)八四よみ「若らまこのうちよきりつよこよひさへいりて

りひとりぬるとりや君

補 **きとつをつく** (宇治拾)十五 從者とも大りさどかく申よ及まきてとて黄水をつき

あひたり 海賊ニオツ
レテナリ

補 **きと** 來 (忠見集)「をみよよのきよともしと沖つ波なちうちかけようらいな

いとも(能宣集)「こよまよきよもせとといおもへとも尋んといひ一人ぞまよる

る(新千) 戀五 爲相「かれねよよよ住の江れきよもせぬつらさむかりの草の名もうよ

きとろふ きしりあふあり (源繪合)六 かく参るて御娘よきとろふさまよてさふらひ

給ふもかよよよあかまおおすべよ(空穂 嗟峨の院)七かからきよあるべき事と

思う給へよかどうたてきとろふ人がちなりけるを(源少女)八立出給へらんよまよ

てきとろふ人ありがたくやと打なけき給へば(同 句宮)三 大姫君の春宮よ参り給ひ

てまたきとろふ人なきさまよてさふらひ給ふ(同)十あそびなどよもきとろふ物の

音を吹よてけよいとまよくも云々(同 紅梅)三 春宮よの左のおおいどのよ女御なら

ぶ人なけよてさふらひ給ふのきとろひよくけれど(うつは 吹上)十 仲忠かよこまり

て仰を承りてよよとよきとろひて猶こゑたて(同 初秋)上ノ 角力すまひのさか

りよきとろひて云々 かくきとろひいとみかまよして出こぬほよ(同 嗟峨院)六 其君

いもとよりあめつちようけられて明王が子と生れ給へる人なりかれをきとろひな

さばいとあよからん(阿佛庭訓)宮つかへもほとよつてきとろひあらそふことよ

て(神武紀)初 分彊用相凌躒(世繼物)女房の車きとろひ(文選)曹子建 七啓陵轅諸侯

きとる(夫)卅三「いさひきて氷をきとるすまよるまおもきとるれへのわれぞまされ

る(白文) 賣炭翁 夜來城外一尺雪燒駕炭車輾氷轍

きーかた(源夕顔)八きーかたも過給ひけんごたりなれど(同)廿きーかたのことな
ど人いれおおもひ出けり(補)續拾(神砥)「住吉のきーかたとほき松がねは神代をか
れてよそるいらなま(定頼集)「きーかたさもうたがそれけり月よこならうが不
もとひ一人かな(輔親集)「きーかたも今ゆく末もと不ければ中ぞらよのきさそ
るりな(後拾)羈旅能宣「まのうらをけふ過ゆけときりたへかへるなまにやこと
をつてま(同)雜四棟仲「おそれ草つみてかへらんまよのきーかたの世におもひ
でもな(家經朝臣集)「おぞつかなかりそのをのきりたをくめるや誰ぞ戀す
るやこれ(新葉)戀三嘉喜門院大藏卿「まよのきーかたとぞくたのめ來てまつも久き
身のちぎりかな

きーかたゆく(源若菜)上八十七今ハきーかたゆくさきうろやまくおもひなりま
て侍り(同)夕のほ)卅きーかたゆくさきのためと成ぬべきことあるなめり(同
桐つは)七きーかたゆく末おぞめされせよろづの事をなくちぎりの給そす
れど(補)同わかあ)廿一かくきーかたゆくさきのととりもふかきなめり(狭)
廿四下きーかたゆくすゑこよなくおぞゆるを

補きーた(岸田(新後拾)雜秋公勝)「松よのとおとひひきて住吉の岸田のはなと秋風ぞ

ふく

きーむ(枕)二墨の中石のこもりてきーくときーみたる

補きーのひたひ(顯季卿集)「浪かくるきーのひたひのめなれきのめなれて妹とぬ
るよしもがな(續後拾)哀傷觀身岸額離根草といふ詩の文字を始よおきて云々(枕)三
五あやふ草のきーのひたひよおふらんもけよたのもけなくあそれなりいつまで
なさいおふるところいとそらくあそれかりきーのひたひよりもこれにくづれや
をけかり

きーやう(起證)つれく)六十ひえい山は大師勸請の起證といふこと(宇治拾)十

一今よりながく起請をましかくきーやうして後(三代實錄)十七貞觀八年正月廿三
日は日勅禁斷諸司諸院諸家諸所之燒尾荒鎮并責人求飲臨時群飲被除責被物起請傳
云々(十訓抄)十二起請を書て三塔は披露せらる

補きーき(儀式)榮若水)七かくてやうくおそまをどまきやうてくおほいのみ

かどいふるとよ火いできてのいれたいところあささうてなよのきーき
もかくておそまをどまきぬ

補きーく(枕)二)きーりよかみのいりてせられたる又すみのかか石こもりて

きく〜とき〜みたる

きく〜みち 岸道(夫)廿一「ひさぎおふるかた山かけのきく〜ちのちぐれまたへぬ秋のいろかか 信實

きびこ カヨワキ也幼キ中ハ何事モカヨワキ也(源竹川)五 そのころ十四五をかりよ

ていときびこよをさかかふるべきなどよりの 云々(うつほ 藏開)上、一いどあてまきび

こよて何心もかき顔し給ひて御と十七 云々(源桐壺)廿七 いかうきびこあるほど

のあけおとりやとうたがのくおせされつるを(宇治拾)廿四 ゆめかどをみるこ、

ちしてこかくきびこなる程よてのあり物おせ給せ(源若菜)廿七 女三宮ナ

といミドくかたかりよきびこある心ちしてそそくあえりようつく〜くのみ、え給

ふ(散木)中 一きのふまできびこよみえしひめゆりのいつさちかれて人とねぬらん

補(源少女)十 雲井能 八姫君の御さまのいときびこようつく〜うてさうの御ことひき給ふを

(同野分)三 たゞ今いきびこあるべきなどをかたくなしからせとよゆるも(同桐壺)

卅いときびこよておせ〜るをぬ〜うつく〜と思ひきこえ給へり(同少女)九

直衣おどさまかされる色ゆるされて參給ふきびこよきよらある物からまたきよお

よせけてされありき給ふ(源氏新釋)云戸令よ三歳以下爲黄いひ黄口之兒ともいふ

の鳥のひ、なま譬へて黄といへりひこと稚弱きを俗まひびづかりともひよ

いとも又よとくたわめる物をひび〜るをともいふよ同トく幼くてよききにい

へり然れの假字もきびこと書べい

補きびのときき(散木)「あさいてよきびのとききのみかへ〜いととそれと

あひてかきき

きび〜く(枕)五 行事の藏人いときび〜うもてあしてかいつくろひ二人をらそよ

り外のいるまとおさへて(源常夏)五 覚えぬさまよて此君をさし出たらんよえか

ろト〜くのおせさやかしいときび〜くもてなしてんかとおせ ユルガセナ (同

少女)八 例あらんよまかせてあなむる事をくきび〜う行へ(榮 玉の村菊)十 七 よるひる

きび〜くおほせられていそぎつくりみかきていらせ給ひて(玉葉) 戀三 參議堂 かよひけ

る女を親のきび〜ういさめて 云々(新續古) 釋教 一あらき海きび〜き山の中おれど

妙なる法へたてざりけり(新千) 哀、云々 傷 やむとどなき所よりきび〜うとがめられ

けれバ(枕)廿三 い かよいとききび〜ういひとがめん(著聞) 十六 以外の外よきび〜く

てなどいふをひとりがいふやういかよきび〜くとも我の高あ〜とよきてとりて

ん(宇治拾)廿一 き び〜けよたづねとひさふらひつれバ

補 **さび** **さ** (宇治拾) 是こしさがりたりけるさびすを沓くそへかがらとらへとりけ
れバ沓のさびはまあしの皮をとりくそへて沓のさびを刀よてきりたるやうまひ
さゝりてとりてけり云々沓の踵きれてうせまけり(うつほ宮)廿くつかたしせ
んかいかたしきびすとばまよまきてかちからまるりて

補 **さ** **ま** **ま** **ま** (今昔) 肝をまよそしてもとめあへること

さ **も** **な** **ま** **ま** (肝 盛衰) 四十二此扇誰り射よと仰られんと肝鱧をつくり難唾を飲る
ものもあり

さ **も** **く** **た** **く** (靖蛉日記) 中いりあひまなん肝くたく心ちすとて哥云々

さ **も** **こ** **ろ** **さ** **か** **え** (うつろ 藏開) 上二其音聲がくをきく人の皆さも心さかえてやま
ひあるものいなくかりおいさるものもわかかりか

さ **も** **さ** **え** (肝消 六帖) 上「むかひるてをむくやどどにきもさえて歎きしものを月の
へまける

ぎ **せ** **い** (碁聖 花鳥) 備前椽橋ノ良則ハ云々 出家シテ名寛蓮云々 碁ノ上手ナルニヨリ
テ碁聖トイヘリ云々 抱朴子云圍碁者世謂之碁聖故嚴子卿馬綏明有碁聖之名者也

(源手習) 廿八 **き** **せ** **い** 大とこにかりてさし出てこそうたざらめ御ままはトかきと聞
え給ひしよ契沖云万葉第九ニ碁師哥一首云々 同第四ニ碁檀越トイフモノ有此碁
師カ碁聖ト同シ心カ

き **せ** **こ** **こ** (後撰) 秋とかりにそと侍れる時九月八日伊勢が家の菊まをたをさせまつ
かそたりけれバ云々 ○菊まさせたる綿をもて身をなで命をがらんことを願
ふためよするかるべし

き **せ** **な** **が** (鑑也 平家物) 廿三 入道どの御させながをめされ候うへ侍ども皆う
ち立て只今院の御所法住持寺殿へよせんとこそ出立候ひつれ

き **せ** (源紅葉賀) 十 そりかさ事たまきせをもとむる世よ (同 螢) 十 おおつくの人
のきせつくまかりの事なくともやみまがあ (同 帚木) 九 およびひとつをひきよせ
てくひ侍りしを云々かゝるきせさへつきぬれば (同 朝顔) 十 御をきこゝろのふりが
たきぞあたら御きせなめる (榮 つほみ花) 十 さべき人のめこみな宮づかへよ出そて
ぬこもりたるいおぼろけのきせかたもづきたらんとぞいふめる (同 行幸) 廿 それ
をきせとすべきことか (同 浮舟) 三 四十云々とおもひたどるまわが心ま疵ありて
かの人よとまれ奉らんおほいみどかるべしと思ひとたるゝせりしも (神代紀) 卅
以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存 (補 寛平哥合) 一もみち葉のちりこむ時の袖

よろねんつちよおちあばきせもこそつけ

きせをもとむ(源 桐つは)四かしこき御かけをわたのこ聞えあがらおとしめきせを

もどめ給ふ人のおほくこが身いかよこく(後)雜二高津 内親王 直き木まがれる枝もあ

る物をけをふき疵をいふがわりかさ(韓非子)今或無罪爲臣下所侵辱有司吹毛求疵

きせかさ(枕)四きせなき玉(源 紅葉賀)十きせなきたまとおもろくかづくよ(同

帯木八きせぐれてきせかさかたのえらひまこそ及ばざらめ

きせくすくよらど同トヤのらならずツンシャンといたる事也きハ木カ(枕)十。生昌 猶例の人のやうまかくかい

ひ笑ひそいときせくかる物をいとろけよと制し給ふもをか(注)健固ニ正直ナ

ル物ナトイタハリテ宮ノ玉フ也(源 橋姫)十僧都僧正のきせと世よいとまかくき

すくよて(同 榎柱)十一とませゆき玉の臺ようひくうきすくかるさまよていで

いるほどもかたよ一人めたつらんとかたをらいたれば(同)十人いかよとりか

侍りげんときせくよかさ給へり(或云カザルヲナクアリノマナル也)(同 初音)

三いとまめよきせく人よておとす(河)眞木強人(師)實目ニクスミテナリ(同 總角)

八四みたれそめドの心よていとときせくよもてなく給へり

○由の部

ゆ(藥)源(手習)十物いさか參る折もありつるをつゆをかりのゆをたま參らせ(同

明石(二)四十おもひかぐさめて御ゆかどをたまる(同 あふひ)廿御ゆまわれかどさ

へあつかひ聞え給ふを(同 柏木)十御ゆなども聞しめさせ(補)廣足云物語おと湯と

いへるいとを藥の事かり藥の某湯といふを湯とのといへる也

補ゆ(湯)常ノム(万)十六きせかべよわかせことも(著聞)廿湯をわかして釜の前

よるたりけるよ

ゆ(温泉)古(羈旅)但馬の國の湯へまかりける時よ云々

ゆ(舟)拾九長哥云々ゆさかよひゆもどりあへせかりよける舟のわれをしきみ

あらバ云々(賴政集)下十一こひさの泊もあらでゆく舟のゆまかくものいなみど

かりけり(和名)十一岸(和名)由洩舟中水之斗也唐韻云浴(漢語抄云岸布奈)水和物也(補

舟ノアカ和訓栞舟よ入水水をゆといふも湯の義思たる詞也

ゆ(琴)源(紅葉賀)十ちひさき御ほどよさしやりてゆ給ふ御手つきいとうつく

けれバ(同 若菜)下廿五ひるいと人しく猶一さびもゆいあんでるいとまも心あこ

さしけれバ(細)二のハニスル也按るハオス也(同)下四ゆのねふかくいみどく

きみて聞えつるを(同 明石)廿ゆのねふかうすまたり(補)同少女十姫君の御さま

の云々さうの御ことひき給ふ云々とりゆのてつきいと下うつくりたるもの、心ち
するを

補 **ゆ** 柚 (著聞) 十 孟酌ありけり終座より宰相中將今の柚まるらそやと侍けれ

ばそかそちまるらせたりけり或上達部 經家卿云々 柚八柑七とことそをつぐひて八よき

りたりけるを 云々 其柚きりてまるらせよと仰られけれ 云々 柚をバ三よぞ切たるおよ

そ柚をさることハ孟酌至極の時の肴物也孟をとる人必三度のむ事よ侍とかやそ

ののみやう切るを見て一度孟よ入て一度をよくして一度也 (同) 十九 侍臣獻負柚
菊時負物也云々

ゆ 尿 (神代紀) 十三 尾此云愈磨理 (和名) 三 尿 和名由波利 小便也

ゆ 末 (袖中抄) 「かゝる木のゆをむてふ紫のあそんあそトハそひのこゝろよ
纈ノ字ヨメリ 云々 儀制令 云々 注曰以五色交練以爲纈文又順和名云纈革コハダカハトヨ

メリ云々 今案ニスハウハジカウケケ紫カチアケ其外ニコハダカハチアケタリ云々今

ノ哥ニモコハダソムテフ紫ノトアレバ色ノ外ニ別ニコハダト云フアルベシト聞エ

タリ纈ノ字ヲハ字書ニク、ルトヨメリ綺語抄ニ云ノユヒナイフナリ (夫) 卅 (顯季
集) 「君がためゆ末のきぬをとりあで、神をぞまつる万代まで (同) 顯季 「と

ひさよゆ末の帯をとりあで、神をぞまつる妹よあそんため (同) 卅三 般富 「心み

よゆ末のひもをときをめてふかくいらんいろのかそらト (續後拾) 戀 (万代) 戀

基 「あふことハかさむむびをるわぎもこがゆ末のひもよいつかどくべき

ゆ 末 (古傳) 廿三ノ弓端ハ由波受と訓べし云々 波受ハ弓末の端ハ在て角又骨

かさを以て造れる物あり云々

補 **ゆ** 末 (中臣壽詞) 所聞食由庭 乃 瑞穂遠 由庭 止 所聞食 止 ○齋庭ノ義也

ゆ 末 (六帖) 三 「とよ野のおろかそ水のゆをびかよあらぬもの故波の立らん

(源 里か紫) 四 こと所ハ似せゆほびかある所ハ侍る

ゆ どの 湯殿 (狹) 四ノ上 御湯どの、ぎしきありさま九日の夜までの御うぶやいひ

そもかさつゞけむとも思ひやるべし (宇治拾) 三 九ゆどの、たれぬのをときおろして

例のゆどのへ入て (源 若紫) 廿 御ゆどのよもあたらう (同 檣柱) 七 ぬぎかへて御ゆど

のかどいさうつくりひ給ふ

ゆ どの (つれく) 九十 雉松茸かどの御湯殿の上よかりたるもくるしからせ 云々

(同) 中宮の御方の御ゆどの、上のくろみ棚子鷹のこえつるを (注) 浴室よあらせ

料理の間よ湯よて物をゆで或ハゆふさかとするよよりて名づけたり

増補新編言集 卷之四十四

のり許(宇治拾)廿三、さてほどなく大赦のありければ法師ものりよなり補(長秋詠)

藻下近衛院の御時四位の、ち昇殿のりて云々免許

補のりより(万)廿八「かゝこきやみことかゝふりあそゆりやかえがいむさねをい

むなしよして

補のり此のりい後よと(万)十八「とも火のひかりよ見ゆるさゆり花由利もあそ

むとおもひそめてき同「さゆりをさゆりもあそむと思へこそいまのまさかあ

うるそしみすれ同長歌「さゆりをさゆりもあそむとなくさむるこゝろしなく

い同「さゆりをさゆりもあそむとあそむるこゝろしなくいけふもへめやも

補ゆりかくる(空穂 藏開)上、御ぐり御せよそこしさらぬほどよてやうしかけたる

ことしてあろき御ぞよひまなくゆりかなられたり

ゆりよせる(夫)廿六「波よやどる月を汀よゆりよせてかゞみよかくる住よの岸

ゆりする(玉葉)夏三條入「夕されば涙こそ池のそちを葉よ玉ゆりする風のそ

せしさ(山家)上(夫)九「ゆふたちのもるれば露ぞやどりける玉ゆりする蓮のう

さそよ俗にユスブル補非
さそよ俗にユスブル補非
ゆり(源)わの上廿七琴の緒もいとゆるよそりていたうくたしてあらべひゞきおそ

くあそせてぞかきからし給ふ(榮 楚玉夢)十御ぐりのいとこちたうお布かるをいと

ゆるよひきゆをせ給て(源 若菜)下五せさき心ある人のさるべきよてたかき身と

かりてもゆたかよゆるべるかたのおくれ

ゆる、か(狭)上廿七身色如今山端巖甚微妙とゆる、かようちあけてよみたまへる

(枕)廿一大納言月も日もかそりゆけどもひさよふる三室の山といふふる事をゆ

る、かよ打よと出でて給へるいとをかしと覺ゆる(源 柳)卅六白虹日をつらぬけり

太子おちたりといとゆる、かよ打よしたるを同卅四あやかむよぶつていと名

のりてゆる、かよよ給へるまた世よいらせきこゆ同常夏七たごくくお

がめくことあらせとゆる、かよこそおきて給ふかれ(瀆松物)上二うちくいな

ほそのかこりゆるらかよてある人かれ

ゆるか(夫)一般富門「まきの戸をあくれば春やいそぐらんたもとよさえし風ゆる

かあり

ゆるが(枕)八三母をよひきゆるがすまおとなよ物いふとてふともきいれね

バ補源蜻蛉五十君をひきゆるがよべかめれば(枕)十四待つ人をよある夜雨のあ

し風の吹ゆるがよふとぞおそろかる、(同)十六宮もよらせ給ふを引ゆるが

増補新編言集 卷之四十四

奉りて(同)廿七木のもとよりて引ゆるがそよあやふがりてさるのやうよかいつ
きて(同)九かたをらかる人を引ゆるがせバ(同)九ノえせ車そもうーかけて所ある
かたよゆるがいもて行かいとわびいけなり

○ゆるがい出せ枕廿五題出して女房い哥よませ給へバ皆けいさざちゆるがい出

そよ補ゆるがいゆく枕廿六きたなけある車いえせ牛かちてゆるがいゆくもの

ゆるがさぎ夫卅一西へゆく月をバ風もゆるがさぎまうきたる雲ぞ空いたまよふ

○補ゆるがぬ拾玉四「うれいさいのつひいをむべきみやまぢの草もゆるがぬのり

の秋かせ(万代)春上重之女「春立てなほふる雪をいわたせば枝もゆるがぬをさぢり

ける

ゆるらか源若紫九髪ゆるらかいどかがく(注)のびらかある也補源若菜卅一

ゆるらかまうちふく風いえからままひたるとまのうちのかをりもふきあせて

(同)四十雲井二が北方の故大宮のをいへ聞え給ひかぞ心いもまめ給まぢりい不

まいわかれ奉り給ひいかバゆるらかいもひきとり給まぢ

ゆるく源日かき上十その思ひかかひていいどまゆるくかた侍らト(源關や二女車

おほく所せうゆるぎくるい同をとめ四人のみけいきのうちもゆるがん不をこ

そまちとさり給へ(同玉葛卅一一筋いまつもれて今めきたるこのもいゆるぎ給

まぬこをねたきこのいあれ(同楨柱廿まぢぢうあるひどゆるぎ所あるまトきをとて

(夫)廿二「ゆるぎかき大内山の石なれバ千とせとるともおちトとぞおもふ(同)九

俊惠「夏山の空ひくまでかく蟬のこのもゆるく心ちこをれ彌散木(風のい

たく吹ておちぬまかりいゆるぎけるを見て(宇治拾二ノまなもたけの木ゆるぎて

鼻もづれて(同)八此倉云々ゆるぎいて土より一尺さかりゆるぎあがる(宇治拾

一おそろいと思ひかがらゆるぎ出たりけれバ(同)廿九此山ゆるぎたちいけり(枕一

四御つあそりて出させ給ふ御このかたびらのうちゆるぎたるぞとまこといかい

らの毛をと人のいふいさらいをらとをらとから申(源わかき上十そのおもひかかひてい

いとまゆるくかた侍らト

ゆるふべ(源帯木卅あまりむけまうちゆるべとまなちたるもころやまくらう

たきやうかれと(同行幸卅よもひのつもりいのたまおのづから打ゆるぶ事のみか

ん(同螢十おぢいまづとつるとい頃のあそりをき御有さままて心ゆるび給ふこと

もお不かるい同初音十御琴をものろるまいき袋どもいてひめおかせ給へるまな

ひき出ておいのこひてゆるべるをといのへさせ給ひかと(同夕霧五十かく女の御

ひき出ておいのこひてゆるべるをといのへさせ給ひかと(同夕霧五十かく女の御

こゝろゆるび給とぬとおもひよる人もかゝ(著聞)六琴を引給ひけり一弦ゆるかり
ければ右衛門佐清正よ仰せてもらせられぬ(補)後拾(國行)「そぎがてよおぞゆる
ものゝ蘆間かななり江のほとけつをでゆるべよ(万)十七ノ「こゝろよの由流布こ
となくそがの山すがなくのみやこひこたりなん

ゆるされ

体ノ語(源柳)五こたれそのこさかりのゆるされの侍りやとてのぞりる

給へり(同蓬生)十御みづのらこそあからさまよもたらせ給とね此人をさよゆる

させ給へとてなん(同わかた)下百かまトひよゆるされ奉りて(枕)十三いどゆか

しき文かゆるされ侍らばあけて見侍らんと給とそれバ

ゆるぎけもなき

(詞花)上更よゆるぎけもなき女よ七月七日つかさしける 大納言 道綱

「棚機よけさひく糸のつゆおもみたごむけしきをみでやみかん(清輔集)「水ゆ

けバ川ぞひ柳うちをびきもとの心ゆゆるぎけもか(補)頼政集)「からさどとうそ

ける竹か妹と吾ふしをあらべてゆるぎけぞあき

ゆるぎありき

(枕)十一翁丸あそれいみトくゆるぎありきつる物を

ゆるく

(枕)十六あつろのそしらせたる云々ゆるくとひさしくゆけバいどころ

一(同)廿二うち見かへりくと此さびゆゆるくと物うけよて卯花をかりをとりお

そるるもをか(源行幸)十櫻の下がさねいとながうちりひきてゆるくとどこどさ

らびたる御もてか(和泉式部集)「庭のまゆるくとおふる夏草をよけてさかり

よこむ人もが(補)狹)三下御ぐのかたのほどよりこぞれ出たる御ひたひがその

袖口までゆるくとひられ出さるもさまことと見ゆるよ

ゆる

(光經集)「朝日さそ山のちら雪さえそめて霞よゆるきそるのかせかあ

ゆるく

(枕)九風ハ三月さかりの夕ぐれよゆるく吹さる花風(あまいと哀あり)補

あま風尤

可然歎(新千)春上「いさりするよさのあま人出ぬら浦風ゆるくかすみこ

これり

ゆる

(後)上春むつきのついでちころよまへゆるされりけるよ(源東屋)四才ある

といふ方の人よ許されたれど(同)七かやうのあさりよいさかよさん人のをさく

ゆるさぬ事かれど(同)九月ころ内の御かたよせうそこ聞えさせ給ふを御ゆるしあ

りて(同九)またをささきもあまたおとするをゆるい給と(源あか)十思ひあが

りたるさまのあてあるよおぞゆるしてみ給(武烈紀)二瑜屢世登耶彌古(源空蟬)

九さるべき人々もゆるされか(同)推か本)十さばかり御心もてゆるい給ふことの

さしもいそがれぬよ

ゆるいいろ(源末摘)廿ゆるいいろのわりあううをとりみさる一かさね(注)紅紫の
深色の禁色とあづけ浅さをゆるいの色といふ制禁はおよそたれも着る故あり
(同玉葛)四十御料もあるくちなしの御ぞゆるい色あるをへて給ひて

ゆるいなく(源若菜)廿五物ふかきてよけ及をぬを何心もなくて参り給へらんついで
でし聞しめさんとゆるいなくゆかしがらせ給せんいとそいたなるべきことよ
もといとそくおそいて(同帚木)七いとゆるいなくうたがひ侍りしもうるさくて

ゆるび(源末つむ)九こゝろやまきひとりねの床よてゆるびよけり(狭)二上ノ筆の御
こと緒いたうゆるびけるを盤陟調よあらべて

ゆるびなく(源野分)九そのとくやうよきこえたそふれ給ふことのおもむき
よゆるびなき御かりらひりなと聞え給へり

ゆるす(ゆるしノ所)廿下ノ許諾(源楨柱)初たれもくくゆるしそめ給へ
ることおれば(同帚木)三かたをかるべきもこそとゆるし給そねば(いせ物)五ある
トゆるしてけり(和泉式部集)「とへとも思そぬやへの山吹をゆるすとといそを
りよこんとや(源桐つは)六まかでおんとしたまふをいとまさらよゆるさせ給そぬ

(同)六心をさめざりけるをど御覽トゆるをべ(同帚木)二さがかくゆるしをか
りしもこれとみねとおもふ方の心やありけん(同夕のほ)廿御心ざしひとつ
のあさからぬよよろづの罪ゆるさるゝかめりり(枕)八ノをせんや侍るまろも
うたんとおもふいり手ゆるし給せんや頭中將とひとしで也

補ゆをけ(湯桶)九ゆをけを下よどり入て
(ゆり)床(狭)二上御帳のりたびら少しゆひあけて大宮ゆりよおしりておそし
ますを(源柏木)十朱雀入ラセ宮をも云々ゆりのしもおろし奉る(同すま)四十
月いとあろしさいりてそりなき旅のおまし所の奥までくまか床のうへよ夜ふ
りきそらも見ゆ(狭)三上母代ノ今姫君又君のふし給へる所よよりきてゆりより
あらりよ引おどしつ云々(源空蟬)八君いり給ひてたゞひとりふしたるを心
やそくおそを床のちもよ二人さかりぞふしたる(同わのあ)下六ゆりのちたよいた
きおろし奉るよ(千載)秋下花山院「秋ふりくかりよけらよきりよそゆりのあたり
よこえ聞ゆなり

ゆかり(拾)物名(ナムキ)「この花のいろよのさくをむさしの草のゆかりと人もこそ
いれ(重之集)十一「いよへの戀しき人のえとぬよ花のゆかりをあひみつるかな
(續後拾)別(元真集)九「袖のうへようべ白露ぞりりけるよかる道のくさのゆ

曾補言集 卷之四十七 四十七

増補新編源氏物語
卷之四十八

かりよ(同)五「ひとりねのわびしき旅の草まくら草のゆかりよとふ人もな(六
帖(下)貫之集(上)「ゆくりともきこえぬ物と山吹のかそづか聲よよひける哉(同)
同「雪ふればうときものなく草も木もひとつゆりよありぬべらあり(源竹川)三
心おかれ給ふこともありけるゆかりふや(同)空蟬(十)つらきゆかりよこそえおもひ
そつまつけれと(同)若紫(廿)五ひとつきさいさらさればよやととおもふゆかりいと
むつましきよいかでかとおかうおもほは(續世繼)序おもひかけぬ草のゆかりよか
そがのこさりよそみ侍あり(源)若紫(廿)四あながちあるゆかりもたづねまよしき心も
まさり給ふあるべし(金葉)冬内(大臣)かよとなく年のくる、いをしけれと花のゆかり
よもるをまつかな(新古)戀四「あそれなる心のやまのゆかりともよよの夢をた
れかさためん(拾玉)六「をしめともとまらぬ花のゆかりとて恨そつべき春のうへ
か(千載)戀五「いとさる、そのゆかりよていかされば戀ハこが身をとなれざる
らん

ゆかりむつび(源少女)廿三ゆかりむつびねぢけがましきさまよておととも聞おせ
所侍りかん(同)蜻蛉(卅)二ゆきことあることをきゆかりむつびにこそあるべけれと
(狭)三下いつしかとあるべかしきゆかりむつびをさへてもてあつかふとおせ
らん

めせらんか

ゆかたびら(延喜式)廿一浴衣一領(和名)十四温室經云澡浴之法七物其七日內衣

和名由加(建武年中行事)六月十日御ゆかさびらめいていらせ給ふ(榮玉のかさり)九

御ゆかさびらさがらおそしまたる(相摸集)ふくよおそせる人のゆかたびら
の袖を鼠のそこかひたれ(云)多武峯少將物語ゆかたびらたゞのといかよせさせ
給へらんと(云)裡あく一重あるものを何よまれかたびらといふあり

ゆがむ(源寄生)九十聲うちゆがむたるものひたちのせんト殿の姫君の初瀬の御寺
よまうで、かへり給へるなり(同)東屋(三)聲おとやと、うちゆがみたまひて(同
わかち(上)六そのむくいみえゆがめることかんいよへたおほりける(狭)三上

琵琶もあせせなど上の、給せせつるをなかり、ゆがみぬべろぞ侍りけるとの給へ
ば(源紅葉賀)廿七かうふりなど打ゆがめてそらんうしろで思ふよいとをこあるべ
いと云々

ゆがむ(源末摘)廿七御車よせたる中門のいといたうゆがみよるをひて云々いとあそ
れよさびしうあれまどへる(同)手習(十)とを老法師のゆがとおどろへたるものぞ
ものみおろかれ(備)拾玉(四)「人心神よたがそまの竹のゆがまんかたをためて

増補新編源氏物語
卷之四十八
四十八

増補雑言集 卷之四十九

とよかゝ(宇治拾)廿六うしろの帯引ゆがめられたるまゝは

ゆかゝ(源桐つは)四いとゞ人ころうかたかまふりそつるもさきの世のゆかゝ

かん(同)帯木三 近きみづいなるいろくの紙をる文どもを引出て中將よりかくゆ

りかれば(同)十されど何か世のありさまを見給へ集るまゝは心よ及さぬいとゆ

かゝき事もあゝや(同)四そのうちとけてりたそらいさしとおぞされんこそゆかゝ

けれ(金葉)少將内侍 一たぐひかく世よおもいろき鳥をればゆりうらぎとたれり

おもこん(補)竹取上 五人の人の中よゆかゝきもの見せ給へらんよ御心ざしまさり

さりどてつかうまつらんと(拾)兼秋 一織女のあかぬわかれもゆかゝきをけふも

あどか君がきませる(同)兼下 一山ふも野おしもかくてこゝろみつ今のねり

のねやぞゆかゝき(風雅)兼中 一たづね行みちもさくらをみよしの花のさかりの

おくぞゆかゝき(後拾)兼一 一こひいかん命のことのかをからせつれなき人のま

てぞゆかゝき(同)兼永 一ことしたまかみと見ゆる池水よ千代へてをまんかけぞ

ゆかゝき(同)兼皇 一よもをがら契しことをとすれまばこひん涙のいろぞゆ

かゝき(同)兼赤 一こよひこそ世よある人のゆかゝけれいづこもかくや月をみる

らん(源横笛)四 一うき世よあらぬ所のゆかゝくてそむく山路よおもひこそいれ

(新後)兼中 一ゆく末のまはかゆかゝきこゝかたようき身のそとのおもひりよき

(金葉)兼春 一年でとよ咲をふやどの櫻花をそゆくを春の春ぞゆかゝき(同)同 一う

ぐひその木づたふさまもゆかゝきよ今一こゑのあけさて、かけ(和泉式部集)「そ

のそと、ちぎらぬ中のさのふまでけふをゆかゝきと思ひけるかな(玉葉)兼下 一こと

かたもまたゆかゝきよ山ざくら同ト一木をいづかよも見せ(同)兼二 九條 一こと

そいたぐをさねよもちぎるらん見えぬこゝろのおくぞゆかゝき(風雅)兼中 一あれ

よけるやとて月のかそらねど昔のかけのなぞゆかゝき(新拾)兼下 一きてみよ

とさらよもいそト山ざくら残りゆかゝき程よやのあらぬ(新後拾)兼上 一のぞるべ

きそこののぞりぬ位山これよりうへの道ぞゆかゝき(枕)兼三 一ゆかゝかりけるもの

をあれ見せよやとよなどゆるがまよ(同)兼八 一とくゆかゝきもの 此條見(同)廿三 一い

ゆかゝき文かをゆるされ侍らばあれて見侍らんと給とすれば(兼盛集)「かりよ

くる人のやとさきむかゝよりみやこの事のゆかゝけれさも(源タきり)兼九 一いかよ

てかくよまかよその御ありさまなんゆかゝきとの給へバ(同野分) 兼十 一い

甘例のものゆかゝからぬこゝちよあながちよつまよのみをひきよて(同常夏)兼六 一

いといまめかゝき御文のけいよきよも侍るかなとゆかゝけよ思たれば(同寄生)兼五 一

かたそらいたくて志をき給へどまたゆかしくかりつゝ(いせ物)百三かたちをやつ
したれさものやゆかしくかりけん加茂の祭見よ出たりけるを(玉葉)夏周防「けふの
いとゞさくらもどこそゆかしくけれ春のかたゞ花やのこると(紫式部日記)まして
いかぢらんかど心もどかくゆかしくさよ云々(玉葉)雜五 鴨長明 「あれはいとふそむけバ
またふ數をらぬ身と心との中ぞゆかしく(拾愚)上 「またかれぬ花のよほひは旅ね
して木立ゆかしく春のよのやと

補ゆた(万)十四「あさかゞた志不ひのゆたよおもへらばうけらがをかの色よいで
めやも(同)十四「かくをかりこひむものぞといらませバ其夜のゆたよあらまよも
のを

ゆどち(新六)五「けふの皆ゆたちのいての外までもをゞのいとつきこゝかれまけ
り**補**(宇治拾)十五 あるべきやうよゆたちして弓をさしかざして志をありて(万
代)神祇「そのかみのたさかり事よ空をれて聲さえのゆるゆたち宮人廣足按よこの
立ある 師季 神樂あれば湯

補ゆたぬ 和訓栞云委字をよめり日本紀よ見ゆゆたよとも見ゆ又付囁をゆたぬつ
くとよめり

ゆたか(竹取)「此子を見つけて後よ竹とるよふりをへたてよよとよこがねある
竹を見つくることかさかりぬかくて翁やうよゆたかよなりゆく(源繪合)七山水

のゆさかなる心をへと(同 若紫)六のこりのよまひゆさかよふべき心がまへもよあ
くしたりけり(宇治拾)十二「もからざるよ賢出きていへのうちゆさかよかりぬ(源
梅枝)十「あゝでのさうよともぞ云々水のいさほひゆさかよかきなり(古)雜上よみ
六

「うれしきを何よつゝまんから衣袂ゆさかよたてといままよを
ゆたん(枕)六。方弘ガ 除目の中の夜さよ油をるよ灯臺の打しきをふとてたてる
よあたらしきゆたんかれバつようどらへられよけりさよあゆきてかへればやがて
どうたいいたふれぬまたうつ打しきよつきてゆくよ

ゆたのたゆた タユタフチ重タル言也(万)ニツタフニ (人丸集)二(万)七ノ「こが心
湯谷絶谷(万) 猶像不定トカケルチオモヒ合スベシ よりがてましを(同)
ゆたのたゆたようきぬかそへあもおさよもなりよけるかを(六帖)三(古)戀一よみ
八しらす

「いでわれと人などがめを大船のゆたのたゆたよ物おもふ頃を(万)三十一「うなそ
らの道よのりてやわがこひをらん大舟のゆたよあるらん人のこゆゑよ**補**(續後拾)

羈旅衣笠「こたの原八十島と行く行舟のゆたのたゆたよ都こひよも
前内大臣

ゆたけ(後拾)神祇よみ「あめのしたとぐむ神のみをなればゆたけよぞとつみつ

のひろまへ(仁徳紀)七 豊穰の字富寛の字を訓せり(拾) 神樂「ゆふたをきかくる袂
のわづらさしゆさけよとけてあらんとをしれ

【補】ゆたけ(枕)十二、夏うきものかたつかたのゆたけきたる人こそよくけれあま
かさねきたればひかれてきよくし云々 左右のゆたけかるのよしをれもかき女房の
さうぞくよていところせかめり

【ゆたけき(源東屋)】廿ゆたけきいさひをたのみて(注) ヨタカニ大ナル勢ヒト也

(同わかあ)十三、院の御賀まさかの御堂まで薬師佛くやうし給ふ云々いとゆさ
き御いのりなり(万)十二、「白たへのたもとゆたけく人のぬるうまいのねをやくひ

とさりなん(夫)廿六「おふのうらのそのおがたまよる波のゆたけき君のちよの末
哉(万)廿五、長哥 ゆさけきかも(字鏡) 傀儡製儼怪也美也威也偉也勢也由太介志(同)

伽、豊也饒也由太介志ゆたけく(万)八、四「おほのうらのその長濱よよする浪ゆ
たけく君をおもふ此頃

【補】ゆたて 湯立(中原康富記) 文安六年九月廿九日粟田口明神有湯立參詣拜見

【ゆづる(源タかは)】十五 あまご佛のゆづり奉るよ(同東や)四 我の命をもゆづりてか
しづきてん(同タ顔)廿 我いとよく思ひよりぬべかりしことをゆづり聞えてこゝろ

ひろさよかどめさましうぞおもひをる

【ゆづり(源わかあ)】廿八 かたそらいたきゆづりをれさ此いそけあき内親王ひとり
りつきてそぐみおやして(同竹川)三十 内より和とんさし出たりかたみよゆづりて

手ふれぬ(同)廿 見えものけしうのあらとゆづりきこえ給へるや(山家)上
「あづのめぐすくくるいとよゆづりおきて思ふたがふ戀もをるかな(万代) 春下
道因

「我やどの花をや風よゆづらまぬしよなりあはをしむさかりよ

○【ゆづらふ(源帯木)】九 かみんあもよたせられあものかよまびきてことひろさ
よゆづらふらん

【ゆづる(源夕顔)】廿 瀧口なりけふゆづるいとつきくしううちからして(万)
十一、一梓弓末のそらのよとがりる君がゆづるのたえんと思へや。(新勅戀四にも
此哥ありて末

の原よとわり

【ゆづる(万)】十四、一あどもへかあつくま山のゆづるものふ、まる時風ふか中か
も【補】枕(三)七、ゆづりものいミトウふさやかまつやめきたるも○或書云ゆづり葉を親

子草と云藻塩草卷九 杠の歌一年とよ此ころおつる親子ぐさ人よあたいさ人
やしるらん(兼盛集)廿 十二月大雪のふれるよ家よ男かいらよ雪かゝりてゆづるよ

増補 雑言集 卷之四十八 五十一

もちてきたり「おく山のゆづるをいりてをりつらんあやめもいらぬ雪のふれるよ
新勅戀三 基俊「かつみれとあほぞこひきききも子がゆづのつま
ぐいかにささゝまゝ

ゆづけ湯漬枕十二 十四いとどうゑひあどしてをりかく夜ふけてとまりたりともさら

よゆづけさよくせとせと(長門平家物)三御ゆづけまるれ我もくそん(源浮舟)七十物

聞いめさぬいとあや御湯漬かどよろづよいふを(大鏡)八さぎとの僧膳のせさせ

給てゆづけをかりさぶ(源少女)廿御ゆづけくた物をとたれもくさきこゝめを

(同 夢浮橋)四御ゆづけかどまゐり給(宇治拾)七 八冬ハ湯づけ夏ハ水づけよて物をめ

そべきなりと申しり補空穂國讓下 廿二まかかひせんやゆづけせよかどのたまへば

云々かねのつきよゆづけしてあせせいときよけよてどのよまゐる

補ゆら(拾愚)中「いせせのやとりふとたて、そいたかの梢もゆらよ雪のふりつ、

(千五百番歌合)七百五十一「秋の虫の手玉もゆらよおる機をされきてみよどのべの

夕暮(万代)秋上 輔尹「たかこの手玉もゆらよおりかけ雲の衣のこよひかゆたつ

ゆられ(頼政家集)一子をおもふ鳩のうきすのゆられきてきてとそればまがくれ

もせぬ補(万代)維三 隆祐「船人のまかちえけぬく手を寒沖ゆられて明ぬ此夜の

ゆらぐ(万)廿五 十八「その春の初子のけふの玉帚手よとるからよゆらぐ玉の緒(古事

記)上ノ 十三御頸之玉緒母由良邇取由良迦志而

○ゆらめき(濱松物)下御ぐいのふさくくとみどかうてゆらめきかゝりたるさぐり

つけて(遊仙窟)雅音鏗鏘

ゆらさる(堀次)幅一夜 戀兼昌「ちら浪よゆらされてくるより竹の一夜もね、バ戀一かり

けり(夫)廿七 後京極「とさこゑる汀の風よゆらされてよほのうきまのさびねしてけり

ゆらく(源 薄雲)七御ぐい尼をぎのそとよてゆらくとめでたく(宇治拾)六この

ふみかへしたる女の尻たちてゆらくと此くちをそのゆけバ(源 若紫)八かまの

あふぎをひろけたるやうよゆらくとして(同 補)廿八御ぐいのゆらくときよらよ

て補同わかかな)下 十七いときよらよゆらくとしてあをみおとろへ給へるよ(好

忠集)「くつわむゆらく思へ秋の野のやぶのそみかひあがきやさかも(夫)廿八 光俊

「うゑ竹のもとさへよみ風ふけばそよゆらくよわれもそれめや(濱松物)下 二か

みへるたけよあらんかゆらくとそぎかけられていつへのあふぎなごをひろけ

たらんこちちて

ゆうく(空穂 樓の上)下 七いさや心などの思ふやうよよくもあらぬ御さめよめ

んぞくかくこそい左のおとゞのくわざのやうにてゆうくとひきつれてありき給ふよ

ゆうト 猶子(盛衰)卅九めいぐりさりつる美女のいかよとひ給へばゆうトにて侍りたるとぞこたへける

ゆゑまゑ 維摩會(公事根源)十月十日より十六日に至るまで七ケ日の間興福寺にて維摩經を講せらる十六日ハ大職冠の御忌日なる故也云々

ゆるでん 遺言(源桐壺)十かのゆるでんをたがへトとをかりよいたいたて侍りしを(同)七藤大納言のゆるでんあやまさき宮づかへのをいふかく物たりしよろこび

の(狭)十一上昔の御遺言覺し忘れぬ(同)四故院の御遺言のまゝ(同)卅下。帝出家かゝる遺言をさりとも殊の外はたがへ給もトとひとへまたのむなりあどのたま

もせて(源若紫)三此おもひおきつるをくせたがも海入りねと常ゆるでん侍るなど(同)逢生)六まゝの遺言のさらしも聞えぬ(同)すま)八ささかりおぞいの給もせしさまの御ゆるでん

ゆるでんやぶる(源若紫)六。良清サいとすきたるものなればかの入道の遺言破りつべき心のあらんかきさてたゞをよるならんといひあへり

補 ゆのこ(枕)四ノゆのこのごとくあるとのいぎぬの袖の上云々

補 ゆの手 初丁ニとりのゆ(源をとめ)八姫君の御さまのいときびわまうつくしうてさうの御ことひき給ふを云々とりのゆのでつきいみどうつくりさるものゝこゝちをるを

ゆく 行(いせ物)八友とる人ひとりふたりして行けり(万)十三二人ゆけどゆきまぎかたき秋山をいかでか君がひとりこゆらん(同)十五「みかさ山のべゆ遊久道

こきたくもあれはけるかもひさまあらず(源若紫)九かむざしいみどうつくしねびゆかんさまゆりしき人かなどめとまり給ふ(續古)秋尹子内親王賀茂の齋

院におましましける時菊花まつけて奉らせ給ける(亭子院)「ゆきてみぬ人のためまとおももまばたれりをらまゝ庭のちら菊(此ゆきて亭子院のゆきて御覽せぬあり)

ゆく 浴具(尺素往來)四月可有例式之小風呂候御浴具各可令隨身給也

ゆくへ 行方(源若紫)十をさかかりつるゆくへの猶たかまらまろくて(万)二、卅ゆくへをいらせとねりのまぶ(源葵)卅ゆくへなとやとひとりことのやうなる

を(同)わのり)六いもんかさなく戀しきこといづ方ともかくゆくへなきことち給ひて(同)みのり)七まづわれひとりゆくへをらまかりかんを(補)記傳)廿三由玖幣ハ

行方ト云事ナリ然ルヲ行末ノ省ト心得テ由玖衛ト書ハ違ヘリ(續古)戀三後鳥羽院「袖

よおくつゆのゆくへを尋ねればあつてこよの道のさ、原このすこい意かひれり

補ゆくくとく(伊勢集)「行どくと見れどもあかぬ秋の、ゆきもやられせとまるともさ

ゆくりか(源玉葛)二いでやこいのかよ仰らるゝとゆくりかよよりきたるけそひよ

おびえて(同 總角)六十かゝる御忍ひとよより山里の御ありきもゆくりかよお

したつかりけり(同 夕霧)五いどうしろめたくさかゝれさゆくりかよあされた

ることの誠よならぬ御こゝちかれ(同 わのな)四かゝる御をからひまたよけ

不くならひたるをゆくりかよあやしくありしとさぞかゝ(注)女三宮ノ思ヒヨラ

ズ見エ玉ヒシヲナイサ、カアヤシクカロト、シト思フ心ナリ(同 夕霧)五十あよら

かよをうゝさめることをこのまゝからせおやを人のかくゆくりかあることぞうち

まどり給うける(同 東や)卅母君いとめでたく思ふやうなる御さまかかどめで、め

のとのゆくりかよ思ひよりてたびゝいひしこととあるまどきことよいひしかど

此御ありさまをみるよ(同 くてふ)廿我御心ながらゆくりかにあまつまきこと

とおやゝおらるればいとよくおやゝかへつゝ(同 少女)五またいとさびさなる不

どを我心よまかせたる世よてしかゆくりかおからんも中々めかれさることなりと

おやゝとゞめつあさぎよて殿上よかへり給ふを大宮のあかおあさましきこと、お

やゝたるぞ云々(同 あか)廿九ゆくりりよ見せ奉りておやゝりせまへざらん時いか

あるかけきをかせん(同 行幸)廿五ゆかゝう思ひ聞え給へよ今夜のいとゆくりかなる

べけれ

ゆくりなく(源 夕かは)廿三いざよふ月よゆくりなくあくがれん事を(同 藤のうたひ)

二うへつれあくて恨とけぬ御中かれゆくりなくいひよらんもいかゞとおやゝ

そゞかりて(雄畧紀)七不意(同 若紫)卅二ゆくりなうものふりさおまゝ所よかんとさ

こゆ(瀆松物)下二ゆくりなくいりおそゝまゝさるよ(源 行幸)廿八さてもたがいひ

ことをきゝてかくゆくりなく打いで給ふぞ(土佐日記)あくいひておがめつゝくる

あひさよゆくりなく風ふきいで

○ゆくりもなく(源 蓬生)卅大貳の北方よまかよ來れり云々よき車よのりてゆくり

もなくまゝりきて(大和物)六からうとて隠れたる所よゆくりもかくいまけりえか

くれあへであひにけり(同)三外よて酒など参りあひて夜いたくふけてゆくりもな

く物ゝ給へり(同)五あやゝ何ことぞといひて出たりをさる心まうけゝてゆく

りもかくかきいたきて云々 **補**(宇治拾)三のけさまよゆくりもなくふいたるよ(源
夕きり)九いとひとりたちをくくしき律師までゆくりもなくそよやこの大將のい
つよりこゝまのまるりかよひ給ふぞと

補ゆくりある(水鏡)皇極天皇 其子の父ことゆくりありて丹後國へゆきてやど
れる家よ

補ゆくか(行川)万七 「ゆくかその過よ一人の手折ねばうらぶれたてり三和の
檜原の

ゆくかた(源末つむ)七 これもゆくりたあれと跡よつきてうらむひけり(式子内親
王集)「うつりよる過ぬるをらよ雲消ていりよながむる春のゆくりた

ゆくかたもなく(源稚の本)廿六行かたもなくいおせうお平え侍り(湖)心ノ行方モナ
クアヤシク心モトナキトナリ

補ゆくらか(万)十二 「いさりをるあまのかちのとゆくらかよ妹がこゝろよのり
よけるかも

ゆくら(万)十三 「大船のゆくらくくし思ひつゝ吾ぬるよらひよみもあへぬ
かも **補**(万)十七、長哥 大船のゆくらくくし思ひつゝかもこむと

ゆくて(壬二)上 「をるくとと萩のやけをらかきわけて道のゆくてよらびをぞを
る(源わゝ紫)廿六ゆくての御事なほざりよも思ひ給へなされしをふりもへさせ給
へるよ聞えさせんかたかくかん(拾愚)下 一名取川ゆくての浪よあらはれてあさく

ぞみえんせむの理木(千載)冬 一家 「冬くればゆくてよ人にくまねさもこほりぞむす
ぶ山の井の水(風雅)夏 後伏見院 「小山田やさかへの末よ風みえてゆくてをばし杉

の下道(同)順徳院 「みかど川かつのゆくていあらねさもあがれてそやき瀬々のゆ
ふいで(同)冬 公蔭 「神無月くものゆくてのむら時雨それもくもりも風のまよく

ゆくさくさ(万)三 一白菅の眞野の榛原往左來左君こを見らめまぬの榛原(同)九ノ
「わどつみのいづれの神をいそゝばか往方毛來方毛舟のそやけん **補**(万)廿六、あを

うなをら風なみをひきゆくさくさつゝむことなく船のそやけん
ゆくさ(源)桐壺 廿三 ゆくさきもたのもいけなることゝおせよさためて(同)帝木 十
八

行さきながく見えんと思そむ云々(伊勢物)六 ゆくさきおほく夜もふけよければ○
道とは(源)帝木 四十 かのこのも一人の行さきみとりかりあんと給へば(同)浮舟

卅行末ながく人このみぬべき心をへあとこよなくまさり給へり
ゆくさ(万代)雜三、從三 一とねりこが袖も露けしとをかのあけささふの

ゆくさきさるさよ

を拾穂本

ゆくく (拾) 別贈太「君がそむ宿のこぎゑのゆくく」とかくる、まてよかへり

いばや (源 柳) 五十 おとゞの思ひのまゝこめたる所おいせぬ本性いどゞ老の御

ひがみさへそひよたれば何ぞとよかんとゞこほり給さんゆくく」と宮よもうれへ

聞え給ふ (万) 十八 「よふの川せいのさらせでゆくく」とこひさき我せいをかよ

ひこね (土佐日記) 廿八日云々山口の千岑酒よきものさももてきて船よいれたりゆ

くくくのみくふ (補) (俊頼集) 「川の瀬のおちまふ水のゆくく」とおもふ心を人よ

そゞや

ゆくく (大鏡) かうやうのうたや詩などをさへいとなたらかよゆくくくく

いひつゞけ給ふと見きく人もめもあやまあたましく哀れよまもりるさり〇一説

セツクロシクナキコニイヘリト或人イヘリゆくくくくトモイヘリ

ゆくみづ 行水 (源 玉萬) 廿まへよりゆく水を初瀬川といふかりけり (伊勢物) 五十

「行水とそぐるよとひとちる花といづれまててふことをきくらん

ゆくすがら (夫) 卅六 永久四 「ゆくすがら心もゆか別路のなぶふる里のことぞか

なすき

ゆくすゑ (源 夕のほ) 廿「さきの世のちぎりいらる、身のうさよゆくをゑかねてた

のみがささよ (同) みのり) 九おのくの御ゆく末をゆかしく思ひ聞えけるこそ (同

あかり) 卅行末みどかけなる親をかりをたのもさきものよて

行末とすき人 (若キ人) (伊勢集) (拾) 賀「さるくと雲井をさしてゆく舟のゆく末と

ほくおもゆるるかか

ゆや (湯屋) (宇治拾) 十三 湯屋よの湯をかさぬ日かく (蜻蛉日記) 中 申の終をかりよ寺

の中よつきぬゆや物などささりければいきてふいぬ云々さて後夜行ひつれをお

りぬ身よとければゆやあり (補) (赤染集) ある寺のゆやの前よ志をといふものをお

ほくおきさる中よ

補 ゆやせ (榮 楚王の夢) 十九 ちとどものゆやせなといふものしてひさるゆやをさるもの

ぞか

補 ゆまのり (中臣壽詞) 持齋 波利 參來 豆 (大殿祭) 持齋 麻波利 持淨 麻波利

ゆまさ (平家物) 十 染つけのゆまさして〇今の浴衣とみゆ (禁秘抄) 上 十 凡禁中着湯

卷上藤一人典侍一人也 (空穂 梅の花笠) 廿七 七、ゆどの、とところをけのおとゞす

せいのうちさゆまさしてゆどのよまるる

ゆけさ(源空蟬)五いよのゆけたもたどくーかるまどうみゆ(同夕顔)十國の物がたり申すゆけたいいくつといそまほしくおせせど

ゆけひ(源海標)廿かの加茂のみづかきうたひー右近のせうもゆけひまかりてこととーけなる隨身ぐしたる藏人なり

ゆふ(木綿)古語拾遺)令天日鷲神以津昨見神穀木種殖之以作白和幣(注)是木綿也(和名)三(祭祀具部)木棉(和名)折之(白絲者也)穀の楮よて今紙よ作る物也陸璣詩疏

荆楊交廣謂之穀中州人謂之楮とあるよてあるべー穀の皮をとりてゆふと名づけゝるなり(源柳)九かけまくもかーこきおまへよとてゆふよつけて(後拾)戀三「柳葉

やゆふーでかけーそのかみよおーかへーてもおたるころかな(拾)雜秋よみ「千早振神のいがきよ雪ふりて空よりかゝるゆふよぞありける

ゆふ(結)源も顔)五「なくくもけふの我ゆふ忘たひもをいづれの世よりとけて見るべき(同若紫)六「まくらゆふこよひさかりの露けさをみ山のこけまくらべざ

らなん(同幻)廿人の御ふとさも云々かの御手なることよゆひあせせてぞありける(古)戀一よみ「おもふともこふともあそんものかれやゆふ手もさゆくとくるおたひも(神代紀)上三結束青草(万)十四「つくーあるよふこ故よみちのくのかと

りをとめのゆひーひもとく(万)十五「ひとりのときぬるころものひもとかべされおもゆそむいへとなくして(同)六廿「うるそーとおもひーおもそむさひもよゆ

ひつけもちてやませーぬさせ(同)九ノ一重結帯を三重結(續古)夏家隆一ととめこがゆふかみやまのたまかづらけふのあふひをかけやそふらん(新續古)誹あひーれり

ける女のをとこよかきさられよりと聞てつかさーける(大藏卿)「ちとやふるかこもかーとけいふふるをゆふさかりたよのころをや君(胤村)

ゆふ花(万)六「山高ま白木綿花落たぎつ瀧の河内へ見れどあかぬかも(同)一「とつせめのつくるゆふ花みよーの瀧のみなわよさよけらせや

ゆふさえ(源夕は)廿さーのすざれをあけてそひふー給へり夕さえをみかそーて(うつろ)初秋)五ノ仲忠ゆふさえしてそらの人よもすぐれてめささかさちのま

よらなるよりもさーあゆとたるさま(源幻)「あかの花の夕さえていとおもーろくそゆれば(玉葉)春下「さかりある峯のさくららのひとつ色よ霞もーろき花の夕

さえ(同)春下「雲ようつる日影のいろもくかりぬ花の光のゆふさえの空(散木)「さくら花おのがもろさのゆふさえよ心をさへもちらーつるかな(禮)ゆふよ(万)廿七「朝廷よ出たちならーゆふよのまふみとひらけせ

ゆふとゞろき(堀百)旅戀一とひくる戀の奴の旅よても身のくせなれやゆふとゞろき(新六)一夕「かへるさの家路よいとく市よ出てゆふとゞろきの民の聲か(万)八冊入「ゆふ月夜こゝろもまぬま白露のおく此庭よきりふすなくも

補ゆふがほのやと(玉葉)雜三寂遣「籠のうちもあほうらやま山がらの身のほそかくす夕が布の宿

ゆふかた夕方(源わかき)上五夕かたかのたいよとべる人の補(濱松)三下夕かたよかりてその人の御ふみいといのびてある

補ゆふかづら(新古)神祇定家「契ありてけふみや川のゆふかづらながき世までもかたてたのまん

ゆふかけ(源蜻蛉)五十ひんがしの勾欄よおしかりて夕かたよなるまよ花の紐とくお前の草むらを見わたし給ふ(同紅葉賀)四一と日の源氏の御ゆふかけゆい

うおぞされて(古)秋上素性「我のみや哀とおもそん蜚おくゆふかけのやまとあてて補(万)十九四十八「春野に霞たおびさうらがかりこのゆふかけに鶯おくも

補ゆふかけくさ(万代)雜三後鳥羽院俊光「山里のゆふかけ草の下露を袖よかけつとふひとぞあき

補ゆふかけやま(新後拾)夏俊光女「雨さるゆふかけ山よかく蟬のこゑよりおつる木々の志た露

ゆふかけて(源藤裏葉)三ゆふかけてまな歸り給ふよと花の皆ちりまたれかきみたどくしきま(詞花)秋祿子内親王「神垣よかゝるとあらば朝顔もゆふかくる迄よそざらめや

補ゆふかき本綿髪馬ノ毛(躬恒集)馬の毛をよみたる「戀すればやせこそをらめものこのゆふかき白くおもゆるかな信友云此歌聞えぬ所あり誤字あるべし一ありいづれまても聞えおたけれ枕草紙に馬のむらさきのまたらつきたる云々うそと馬の毛名の証といすべき也

こうさいの毛よてかみ尾をど白きけまゆふかきともいひつべきかど見え八雲御抄まゆゆふかきどの馬のかみしろきかりと記し給へり髪の白きが木綿よ似たるよかり字鏡集にハ駢をユフカミと訓り已上信友説猶源順馬毛名歌合よくそ

補ゆふがすま(玉二)中「かりがねのきえゆくみねのゆふがまかたともあらきふくあらしかあ

ゆふたち夕立(新古)旅紫式部水うその船よて夕立の志ぬべきよし申けるをきよてよととべりける「かさくもりゆふたつ浪のあらければうきたる舟ぞあづこゝろあき

五十八

(夫)九 俊家 「ほどゝぎす聲を月とおもへそやゆふどつ雲にをちかへりかく
給へゆふたちの神(曾我物語)梶原源「きのふこそあさまいふらめけふはまたみそら
給へゆふたちのかみ

ゆふたちの雨(夫)九 清輔 「おのづからをぐくもあるり夏衣日もゆふたちの雨れあ
こりよ(六帖)三(万)十六 十五 「暮立の雨うちふればかきかのゝを花がすゑのゝら露お
もほゆ

ゆふたをき(古)戀一よみ 八しらす 「千早振かものやいろのゆふたをき一日も君をかけぬ日
のな(大神宮儀式帳)木綿多須岐懸豆(新古)神祇「こがたのむ七の社のゆふど
をきかけても六の道よかへをな(拾)神樂「ねぎかくるひえのやいろのゆふどすき
草のかきをもことやめてきけ 實因

ゆふつかた(源)末摘 七 此ゆふつかた内よりもまかで給ける
ゆふづ(堀次)星 忠房 「夕づゝのあとてまたきよ入ぬらんねよてふ鐘の音もせかく
よ(万)廿六 「ゆふづゝも通ふ天路をいつまでもあふぎで待む月人男(万代) 雜二
忠岑

「日くるれば山のよるるゆふづゝののゝと見れどるけきやあぞ
ゆふづくよ 夕月夜(古)秋下 買之 「ゆふづく夜をぐらの山よかく鹿のこゑのうちよ秋

はくるらん(源)桐つは 十 ゆけひの命婦といふをつかをも夕づくよのをかききすと
よ出たてさせ給うてやがてながめおそします(万)七 「たまたれのをすのまどほ
し獨るてみるゑるしあみゆふ月夜か(源)藤裏葉 八 七日の夕月夜かけののかなる
よ

ゆふづくひ(古)戀一よみ 八しらす 「夕づくひさをや岡べの松のものいつともこかぬ戀もを
るかあ

ゆふつけ(信明集)卅 三 「あかつきよかくゆふつけのこか聲よおとらぬ音をぞ鳴てか
へり

ゆふつけ鳥(古)戀四 閑院 「逢坂のゆふつけ鳥よあらばこそ君がゆきゝをかくくもこ
め(大利物)五 「たがとそきゆふつけ鳥よから衣たつたの山よをりもへてなく(古)

戀一よみ 八しらす 「あふ坂の夕つけどりもわがごとく人や戀しきねのこかくらん(袖中抄)
廿 世の中さこがしき時四境祭とておそやけのせさせ給ふよ絹よ木綿をつけて四方

の關よいさりてまつるなり(後) 雜二 やまひ侍りて近江の關寺よこもり侍りけるよ
まへの道より閑院のこ石山よまうでけるをたぐ今なんゆき過ぬると人のつけ侍
りたればおひてつかひける とい行の朝臣 「あふ坂のゆふつけよなく鳥の音をさ

さどがめぞめき過よける補(續古)戀三景綱「こひく〜てまれよとけぬる下紐をゆふつけ鳥の音こそつらけれ(同)基隆「曉のゆふつけ鳥のおなとねよいくたびつらきわかれ〜つらん(新後)戀三よみ人しらす「わかるればおなと心よう〜とのとゆふつけ鳥のねをぞうちむる(狹)下「あまのとをやきらひよこを出〜かどゆふつけ鳥よとをさこたへよ(元真集)「ゆふつけの鳥の一聲あけぬればあかぬわかれよわれぞなきぬる(同)二「ゆふつけの鳥よつけても忘れどをかな〜なをやの君ののこさぬ(後)戀五よみ人しらす「關守のあらさまるてふあふ坂のゆふつけ鳥のなきつ〜ぞ行(万代)戀三よみ人しらす「下ひもをゆふつけさりのこゑたて〜けさのこかれよわれぞなきぬる(同)盛「あふさかの關こえてこそ中々よゆふつけ鳥の音いなかれけり(玉葉)雜二「うさひとが老のねざめとおもへさゆふつけどりもあかつきぞかく(新勅)戀三「あかつきよ〜おのぬゆふつけ鳥のなきそめてあくるわかれの聲もうらめ〜(新古)雜下式子「曉のゆふつけ鳥ぞあそれなるながきぬふりを思ふ枕よ(新勅)戀三中「あかつきのゆふつけどりもあつゆのおきてかな〜きため〜よぞなく(同)戀三法「あふさかのゆふつけ鳥もわかれぢをうきものとしてや鳴もとめけん印幸清

ゆふつけて(源若ひらさき)四十さるべき人々ゆふつけてこそひむかへさせ給ため

との給ひてたいよわらへべめ〜よつかもを(同)竹川九夕つけて四位の侍従参り給へり(同)四左の大殿の宰相中將大饗の又の日ゆふつれてこ〜よ参り給へり(同)常夏五ゆふつけゆく風いとす〜く(同)ととめ廿其日のゆふつけてまゐらせよ

ゆふね湯船(宇治拾)十五湯おねをうつお〜よなしてその下よふせ奉りて上よ布をお布くおきて補(同)三僧正のさたまりたることよて湯おねよ藁をこま〜とときりて云々ゆふねよさくとのけさまよふをことをぞ給ひける云々其ゆふねよ云々ゆふねへをとり入て

ゆふながめ(玉葉)戀二雲とづるやその軒端のゆふながめこひよりあまる雨のおとかり

補ゆふちみちどり(万)三「あふみのみ夕をみちどりがかけば心も〜ぬよいよ〜へおもほゆ(新後)冬公實「〜がの浦の松ふくかせのさび〜さよゆふをみちどりたちるなくかり(風雅)冬輔「近江路や野島が崎の濱風よ夕波ちどり立さこ〜かりゆふるる(千載)夏仁和寺「〜と〜ぎすか初聲を〜のお山ゆふるる雲のそらよかくなり

ゆぶくろ 弓囊 (平家物) 三 かつゆぶくろの料よとて白布五十九んおくられたり

ゆふくれある (堀次) 兼昌 「入日さすをちの岡邊の岡つゝゆふくれなるのいろぞまぎれる (新千) 誹諧 小侍従 「一のびこゝ夕紅のまゝからでくやゝいつのあくまあ

ひけん (金葉) 春 三河 「入日さすゆふくれあるの色そえてやまゝたてらすいそつゝトかあ

ゆふぐれの雨 (玉葉) 春下 基良 「ぬれてをる藤のゝたかけ露ちりて春やいくかのゆふぐれの雨

ゆふやま (玉葉) 夏 入道前 太政大臣 「秋ちかき谷の松風おとたて、ゆふ山をゞ岩の下水 (同) 同 爲子 「風のおとよすゞーき聲をあそそなりゆふやま陰の谷のゝた水 (同) 冬 爲兼

「さゆる日の時雨のゝちのゆふ山ようす雪ふりて雲ぞれ行 (同) 雜一 一ちる花を をのへの鐘よかへりてゆふ山いづる春の里人 (風雅) 旅 爲子 「こえなやまゝが行とまる夕山のをのへを月い今ぞ出なる

ゆふやま (源 空蟬) 三 ゆふやまのみちたどゞーけあるまぎれよ (六帖) 一 (万) 四、五

「ゆふやまの道たどゞー月まちてかへれ (同) 爲子 がせこそまよもみん (源 笠) 四 夕やみ過ておやつかなき空のけしきのくもらゝきよ

ゆふまよひ (源 末摘) 六 めのとたつ老人おとせうゝふして夕まどひゝたるほどあり 〇此詞宵まよひともいへり

ゆふまよひ (夫) 卅六 旅 後 京極攝政 「ふみなれぬ山のいそねのゆふまよひおとやあるべの谷川の水

ゆふまぐれ (源 少女) 卅四 夕まぐれのひとのまよひは對面せさせ給へり (新古) 戀 四 後 惠法師

「我戀の今どかぎりどゆふまぐれ 萩ふく風のおどづれてゆく (新) ゆふまゝ (散木) 蛙 「をぐろさきぬたのねぬなまふゝたき日もゆふまゝよかそづあくかり

ゆふけ (万) 四、五 「月夜よの門は出たち夕占問あうらをぞせしゆかまくをほり (同) 十一、

「ゆふけよもうらあものれるこよひたよきまさぬ君をいつとかまたん (補) (夫) 十九 後 一條 入道 關白 「千代までも民のけふりやさえざらん鳥羽田のおもの朝けゆふけよ

(新拾) 戀 三 揚子 内親王 「さりともと夕けのうらのこよひさへあそぎれたのむかひやあからん (万) 十四 ゆふけよもこよひとのらろ (新後) 戀 三 法 印 定 爲 「こよひたよいかよゆふ

けのうらぞとよまゝ定てや人をまたまゝ (万) 卅一 門よさちゆふけとひつゝ (後拾) 二 男のこむといひもべりけるを待とづらひてゆふれととせけるよ 云々

ゆふけ(夫)十九後一條 千代までも民のけふりやたえさらん鳥羽田のおもの朝け
ゆふけよ

ゆふけとふ(拾)戀(人丸集)(万)十一「まさしてふやそのちまたよゆふけとふうら
まさよせよ妹よあふべく(補)(新葉)戀三「ゆふけとふつけのをぐもひくかたよお
もひあされてまつぞをかあき

補ゆふこり(夫)十七水「松かけの岩のたむれの夕氷たまをかたたるぬさかどぞ
とる

ゆふこり(堀百)霜「ゆふこりのたれ霜ふる冬のよ鴨の上毛もいかよさゆら
ん〇夕コリハユフベニコリカタマル霜也〇ハダレハマダラナリ

ゆふこえ(千載)夏清輔「かざこえをゆふこえくれバとゝぎふふもとの雲のそこよ
なくかり

補ゆふこえ(拾玉)四「旅衣つまとふ鹿のゆふこえよ袖しられぬるくさまくらかあ
ゆふさり(古)離かんかりのつづよ云々ゆふさりまかり侍りて云々(榮さるのわひ)

二廿一日のゆふさり京極殿のひんかしのどいよおひーまーて(古)羈旅たぢまの國
のゆへまかりける時よふたみの浦といふ所よとまりてゆふさりのかれいひたうべ

けるよ云々(いせ物)六十あーたよの狩よ出たて、やりゆふさりの歸りつ、(堀
次)顯仲「常よりも身よもいむかあ夕さりの君よあふぎのかせのけしき(補)伊

勢物)六十ゆふさりのこよよこさせけり(後拾)戀二夕さりこんといひておとせざり
けれバ(枕)四四日の夕さりさふらひどもやりて

ゆふさりのつ方(古)離人の花山よまうできて夕さりつかたかへりなんとしける時よ
よめる(補)うつろ(國讓)中六其日ゆふさりのつかた

ゆふされ(蜻蛉日記)四一ゆふされの閨のつまどいあがむればつづからのとぞくも
もかきぬる(堀太)山家「霧こめて露のみいけきやま里の袖をぬらさぬ夕されぞな

き(補)夕さののさの皆誤り(拾玉)一「ゆふされや立いで、をむかひぞなきか
冬されのところみるべし

やり火くゆる賤がかさねの(同)同「よさの浦千鳥をかく夕されバをり哀なる松
の風哉(大藏卿行宗卿集)「さらぬたよかへる空をき夕されよむをびとむる神垣

の藤(輔親集)一身の程を思ひつゞくる夕されの萩のうもよ風をよぐかり(蜻蛉
日記)四「さまたれやこぐらき宿の夕されバおもてる迄もてらるる(山家)

下「夕されやひさらの嶺をこえゆけばをこきこゆる山さとの聲(同)上「夕され
や玉うごく露の小篠生よこあまづならはきりよ、まか(同)同「うちすぐる人を

き道のゆふされば聲たておくるくつとむかかな

補ゆふされば(六帖)一上「君よのよあままくるの夕されば空よちぬる我こゝろかな(六帖)二」夕されば君をまつちの山ざりのかくくぬるを立もさかかん(古)

冬よみ人「ゆふされば衣手をましみよのよよの山よみゆきふるら(同)」一

しらす「夕さればいとびがたさわが袖よ秋のつゆさへおきをむりつ(古事記)

中「うねび山ひるの雲とる由布佐禮婆風ふかんとぞこのよさやける

補ゆふさなへ(拾玉)七「うゑもつるふよこの小田の夕早苗いつかおびくあきの

初風(同)「さまたれのをこゝれまのゆふさかへとるもかひある賤が小山田

補ゆふく(宇治拾)十三人もまぬうきのゆふくといたる一町をかりかるうさあり云々

補ゆふくを(壬二)中「都人まつはいほりの藤の花雨さへふりてゆふくをれつ、

ゆふく(堀太)金葉冬「神垣の三室の山よ霜ふればゆふくでかけぬ榊葉をな

き(好忠集)春十「新勅」春一卷向のあかしのひをら春たてば花けゆきりとみゆるゆ

ふくで

補ゆふくも(壬二)中「月さえてゆふくもこるさよのよあられふるかりさら

なのやま

補ゆふひがくれ(新拾)維上「まつ風のゆふひがくれふくるとの夏すぎよけるそ

らくとぞみる(同)同「軒あかさ山よ萩のこゑたて夕日がくれ秋風ぞふく

補ゆふひのやま(玉葉)秋下「むらくは梢の色もうつろひて夕日の山よ雲ぞあぐ

る、

補ゆで(宇治拾)六ノ湯の所よ右のかひなをうちをりさればそれをゆでんとてき

ころあり(榮鶴)林九侍従大納言のおお日よりあやう例ならぬ風よやとて朴

を参りゆでをどして心み給ひけれとくるうのとおおされければ(狹)三四雪や

けよ足もそれでおやまうおをさるればゆでつくろひをどしてあるきをど給

せ(とりかへせや)「みたれかこころおこりたち侍りぬる時をたうをさかどもせら

れぬくせよゆでなど侍るとてこもり侍る(催馬樂)大芹大芹の國のささも

のこせりこそゆで、もうま(宇治拾)一五栗をやきまたゆでなどして(宇

鏡)煤澱同土治徒躰二反以菜入涌湯曰煤煮也奈山豆

補ゆでくり(宇治拾)十五やさぐりゆでくりの形もかそらせ

ゆでさせ給ふ(榮月)の宴八御かせおといひておらんゆでをどしてくまりきこ

めして(同)もとの申)一寛仁三年四月をかり堀川の女御あけくれなみたよ一づみて
おとしませばまやおとしけん御こゝちもうきあとかたもおぼされて例をらぬさま
よてありすぐさせ給ふ不どよいとをやまうおぼされければ御風よやとてめでさ
せ給ひてのぞらせ給ふまゝ御口鼻より血あえてさえいり給ひぬおとゞ御聲をさ
さけてあきのゝり給へとあまのかひかあらん(同)玉の村菊)十かゝる不どよいか
ぐーけん大將殿日比御心ちをやまうおぼさる御風をどよやとて御ゆゝでさせ給
ふ(同)後悔大將)二いとたひらかまて男君生れ給ひぬ御心ちをとも中々例よりい
とさそやかゝ御ゆゝであとせさせ給へば誰も今ぞ心のどかゝおぼし見奉らせ給ふ
云々年もくれまけりついたちなどの事ともおぼそことおけある殿の御ありさも
おかりければ云々とふの七日よて御ゆのあるべければまたよさりの御ゆとのゝこ
とゞもさまゝのゝゝする不どよ(續詞花)上大齋院御足をやませ給ふを杉のゆよて
めでさせ給ふべきよし申ければ云々

ゆあみ(新後撰)旅さちまのゆあみまかりける道よて云々(土佐日記)男女これか
れゆあみなどせんとしてあたりのよろしき所よおりてゆく(枕)七ノきたおけある物
あつきほどよ久しくゆあみせぬ(古)離別源のさねがつくへゆあみんとてまか

りける時よ云々(補)公任卿集)「杣山おおろを筏もあるものをゆのみやあむと人の
いふらん(空穂)藏開)上、一かくて女御の君かさいとさてさしいで給へれば云々いま
の御ゆあむいたてまつる云々御むかへゆまゐり給ふ

補ゆさく(宇治拾)八、此倉すゝろよゆさくどゆるぐ

ゆき(夫)四三島社奉納公朝「川むらひゆきとる山のこの櫻たをりてもこん我よふねかせ

ゆき(鞆)つれく(二百勅勘の所)鞆かくる作法今のたえておれる人を

雪もづか(源)末摘)廿雪もづかう白うてさをよ(蜻蛉日記)中、あなさむ雪もづ

か(き)霜かな

ゆきとまれ(源)蓬生)十と一頃とびつゝもゆきとまれざりける人の(同)初浮世を

ゆきとまれ(古)雑下よみ)「世中のいづれうさしてわがからんゆきとまるをぞやど

とさたむる

補ゆきとま(拾玉)一「雪とけの雫のおとのとえぬるのよそのあらしよたるひーぬ

らん

ゆきとふらふ(伊勢物)四 心ざいふかゝりける人ゆきとふらひけるを

ゆきちる(源七)十 かゝる人々もえいもありてやゆきちらん(同 總角)五十京

よさるべき所々行ちりたる娘ども 云々 尋ねよせて参らせたり

ゆきちがふ(源 竹川)四十 ゆきちがふ車のおとさきおふこゑも(同 浮ふね)三十

柴つみ舟のところよゆきちがひたるを

雪を豊年の兆とせ(万)十九 「あたらしきとりのとめは豊のとゝあるをとから

ゆきのふれゝ

ゆきどれ(新古)雑上 後成 「柚やまや木をぬる雪をれまたえぬかけきの身をくた

くらん

雪をめぐらす(長明百首)「さもこそ雪をめぐらすけふからめおもかゆみゆるう

そもの、袖(文選)以酒風廻雪頃美人之飄搖(夫)十八 「世よあまる人のなけきの

なみたこそ雪をめぐらす袖ぬるらめ(同)同 「世よふれ袖こそぬるれ天のいた

雪をめぐらす人をみるよも(同)同 「雪のうちよ雲の上人たちまひてめぐらす庭の

袖ぞゆかき(同)同 季經 「こよひこそ雲をさるかのざるなれ雪をめぐらすあまつ

をとめ(同)同 爲家 「ひれふりあまつをとめのなごりとして雪をめぐらす雲の上人

ゆきとかれ(玉葉)三 遠き所は行わかれける人よつかさける(源 末摘)九おのお

の契れる方よあまえてえゆきわかれ給せ

ゆきかへり(源 早藤)十 けよおせせまうりやおやつかならゆきかへりかたみ

花の色鳥の聲をも折よつけつゝすこゝ心ゆきてそごつべかりける世をなとお

し出るよつけて

ゆきかへる(伊勢物)九十一 「あべこごたかゝり小舟いくそさびゆきかへるらん

る人もな

ゆきかゝる(源 末摘)四十 ゆきかゝりてむなくかへらんうしろでもをこさるべ

ゆきかゞづらふ(同 寄生)五十 こゝよもかゝこよも行かゞづらひて

ゆきかよふ(源 末摘)三 是の父君のものを里よて行かよふ(古)二 「戀をびて打ぬ

るなりよ行かよふ夢のたゝちうつゝからかん

ゆきかた 行方(拾)雑戀 貫之 「玉藻かるあまのゆきかたさす棹のがくや人をうらみ

たらん

ゆきかくれ(後) 尊上よみ 八しらす 「人心うさこそまされ春たてばとまらせきゆるゆきかく

れかん(拾)戀 五(新古) 八しらす 「いつかたよゆきかくれかん世中よ身のあればこそ

人もつらけれ(續古)哀傷、儀一誰もみな消のこるべき身ならねどゆきかくれぬる君
ぞかなしき補(玉葉)戀一「うちたのむ君がこゝろのつらからば野も山もゆき
かくれなん

ゆきかふ契云コキカフハ行代ルナリ(源 早蕨)初行かふ時々よゑたがひ花鳥のいろをも音をも
(同 橋姫)七おのゝ何とあき世のいとあみともよ行かふさまどもの(古)夏 躬恒一夏

と秋とゆきかふ空のかよひぢのかたへをさき風やふくらん(同)序たどひ時うつ
りことさりたのいひかかひゆきかふとも云々(土佐日記)「ちろたへの波路をと
ほくゆきかひてわれよよべきたれからなく(源 桐つは)八 御使のゆきかふ程も

なきよなりいふせさをかぎりかくのさまりせつるを(同)百敷よゆきかひ侍らん事
いましていとさびり多くなん契 陳鴻長恨哥傳云時移事去樂盡悲來補(忠見集)

「かよもかた行かふ舟のつあてあそくること見えねあゝのまをかこ
ゆきよ雪夜(夫)十八「高砂の松のねくらやをれぬらん雪夜の鶴のうらみなくあり

補ゆきつく(宇治拾)七けふのうちよゆきつきていへとてもなてり
雪のうもぶき(夫)十八「さびりさのかさねてけりな津の國のあゝのまろやの雪の

うもぶき(同)家隆「まをらをがまよふのこやのむねよわみいくへよなりぬゆきの
うもぶき補(拾玉)五「さえゆくををしむ宿たゝあるものををらひてけりか雪のう

もぶき
補雪のうもれ木(夫)十八「春あらぬたぐひをとへさとかさ山このでろふかき雪の

うもれ木(同)隆信「さる秋の花もみぢもをりすぎてもていさながら雪のうもれ
木(同)同 洞院「ふりうつむ遠山もとの谷ふかみ見えてすくなき雪のうもれ木(同)

同 後京「山ざとの雲のこまよかめつる松さへけさ雪のうもれ木
極 攝政

ゆきのやま(源 朝顔)廿ひとせ中宮のおまへ雪の山つくられたり世よふりた
る事なれど補(公任卿集)二月よ雪のいと高う降たるゆきよりがさう一の前よ雪の

山をいとたかうつくりて煙をたてたるよゆきのいたうふればからかさをおひてた
てされば「東路のふとのたかねああらねども三笠の山もけふりたちけり(枕)廿四

「こゝよのみめづらしとさる雪の山とこころとよふりよけるかな(新後)上「雪の
山つくられて侍ける雪を云々(空穂 樓の上)上雪山つくらせ給ひて

雪のまくら(夫)十八「山里の松のとやをもうつろひて月ぞさゝいる雪のまくらよ
家隆
補ゆきのみやま(千載)夏 俊頼(月詣)「かどてかく思ひをめけん時鳥ゆきのと山のの
りのこゑかひ〇濱臣云雪山童子の故事阿舍經涅槃經等よ見ゆ

雪のまゝ水

春上

一みむろ山谷は春の立ぬらん雪のまゝみづ岩たゝく

あり(同)

顯綱

一春さては雪のまゝ水うちとけて谷の鶯今ぞかくさる

雪ぐれのそら(夫)

十八 家隆

一やどからん行へもいらせ久かたのあまのがそらのゆきぐ

れの空(同)

俊成

一おぞつかなたがへる鷹もいかならんかりさのをの雪ぐれの空

行くらそ(土佐日記)

海のあるれどころいそこいそぎぬかくゆきくらしてとまり

よいたりて

ゆきぐも

雪雲

(夫) 十八 後一 條入道

一それくもりふりもつゝかぬ雪雲のあふささるさよ月

ぞさえたる

ゆきやま

(齊宮女御集)

まをそのつこもりそこのふたよゆきやまをつくりて

枕

廿四

けふの雪山つくらせ給そぬ所をんかき(同) 四ゆきやまのつれかくてと

もかへりぬ

ゆきやけ

(狭)

三 上

雪やけは足もされてなやまうおぞさるればゆでつくろひなど

してあるさなとも給そぞ〇今霜やけとのと云

ゆきま

雪問 (源 濁雲) 六

一雪まをきよの山をさづねても心のかよふあとたえめ

やと

雪まろを

(源 朝かほ)

廿二らひおろして雪まろをせさせ給ふ云々いとおほろ

まろばさんとふくつれがれと(狭) 廿四下五六人雪まろをせせるを見るると云々おほ

づくの富士の山よこそ作らめなをいへを越の白山よこそあめれといふかり

ゆきまどりたる

(源 玉葛) 廿六

高き宮づかへ給ふ人のおのづからゆきまどりたるた

より物し給ふらん父大臣聞しめされかまへられ給ふべきたをかりおぞかまへ

よといふ(同)

推の本 廿七

たゞ山里のやうよいとづかある所の人もゆきまどりたる所

は侍るを

ゆきまどる

(狭)

四 五 父君

心さらばいかかる野山よりゆきまどり給ひぬらんとおぞ

はやるよ

ゆきけ

(万) 三ノ 卅八

一つくをねをよそのとみつゝありかねて雪消の道をなづとけるか

ゆ(古)

冬よみ人 卅八

この川は紅葉あがるおく山の雪けの水をいまさるら〇こ

れら雪解かり(後)

戀二 清正母

「ふりとけぬ君がゆきけのづくゆえたもとよとけぬ氷

しよけり(後拾)

冬 長家

「とやがへるおらふのたかのこるをのみゆきけの空はあはせ

つるかな(風雅)

冬 伏見 院御哥

「梢よ夕あら吹てさむき日のゆきけのそら雁なきと

さる〇これら雪ふりぬべき空のさまをいふ(頼政集) 上廿九 一またれつる雪けか

どこをおもひつれいまたまぐれの雲よぞありける(詞花)冬房 「山ふかみやくすみ

がまのけふりこそやがて雪けの雲となりけれ(契冲云二)のやうあり雪フリヌベキ

ケシキナルナイフハ雪氣ナリ古今雪けの水を今増るらトイヘルハ雪解也キユネ

反ケナル故ニ雪けトイフ(堀太)鷹狩 肥後 「雪ふりよーらふのたかをあそせてハ鈴の音こそしるべな

りけれ(源) 「雪ふりよーらふのたかをあそせてハ鈴の音こそしるべな

ゆきあそび(源 浮舟) 廿七 わらそべの雪あそびしたるはそひのやうよぞふるひあがり

ける(源) 「雪ふりよーらふのたかをあそせてハ鈴の音こそしるべな

ゆきあふ(源 さりき) 卅九 「わかれよーけふんくれさもあき人に行あふそとをいつと

たのまん(同 關屋) 四 「こくらハよゆきあふ道をたのみしもあほかひあそやそな

らぬうと(瀆松物) 卅八 今一たびゆきあひ奉るそくせのあかりん(同) 卅三 それよ

り後ひまいとありがたくて云々ゆきあふこといとかた(同) 卅三 後生いのらんと

おもひ給ふころのひとつよゆきあひて(同) 卅三 後生いのらんと

ゆきあひ(續後拾) 秋上 基隆 「彦星のつまハ秋もめぐりきてゆきあひのこせハそよ出

まけり(万) 卅六 (人丸集) 下 (新拾) 上 雑 「わぎもこがゆきあひのいねのかる時よなり

はける(万) 卅六 (新) 「わぎもこがゆきあひのいねのかる時よなり

補 ゆきあひのそへ(万代) 夏 仲實 「いそけ田子ゆき合のそへもふいたつハ麻須香井

衣まふつくと(新勅) 戀一 清輔 「おのづから行あひのわせをかりそめ見人ゆゑ

やいねがてよせん(夫) 八 後九條 内大臣 「さみたれも久くかりぬ住よーの行あひの雲のひま

やなからん(霜) 伊勢集 卅一 (六帖) 下 「ふけーよのゆき合の霜ようてーりぞあそ

身よさむくあたらざりけん(源) ゆきハ 源 八 御めとまり給ひけり(万代) 冬 順 「朝氷とけよけらー

か水のおもよどるよどりのゆきハさくかり(詞花) 秋 好忠 「山里ハゆきハのみちも

見えぬまで秋のこのまようづもれよけり(源) 卅九 雪ぎえよつとて侍るありとて澤の芹みねのさらびなど奉り

たり(補) 齋宮女御集 「ふりかへん人ハとふべき雪ぎえのとくるよよりもとゞこ

りけり(雪) 行(古) 雑下 八 下 「世中のうけくよあきぬおく山の木のそよふれるゆ

ゆきハ 雪。行(古) 雑下 八 下 「世中のうけくよあきぬおく山の木のそよふれるゆ

りけり(雪) 行(古) 雑下 八 下 「世中のうけくよあきぬおく山の木のそよふれるゆ

きやけあま(源幻)四「うき世はゆきゝえなんとおもひつゝ思ひの外はぞ
不どふる

ゆきくして(伊勢物)九ゆきくしてするがの國はいたりぬ云々猶ゆきくしてむさ
の國とちもつふさのくよとの中よ

ゆきめぐる(源柳)廿「あがらふる不どいうけれどゆきめぐりけふ其世はあふ心
ちいて(古)別友則「あたの帯のちのかたわわわるとも行めぐりてもあせんとぞ
おもふ(源すま)初行めぐりても又あひみんことを

ゆきもよ(源夜)源あさ顔廿「かきつめて昔こひき雪もよあされをそふるを
ナリ

のうきねり(新古)冬通具「草も木もふりまがへたる雪もよは春まつ梅のそまのか
ぞする(和泉式部集)上海づら鷹をるたるたび人雪ふりたり「そらよとつ鳥ぞよ

みえぬ雪もよよをる鷹をるてけるかなコレハ夜ノコキコエズ(源楨柱)十「てはろ
さへそらよみされ雪もよよひとりさえつるかさよきの袖

ゆきせり(狭)廿一上さふらふ人々の不どよといとかうあそくくとびかふ虫
鳥のやうはゆきせりのをくせある人やありけん(山家集)上ゆきせりよ一枝をり
梅がゝのふかくも袖よをみよけるか(夫)廿七「旅人のまよこの馬の行せりよ
爲家

夏野のくさをすさめやいせぬ(狭)廿四中かのあり一行せりの梢よいとよく似たるも
云々「行せりの花の折かと見るからよ過よ春ぞいと戀き(同)廿四上。中將ノ母
ノ哥「をり見をや朽木のさくらゆきせりよあかぬよひのさかりあるやと(續後

撰)戀「なごの海やととたる舟の行せりよのふり人のとすられぬかな。家集二
俊忠

條院御時とちのあかよいてあふこひといふことを(風雅)道中「我をらぬ人よくま
そかゆきせりよむをびおきつる玉の井の水(狭)廿四下思ひかけあさまかり道

ゆきせりよ心うかりのりののあもとなご只今の心ちいて(飛鳥井ノ威)万代
「ひかけさす雲の上人ゆきせりの山るのころもいくへかさねつ(風雅)旅家「ゆき

せりの衣ようつれ萩が花旅のゑるよと人よかたらん
ゆきすがら。行すがら(堀次)王昭君「ゆきすがら心もゆか別路のなふるさと
見合ハシ仲實

ゆきすぐる(古)秋上ふる「をみかへううとみつゝど行過るをどこ山よたてり
のいま道

とおもへば(後)雑閑院のそこ石山よまうでけるをさ今なんゆきまぎぬると人の
つ侍けれバ

ゆきまき(悠紀主基(代始和抄)大嘗會よ悠紀主基の國郡の定あり悠紀の齋忌とい

ふ心也神齋の心也主基ハ次といふ文字をすきとよめり次の神齋といふ心あり云々
大嘗會神膳の儀両度あるに依て後の度のをばすきといふ也悠紀主基の字和訓あり
神事契齋の心のみ也(新古)賀久壽二年大嘗會悠紀方屏風に近江國かゞと山をよめ
る(同)同天曆の御時大嘗會主基備中國中山(天武紀)五年九月丙寅云々丙戌神官奏
曰爲新嘗卜國郡也齋忌此則尾張國山田郡次丹波國訶沙郡並食卜須岐也中臣壽
詞)悠紀主基乃黒木白木乃大御酒遠○悠紀ハ齋城ノ儀主基ハ清城ノ儀ト三好義英
説○鈴屋翁説玉勝間初若菜

ゆゝ(高光集)三「あまよりのゆゝゝかるべき棚機のうらやまゝきの今夜ありけ
り(六帖)一(拾)戀二よみ「こびぬれば常のゆゝゝき棚機もうらやまれる物よぞ有
ける(後)戀一「あさゝてふ事をゆゝゝみ山井のりゝゝでりゝ影のみえぬぞ(同)
一「千早ふるかゝひきかけてちかひてゝこともゆゝゝくあらがふをゆめ(大和物)
三「ゆゝゝとていむとも今のかひもあらうさををこれゝ思ひよせてん(古事記)
下五「みもろのいつかゝがもとかゝがもと由々斯伎加母かゝそらをとめ○日本紀云
倭姫命以天照太神鎮座於磯城嚴櫃之本而祠之(源玉葛)四涙絶る時をく娘とも思
ひこがるゝを舟道ゆゝゝとかつのいさめけり(同)七るあか人とも心かけ消息がる

いとおなりゆゝゝくめざましく覺ゆればされもく聞かれぬ云故少貳のうまで
いかたもなんあかるあたら物をといふ聞もゆゝゝく(源桐つは)廿きよらよおよぞ
け給へればいとゆゝゝうおぞたり貴ニカシコム万(万)十五「青柳の枝きりおろ
ゝゆたねまきゆゝゝく君ゝ戀をさるりも(同)六十九「あやまかゝこゝいもまくもゆゝ
ゝからんと(素性集)六「まれかれバゆゝゝとおもひゝ織女よけふのおとれる身を
いかゞせん(信明集)卅「棚機の契りけん日の過をもたどふべゝやのことゆゝ
ゝく(六帖)五「名よゝおそむたのみぬべきをなぞもかく扇ゆゝゝとあづれをめけ
ん(源玉葛)六此君の十さかりよもなり給へるさまのゆゝゝきまでをかゝけあるを
見奉りて(同)葵四葵上ノうれゝきものからたれもくゆゝゝうおぞてさまと
の御つゝゝみせさせ奉り給ふ(うつは)嗟峨の院二十女御詞身ひとつさふらふたよ
ゆゝゝきゝよき事さふらふ物をかくこかき宮たち引つれてさふらふこといか
ようたてある事侍らん(同)樓の上下六云々涙のこぞれ給へば忍び給ふけゝきをゆ
ゆゝゝかゝることえいそあへ給へどいおもひきかざり(源橋姫)中ノ君形かん
まことよゝいとうつくゝうゆゝゝきまで物ゝ給ひける(同)若菜上明石姫君ノおと
どの君ゆゝゝきことを見給ひてゝのわかゝる事いとおそろゝき物よおぞ

いぢみざるを(万)十一「言は出ていも思忌やま川のさぎつ心をせきぞかねたる
(うつろ 樓の上)七上いどかなしくゆゝしく覺え給ふ(同)十四六志づかよるざりおそ
るさまいとうつくしくゆゝしく覺え給ふ(濱松)二下ひと宮のうらよろこびなき
さへゆゝさまでたちささぎこちよけかるを見給ふよも(詞花)秋花山院「たをバ
よよ衣もぬぎてかすべきよゆゝとや見んそぞめの袖(大和物)三一ゆゝしくも
おもゆるかな人をとまるとまれよける世よこそありけれ文雄云いま(源柏木)二
はしきあり
。女三宮の尼にあつんと源氏いとうたてゆゝしく御ことなり(著聞)七庭よおりた
ちたるけしきまづゆゝしくぞとえけるコハイサマ(同)十六あらかひつる侍どもめ
もあやよおやえてゆゝしくことして引出ものどらせけり(馬内侍集)「どぶ螢まこ
どの戀よあらねどもひかりゆゝしく夕やみの空(枕)十五。翁丸をいたはあかゆゝ
いさるものおしといせれば(同)十六高きけいゝをさへそきたればゆゝしくたか
一定證僧都のたけ(同)四、ちてくゑの御屏風とりたてて宮よ御らんせさせ奉り給
たかきを云處也(同)六ふいみとらゆゝしく事かぎりか(源玉葛)廿四右近いとゆゝしくもいふかなときゝ
て(後)雜二「かけていへばゆゝしく物を万代と契りし事やかなそざるべき(水鏡)
孝元天皇卷 六月よゆゝしく大雪のふりたりしこそあさましく侍りし(小大君集)

春宮よてなすびのゆゝしくけかるよそがたのつきたるを見て(源桐つは)卅いときび
よよておそしたるをゆゝしくうつくしくとおもひきこえ給へり(同)三ゆゝしく身よ
侍ればかくておそしませすもいまゝゝうかたよけかくおどの給ふ(元真集)「こび
そてぬ今のかぎりの身なりけりいきてあへらんことぞゆゝしく(中務集)「さなを
たよ契りはん日のそぎぬともたとふべしやのことゆゝしく(同)一ゆゝしくともお
もそざりけりたをわたのよせれぬ中のあらまよしよ(うつは 藏開)中ノ「山とな
る雪ぞゆゝしくおもゆるたえてこしちのものところきけ(源わか)廿九。入道ノ
心ゆくりりよ見せ奉りておやよかままへざらんとさいかあるおけきをらせんとお
もひやるよゆゝしくて(同)二十御ゆなどをよままるれあかゆゝしやとてかさそを
よよりるたり(同)澤標)卅大極殿のいつくしかりしぎしきまゆゝしくさまで見え給へ
御かたちを(同)若紫)卅めのだいであうたてやゆゝしくも侍るかか(同)四十なみ
たのとよまらぬをさすがよゆゝしければねんドラたり(同)きりつは)九いとよ此よ
のものからまきよらよおよまけ給へればいとよゆゝしくおやたり大事ニウツク
シム意
(同)わかち)下四いとかくくぬる人の世よ久しからぬためしもあるをとゆゝし
さまでおもひきこえ給ふ(同)もふ顔)五十あれたりしところよみけんものよこれ

見いれけんさよりのかくかりぬること、おぞしいづるよもゆゝくなん（大和物）三「ゆゝとていさけるものをとがためまゝといさぬたがつらきなる（後拾）哀傷道濟「ゆゝとていさよつゝめどあまるなみたかなかけととおもふ旅のころもよ（万）十二」あした去てゆふべの來まを君ゆゑよゆゝくも吾いなきつるかも（源若紫）廿君のまづ内よまゐり給てひころの御物かたりなき聞え給ふいといたうおとろへよけりててゆゝとておぞしいたり（同）すま卅御さまのゆゝとていさよらあることとてころがらいましてこのよのものとも見え給を（同）葵十それたよ人のうへよていつみふかうゆゝとていさを（著聞）十四ゆゝとていさおぞゆきよこそ（同）十七ゆゝとていさ美膳をとり出たり（源）監十かのけんがゆゝとていさをおぞしいをぞらへ給ふ

ゆめ勤（万）七ノ「むかつをよさてるもの、の樹なりぬやと人ぞさゝめきゝなが心ゆめ（同）十四」あゝきたのぬさかの浦ゆ舟出して水島よゆかん浪たつなゆめ（重之集）十五千早振いつの宮の神の駒ゆめなのりをやたゝりもぞせる（躬恒集）卅「菊の花みつゝあやなく猶もあらで人の心ようつろふなゆめ（万）廿九」一年よよそふとが舟こがん天川風をふくとも波さつなゆめ（兼盛集）廿「もるかよも花見よきつるをさかへゝあたる露ようつろふなゆめ（源）てふ」廿ゆめけいさなくをとて出給

ひぬ（空穂）俊蔭廿其琴我ことおぞさばゆめ更々よ人よみせ給ふな（同）國讓中十六大將いと物ゆかゝく給ふめりゆめ見せ給ふな（古事記）下十六「宮人のあゆひの小鈴落よきと宮人よむ里人もゆめ（允恭紀）とがたゝと由璫云とがたまを由梅補（万）十一」ことゝくの中よよませみあせ川たゆたふことをありこれなゆめ（同）十八卅四「ほどゝぎはよなきとてつゝわがせこをやいゝかはなゆめこゝろあれ（同）十四」四「汝をどと人をぞさくあるいでとぎみ人の中言きゝたつなゆめ（同）十四」一「若ろたへのころものそをまくらりよあまこれく見ぬたみたつなゆめ（万代）上（新千）天曆御「咲そむる所がらよぞさくら花あたよちるてふ名をたつなゆめ（敦忠集）」「白露のいそぎおれつるあさがほをみつとも人よゆめよりたるな（後拾）（枕）」「かづれはるあまのそをそこありとゆめゆふかとやめとくとせけん（万代）上（秋）」「天つ風あふぐともゆめ霧さつなこゝ織女のおれるよゝきぞ（万）九」こがゆきひ七日のすぎト龍田彦ゆめこの花を風よあちら（源）若菜下ノひりトゝくきこえなれ人ありともゆめこゝろおき給ふな（同）東屋五十ゆめをこがまゝくひかわさままうをどほゝゑみてのこまへを（狭）三下「まねくともおびくおよゆめ若のそゝれ秋風ふりぬ野べも見えぬよ（万）十九」わぎもこをそやみそま風やまとなるわをまの椿ふり

さるかゆめ

ゆめイサ、カ（榮見はてぬ夢）六哀れよいみどき御心さしを此中將の君ゆめよおぼ
したらせかけまさの大進の娘をいみどき物よおぼいて此姫君の御爲よいそとらお
ろりよおのれれば（榮さまくの悦び）九たれりたゞ今さやうよくちこき死をみさ
る主たちいたし入れていみんとするどてゆめよきこめしれぬを（落窪）一た死
ものこの御もぎよたませさりしをゆめさりつゝとおきて侍りどて（源末摘）
十かやうの人よ物いふらん心をへおともゆめよもちり給さざりければ（元眞集）十
「君こひてあふとみるよのありつきの夢ようれしきかひなりけり（榮見はてぬ
夢）卅左大將殿の夢にみなり奉らせ給ひて補（西宮左大臣集）「うつゝよもあらぬこ
とこそかたりらめ夢さりたよみつといわれん（万代）戀一「あふことのゆめさり
りにもなごさまばうつゝ物のおもささらま（和泉式部日記）「けされまよ今
ひぬらんゆめさりぬるとえつる手枕の袖（千載）難上、周防内侍「春のよれゆめさり
ある手枕よかひかくたゝん名こそをしけれ（和泉式部物語）「ゆめさりかきたよ
ぬると見つらめどほしぞかねつる手まくらの袖（俊頼集）「うれしきの夢さりた
よなければもかべよむりひて世を過たりな（隆信集）「いりよしてまどろむるよ

なごさめてゆめさりたよあふとみるべき（壬二）「うらみよびおのお衣れりへ

てもゆめさりたよとそれともむ（風雅）戀二 爲家「いきてよのこそれがとと成や

せん夢さりりよぬともさき世の（續千載）戀三、よみ 人しらす「おするなよむすぶ一夜のよ

ひ枕ゆめさりりある契かりとも（同）戀四 龜山院「おなと世よ見しうつゝもりひなく

てゆめさりりある人のおもりけ（發心集）ゆめれととくかる庵室をつくとてたく

みをつらひ侍りたり（同）一日の御家づと夢がましく見え侍り

ゆめ夢（源夕顔）五十いと夢れこゝちして（榮見はてぬ夢）卅かゝる夢のまど見せ

こそありけれ心う死ものよなんありける（拾）戀四、よみ 人しらす「忘れよゆめと契りしこ

とのそらうつゝよつら死こゝろかりけり（同）戀二、よみ 人しらす「夢よゆめ戀しき人よあひ

みはかさめての後のわびしかりぬり（新古）釋教 赤染「夢やゆめうつゝやゆめどわりぬ

りないりある世よりさめんとをらん補（万）十二「ぬさ玉の夜をながみりもわがせ

こがいめよいめよ見えかへるらん

補夢よとみ見る（源行幸）卅なるべき人ものし給やうよきし給れば夢よとと

るこゝち侍てなんむねよ手をおれたるやうよ侍ると申給ふ

補夢よとひ見る（宇治拾）九ゆめよとひいたるこゝちしていでいよけり

夢よも忘れぬ(源少女)五 夢よもいり給そぬ事なればあさましうおぼして

夢と死夢解更科日記六十云々ゆめと死もあせしうどもそれ事ひひとつかな

でやとぬ江談ニ夢解ノ事アリ六

夢ともかく(源朝顔)廿宮の御事を思ひつゝおぼとのこもれるよ夢ともなくほのり

よ見奉るを

ゆめち夢路源みのり十御おくりの女房のまゝて夢路よまどふこゝちして(六帖)

四(古)戀三 小町 「夢路よあゝもやれぬかよへともうつゝよひとめみしこといあら

せ(六帖)四(古)戀三 小町 「かぎりなきおもひのまゝよよるもこん夢路をさへよ人のと

がめト(後)戀六 蔭基 「あをきて枕の上よこりれよゆめぢをまたもたづねてしげな

補(後)秋中よみ 人いらす 「秋のよをまどろませのみありす身の夢路とたよも頼まざりけり

同(新拾)戀四 俊成 「うつゝよの思ひさえ行あふことをいりよ見えつる夢路あるらん(同)

同藁壁門院少將 「おもひつゝいりよねいよをかぎりよて又もむをさぬ夢ぢあるらん(同)

同法師行違 「まともみぬ夢路ながらの絶もせでつらさうつゝよのこる玉のを

ゆめぬいの神(相摸集)夢 「うたことをいそぎもせんとよとよもたゞゆめぬい

の神ををがまん

補ゆめりとよ新古 戀五 俊成女 「ゆめりとよこゝおもりけもちぎりよもこせれまな

がらうつゝからねば

ゆめがたり(新六)四 光俊 「ちらはかよあふとみるよれゆめがたりうたてちがふる人

もこそあれ(小町集)九 十 「むらなくも枕さためありけりな夢がさりせん人をまつ

とて(狭)七 上 七 「いりかるゆめがたりぞと心もことよさこけと(伊勢物)六十 いひ出ん

もたよりなさまことならぬ夢がたりを(源わか)十一 上 八 入道ノ 光いでん曉

ちりく成まねり今ぞみよれゆめがたりを(同)あかし 卅 志のびかねたる御夢が

たりよつけてもおおもひ合せらるゝことおゆるるよ(同)はし 卅七 志のびかねたる御夢が

りかむおぎやうのものゝとせがたりをるやうよ

補ゆめよゆめ伊勢大輔集ニ夢よゆめ心へたつかあゝがきのまぢかきやとよあり

ぬとあらば

ゆめの世(和泉式部集)下 「そりなさまよつけてぞかけくゆめれ世をみそてせかりし

人よよそへて(千載)雜上 覺審法師 「そぎよよよそぢの春れ夢の世のうたより外の思

ひ出ぞおれ(拾玉)四 「昔かれし友のさながら夢れ世を獨のこりてみるぞのひをさ

ゆめのたゞち(菅万)六帖 四(敏行集)十 古 二 戀 一 戀わびて打ぬる中よ行通ふ夢の

たぐちの現ならなん(躬恒集)「あそぬよもあふよもいをしてまたね、バ夢れたぐちのあれや、ぬらん(續千) 雜上「おもひねの夢れたぐちのそと、ぎはさめてもおかトこゑをさきりせや 忠顯

補 夢のたまひひ (素性集) (万代) 戀 「おれたへのまくらしたまふさばおを夢れたまひ下よりよそめ (小大君集) 小町 「よひくの夢れたまひあいたりくあり 町」
ても(町) 集同」
りでまたむとふらひよこよ (元真集) 「君こふるゆめれたまひ行かへり夢路をた

まもわれよをへよ (同) 「つらさのまさりゆく哉おもひやるゆめれたまひいりよ行らん (玉葉) 戀三よみ 「消えて、身こそいもひよなるとても夢のたまひひ君よあひそへ 人しらす

ゆめの告 (續拾) 雜上 ゆめのつけありて爲氏がもとよおくりつりそはとて云々

夢のうきそ (河海) 引 「世中のゆめのわたりのうきそ、く打わさ、つ、ものをこそおもへ (新古) 春上 「春のよれゆめのうきそ、とたえして峯よこる、よこぐものそら **補** (新千) 戀四 「うつ、ともわりぬそれ世のおもかけをなすこひわたる夢のうきそ (同) 伏見院 「おもかけのみをかぎりのとたえよてあふよむか、きゆめのうきそ (同) 「一夜みゆめのうきそ、そのま、よあややりへる戀路ある

らん (同) 長秀 「とたえともいそんかたを契りなひとよをかけ、夢のうきそ、○夢のうき橋の地名より出たり後、只夢の事、用る來れり河海抄又細流も引る古歌、世中の夢のわたりのうきそ、く云々 此哥の吉野、ある夢の回、渡せる浮そ、也これを源氏物語の卷の名、夢のうきそ、と、たる、只夢の事なり是より後、ひひたふる、夢の事、のとなり來れり万葉集三、三十、幸吉野宮時、「我ゆきは久、あたら夢のわた瀨、と、からむて淵、ある、りも懷風藻、從駕吉野宮、云々葉黃初送夏桂白早迎秋今日夢回淵遺響千年流 吉田連宜 大和志、吉野夢回淵在御料庄新住村俗呼梅回 云々 ○ (玉勝間) 六廿一丁説アリ

補 夢のおもりけ (玉葉) 戀三 後二條院 「こひ、さのねてやわさる、と思へ、さまたなでりそふゆめれおもかけ

ゆめのやう (源 玉葛) 廿 いとく夢のやうなり (同) 帚木 四十あぢきなく夢のやうよてそぎよ、かけきを又やくとへんと 云々

夢のまどひ (千載) 釋教攝政 「人こよかせる、夢のまどひよてさむれば同ト心かりけり 前右大臣

夢のこ、ち (源 玉葛) 廿 皆おとろきて 夢のこ、ちもするるか 云々

補夢のせきもり(續拾)戀二後鳥羽院「うつゝこそぬるよひくもかたからめをたよゆるせゆめのせきもり」

補夢さごがく(榮うたかひ)一人々も夢さごがくきこえさるよ

○ゆめみさごがく(榮見はてぬ夢)六粟田殿夢見さごがくうおそまゝ物のさと

などそればや御こちもうきたるさまよおだされて陰陽師かどよ物をとせ給

ふよも**補**源浮舟(源)夢見さごがかりつといひなまなりけり(同)廿こよひゆめ

さごがく見えさせ給へれば(同)七十めのだあやく心をりのするらなゆめも

さわがしくとの給せせりつ殿の人よくさふらへ

ゆめく(必々)皇極紀(源朝かほ)十努力努力(源朝かほ)十いとかく世のためよかりぬべき

ありさまもらし給ふをよゆめく(狹)廿三かこよひ筑紫の人曉よなんゆめく

たぐへ給ふをといひければ(宇治拾)十みづから待るとか人よゆめくゝおらせ給ひ

そ(源推の本)十ゆめくからくよからぬ方よもてあし聞ゆな**補**同(源浮舟)

四十かくかん思ふゆめくといひやり給つゝ

補ゆめり月(和名)一弦月(由美)新古(秋上)堀河院「まきまやたかまど山の雲間より

ひりりさしそふゆめり月の(新六)一衣笠(内大臣)「山のまかりなきわたるくもまより

かけのりなる弓張の月(平家物)頼政(頼政)射(頼政)ナル「ほどぎは名をも雲るよあぐ

るうあと仰せられけたりければ(頼政)弓張月のいるままりせて

補ゆめとり(著聞)十二弓とりは法師をたてたりける(云々)此弓とりの法師が

補ゆめひく(著聞)九弓つや弓引をさらけり事かなをさりけり(云々)さしも

の弓ひりぎの射あてさる事

補ゆめりいつり(中臣壽詞)由志理伊都志理持齋清明○志理のゆめりさよま

さりのさりの如きこと聞ゆ

補ゆめゆん(由旬)佛經(多)年山紀聞(委)一由旬ハ日本里數二十四町餘也

ゆめ(源)源(源)木立おもしろく前裁かさをりくゆめをつくりたり(同)葵

卅ゆめいあくまでつき給へるものを(同)わか紫(廿)落くる水のさまかどゆめある瀧

のもとあり(同)末摘(十)頭の中將おさしてこよおれ御あさいりなゆめあらんか

しどこを思ひ給へらるれといへ(同)帯木(八)さうなくお出たることわざゆめをか

ららぎとえたらん(同)桐(つは)四何事もゆめある事のふいふ(同)横笛(廿)今よそ

のゆめをなんえ思ひ給へより侍らねばゆめづき(同)帯木(五)さうあきをさびをも人

まねよ心をいることもあるよおのづからひとつゆめづけていづることもあり

ゆゑ常ノ故(夫)廿五「あきのよ此月ゆゑえたる浦の名をくもよあらしにつけては

ぐなり(拾)冬兼盛「あぐれゆゑあづく袂をよそ人のみぢをそらふをせりとやみん

(源旗柱)廿人ひとりを思ひかゝづき給せんゆゑの事とりまでもよほふさめしこそ

あれと(同)廿六こゝよさへうらとらるゝ故なるがくるしきことゝあけきたまふを

(万)廿五人づまゆゑよ吾こひぬべし(同)卅四「あさぎりのおろよあひみし人ゆゑ

よ命しぬべくこひわたるかも(同)「紫のよほへるいもをよくゝあらば人づまゆ

ゑよこれこひめやも人ツマナル物(万)卅九「あま雲のゆきかへりかんものゆゑよ

思ひぞこがする別れかかゝみ物ナガ(同)十九「どしのおあきかくものゆゑほどゝ

ぎをさけばあぬをくあそぬ日をおほみ物ナル以下ナカラ(万)十一「いくさく

もふらぬ雨ゆゑ我せこがみおのこゝたく瀧もどゞろよ(同)卅七「ささきとるあま

のともし火よそよたよみぬ人ゆゑよこふるこのころ(千載)戀三皇嘉「なよそえの

芦のかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや戀こたるべき(拾玉)「冬くれバやく炭が

まの煙ゆゑよそよあるゝ大原のさと(同)「うれしさをあらぬものゆゑあのお

とて涙をそよつゝみつるかか(同)「あかがちよあよみたるらんかるゝやのこ

さても風のふかぬものゆゑ(清慎公集)「花をよきむをびおさつる袂ゆゑ露もこゝ

ろもどけせみえける(万)十五「これゆゑよおもひかやせを秋風のふらんその月あ

らむもの故物ナハ(空穂國讓)下十五「いもせ川をませかりぬる宿ゆゑよ涙をもち

ながしつるりな(源葵)二十「そりなしやひとのかざせるあふひゆゑかみのゆるし

けふを待ける宜長云葵の意あり(更科日記)「ありつきをあよゝまちけん思ふこ

とあるともきりぬかねのおとゆゑナルニ(夫)四家隆「天の川おひぬものゆゑさくら

花けふいなぬりのそとめよぞあふ(蜻蛉日記)四かへりこどをるをりせぬをりあり

けれバ「かくめりとこれバたえぬる篠蟹の糸ゆゑ風のつらくもあるりな(拾)秋

「まねくとて立もとまらぬ秋ゆゑよあされりたよる花をよさかか(古)上(六帖)五

「紫のひとと故よむさし野の草皆ながらのみあがらあそれとぞみるあへてもあつ(後)二

男の文おほくかきてといひけれバしらす「そりかくて絶かん蜘蛛のいとゆゑよ何よ

りおろくかゝんとすらん(六帖)上六「をみかへし一本ゆゑよ秋の野の千種あがらよ

花をおもふりか(同)下五「まのくのあのおもぢぢりたれ故よみたれをめよしこれ

からあくよ(同)上五(万)十六「あひおもそぬ人のゆゑよあ玉の年のをかぐわ我

戀をらん(源若紫)卅何りあさく思ひ給へん事ナルモノナドウシテ事故かうをきよゝささまをよえ奉ら

ん(同)卅「そのりゝやいりゝありしゆふたすき心よかけて忍ぶらんゆゑ(同)

あゝ一八 人りむもおぼされざらんものゆゑこれにいととき物おもひをやそへ
 心(忠見集)「おそくさく藤の花ゆゑいつりくとこれさへ松よかりぬるりか(家
 持集)十六(万)十八 君ゆゑよ我戀をれば我宿のをざれうごり秋風ぞふく(家持
 集)十八「いたくもふらぬ雪ゆゑ久方のあめよりそらなくもりあひつ(躬恒集)
 上ノ(六帖)「をいめどもつひに散ぬるもみちゆゑ風ふくことと物思ふかな(貫之
 集)下ノ「かひがねのまつよ年ふる君ゆゑよこれのかけきと成ぬべらかり(順集)
 廿「おりたてばうらまでひつる袂ゆゑ何うちかへを荒田なるらん(元輔集)廿一「お
 そくとくひらくる枝の花ゆゑよ身をもうしとの何りおもせん(補)万)十二「朝りけ
 よとが身のかりぬかぎろひのそれうよみえていよ子ゆゑよ(同)廿九「おのれゆ
 ゑのらえてをればあけ馬のおもたらくたよのりてくべし(同)廿二「我ゆゑよ
 いたくなこびを後つひよあそとといひしこともあらなくよ(同)三十四「さきも子ぐ
 やどの橘いとちりくうゑてしゆゑよ物ナならむのやま(同)廿七「ちりひちのかぎ
 よもあらぬこれゆゑよおもひよぶらん妹がかなしさ(後拾)春下 内大臣 「をいめどもち
 りもどまらぬ花ゆゑよさるの山べをそみりよぞさる(同)十六長哥云々「ぬべき我
 ゆゑ(拾愚)上「山がつの身ためためようつ衣ゆゑ秋のあそれを手よまきすらん(同)

同「ながくしもむむをばざりけるちぎりゆゑかよあけまきのよりあひよけん(同)同
 「おくれとどちぎらぬ秋のこかれゆゑこととりなくも忘る袖かな(同)同「月ゆ
 ゑよあまりもつく心かなおもへばつら秋のよのそら(同)同「月ゆゑよさ、せ
 ばあそしこと、もん柴のあみ戸よこれまたせども(詞花)雜上「ふかくも頼まざ
 らかん君ゆゑよ雪ふみこけてよあ、ぞゆく(古)春下、よみ「待人もこぬものゆゑ
 ようぐひそのなきつる花を折てけるか(新古)夏前太「郭公なきているさの山の
 せい月ゆゑよよりもうらめしさかな(万)十五「わがゆゑよ妹なぐくら風早の浦の
 おさべよ霧たなびけり(同)廿三「いのちあらばあふこともあらむとがゆゑよまた
 なおもひそいのちたよへ(新後)雜上、權律「いたづらよちりなばをさき花ゆゑよ
 我ためから老人をまつか(万)十四「いかねよかみかへりそねとがへよゆゑ
 のかけせもこらよよりてぞ
 ゆゑよ(源横笛)九女ハ猶人の心うつるさかりの故よしをもおぼろけよてのち
 さまトうこそありけれ(同)葵)廿猶ゆゑよすぎて人目よみゆをかりなるハあまり
 のかんも出来けり(同)帚木)二あまりのゆゑよし心をへうちそへたらんをばよろこ
 びよおもひ(咲)故トハ種姓ナドニヤ由トハヨセアルヲ歎、契冲云万九見菟原處女墓

歌ノ終ニ處女墓中爾造置壯士墓此方彼方ニ造置有故縁聞而雖不知新裳入如毛哭泣
鶴鴨ツレカモコノ故縁タトヘバ眼耳ヒニ清淨ト云ガコトク一義トミユレハ今のゆゑよーモ
アマリノコエヒアマリノヨシヒ云ヒテハ文章モワロクコトワリモ聞エチバカクハ
イヘルナルベシヨロコビニオモヒハ俗ニイフヒロヒモノ、心也補(源 帚木)廿人
もたちまさりこゝろさへまことよゆゑありと見えつゝ

ゆゑづき(源 螢)十手を今こゝ故づけたらバと宮のこのまゝき御心よいさへりあ
かぬことゝ見給ひけんか(同 夕顔)六をこもりとなくかきまぎらひたるもあて
こりよゆゑづきたれば(同 末つひ)初をこゝゆゑづきて聞ゆるわたり(同)廿古代
の故づきたる御さうぞくかれと(同 釋標)七手あどのいとゆゑづきてやんをとなき
人くるゝやかるを

ゆゑあつかう(源 花の宴)八かのゑるゝの扇のさくらのみへがさねよてこき方よ
かぞめる月をかきて水ようつゝたる心をへ目かれたれと故をつかゝうもてあら
たり

ゆゑある(源 帚木)廿人もたちまさり心をへまことよ故ありと見えぬべく(同 胡蝶)
十すこゝもゆゑあらん女のかのこより外よまた言の葉をかすすべき人こそ世よ

おやえね

ゆゑさわり(空穂 あて宮)七よろづのゆゑさこりをゝのぎておやゝ立給へる御参り
のびん事此たびせせなりあバ終よせせなりかん事とおやえよ

ゆゑく(源 総角)十御供の人々よも故々(き)着をさしていざさせ給へり(同)
朝のほ(二)廿内侍のかみこそいらう(く)く故々(き)方の人よまさり給へれ(同 少女)

五十かくどりあへむおもひより給へるゆゑ(く)くさかどををかく御覽申(う)つ
六(上)ノ(五)いと清け(き)やうぞかせて云々扇さ(く)く具(た)たるさまいと
ゆゑ(く)く一年四十をかりかり(同)下(二)いとあてをかよゆゑ(く)く(き)聲(て)云々(源)

やとり木(初)さふらふ人々のかりをがたよりとめ云々故々(き)さまよてな(給)
へり(同)を(と)め(八)四十云々との給をさる御有様こよなくゆゑ(く)くおま(ま)ま
補ゆび(指)躬恒集(一)をぐ(く)く一年をいくらとかぞふればゆびいとかくもおい(ま)け
るか(か)

補ゆひ(堀百)夫(七)源隆(一)のこる田のそ(十)過トあを(た)ゆひもやととでさか
へどりてん(注)ユヒハ賃ヲ取テ人ノ用ヲキク物ナリタトヘバ筆耕ヲトリテカクヲ
バ詩ニモ庸書トイヘリ庸ノ字ヲユヒトヨム當世ノ日庸トテヤトハレアリクモ此類

也(冷泉爲尹卿千首)「そらろよもたらぬよまたのさかへ草ゆひの手まをるほさた
よもか(甲陽軍鑑)延喜「この里よゆひする人やかかるとらん三ふたつまでさか
へとらぬの〇弘訓云陸奥出羽よていたがひよをる事をゆひといふ互よ按摩ををる
をゆひあんまといふ類かり

ゆひく湯ヒ(盛衰)卅九御湯ひき給へと申を云々女湯殿のゆよ入り湯とり水とりか
どしてひかせ奉る

補ゆひくら結駁(空穗吹上)上九しろかねの馬よぢむのゆひくらおきて

ゆひめ(堀次)蛭仲實「野風のみさびしき旅のくさ枕やがてゆひめよまりと」をかく

ゆせり(うつほ 藏開)上二其樂を上下ゆせりてそれバ(同 樓の上)下ノいであかの

京極どのを世中ゆせりてめづらかかるさまよろうをどつくらせ給ふと承るを(蜻
蛉日記)中。高明ノ人よも見え給てで逃出給ひよけりあたをよかん清水よなどゆ
せりてつひよさづねいで、流し奉るなどきくよ(源みをつくし)廿世中ゆせりて上

達部殿上人われもくどつかうまつり給(同すま)廿世中ゆせりてをいみ聞ゆ(同

若菜)下五院の内ゆせりちておもひおけく人々おろかり(同あふひ)廿所々の御
とふらひの使を立こもこれとえ聞えつがゆせりみちていととき御心まごひご

も(同をとめ)十もろこしよもてわたりつさへまろけかる世のふともありと
かんその比世よめでゆすりける(榮 布引)卅しをよ齋宮の御禊とて世中ゆせりて
いそがせ給ふ(同 紫野)十世人いとときみものよかんしゆる世ゆすりさるといなり
由須理

(万)廿二大海の磯本ゆすり立波のよらんとおもへる濱のさやけく(夫)九「あ
つ山の椎のまことよとりつきてまのまもかくゆせる蟬りか(同)十六「さらぬた
よ波もてゆせるあつろ木よかぐかけたる宇治の柴おね(枕)十七らいもんよむり
ひてろぎちがふもささりゆすりみちて云(源 若菜)上ノこ、らの男女かみも

ゆせりみちてあきとよむよ

ゆせる(源あふひ)廿あやしきよ御ゆせる参り(同 東や)卅女君の御ゆせるのそどか
りけり云々けよおそしまさぬひまよよこを例のまませあやしう日頃も物うがら
せ給ひてけふ過ば此月の日もか九十月のいりでりいどてつかうまつらせつるを

とたいふいとろが(四季物語)四月主上御汗をへさせ給うて(歌林四季物語)夏
七條の肩くりて御ゆせるまらせらるゝもをさなきことこのとてとらひのゝ
しる云々天よりふさつの龍あまくたりてゆせるまらせしよりことおこりため

いどかん(發心集)五ノ先所よゆするまうけせよ物へゆかんと云て髪洗ひけづり帽

會甫佳言長覽 卷之四十一 八十一

子かんさしけるけしきやちりたりけん妻かりける人心えてさめくどかん泣ける
(つれく) 下ノ五 十五段 よき男の日くれてゆをる

ゆをるつき (新古) 戀三入久くくまうでこざりける比びんかきて出けるゆをるつき
道撫政 道撫政 の水入あがら侍けるをとて **補** (雅亮装束抄) 泔杯 ゆをるつきの水いどのむまびぬら

さんれうなり

湯をるつきの具 (うつは 藏開) ゆをるつきのぐあと奉れ給ふ。 トノ#装束コツヘ

(源わか) 上ノ 卅四 夏冬の御さうぞくかうぞくせりのそこ御をりゆをるつきかへけ
のそこなどやうの物うちくきよらをつく給へり (花鳥) ユスレウ+ 泔器有臺並蓋 (弄花) 鬘

さらひのさぐひあり

補 ゆをく (著聞) 九箭をもちたるは死たる牛ゆをくとそたらきて腹のうちよ

り大の童打刀をぬきてそりいで、

増補雅言集覽卷之四十八終

